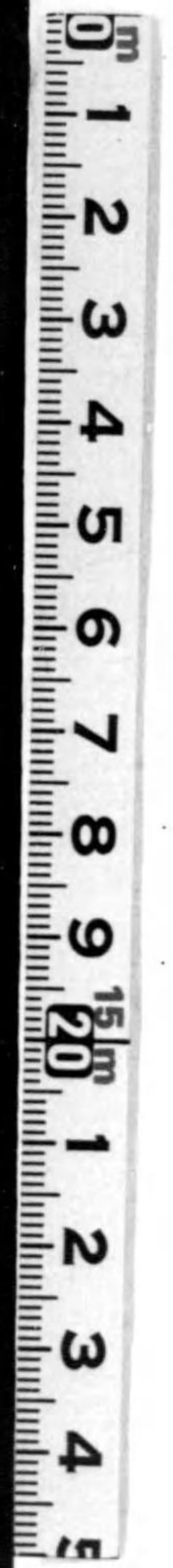


290. 9-Y92ㄅ



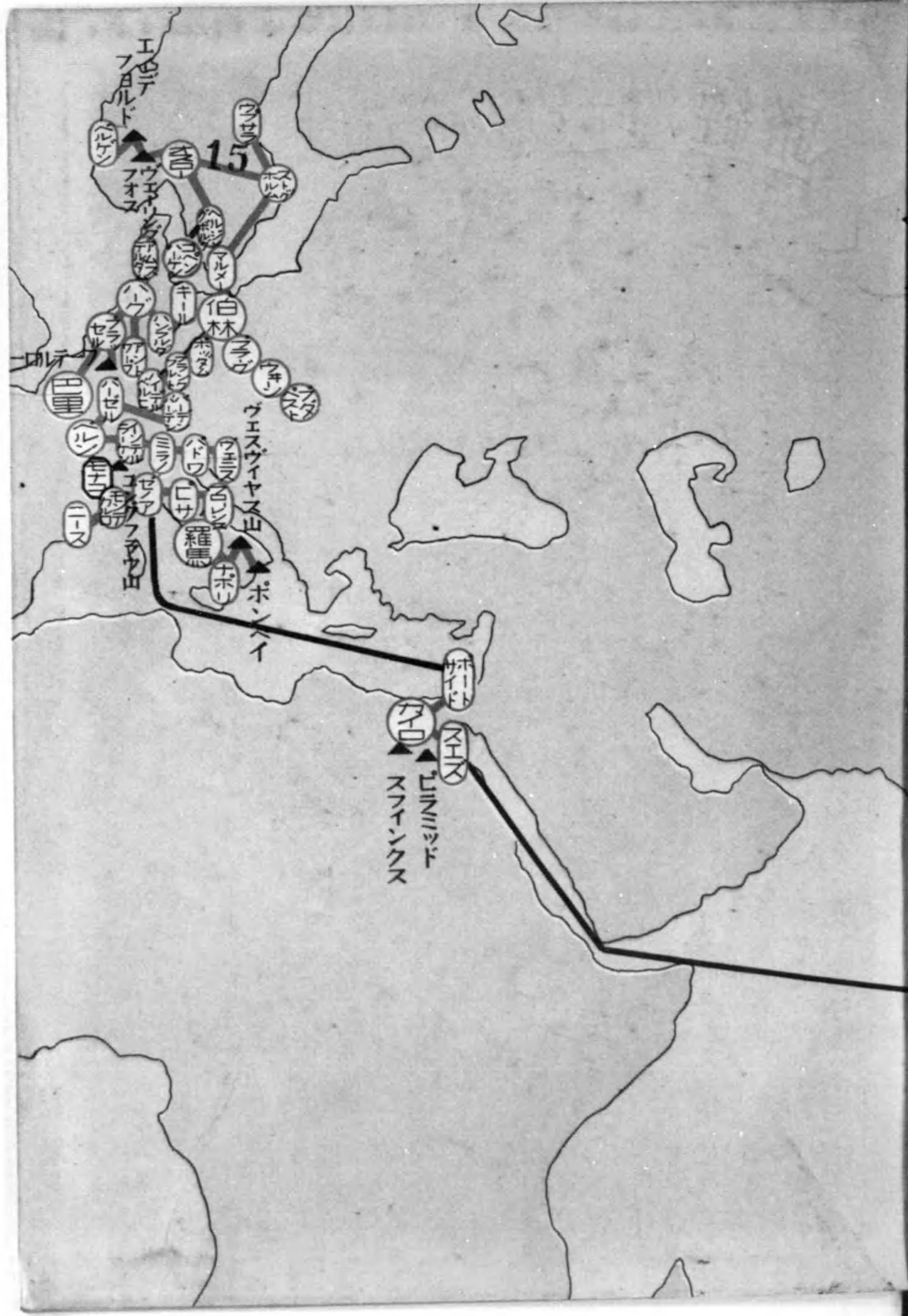
1200500732814

09
2

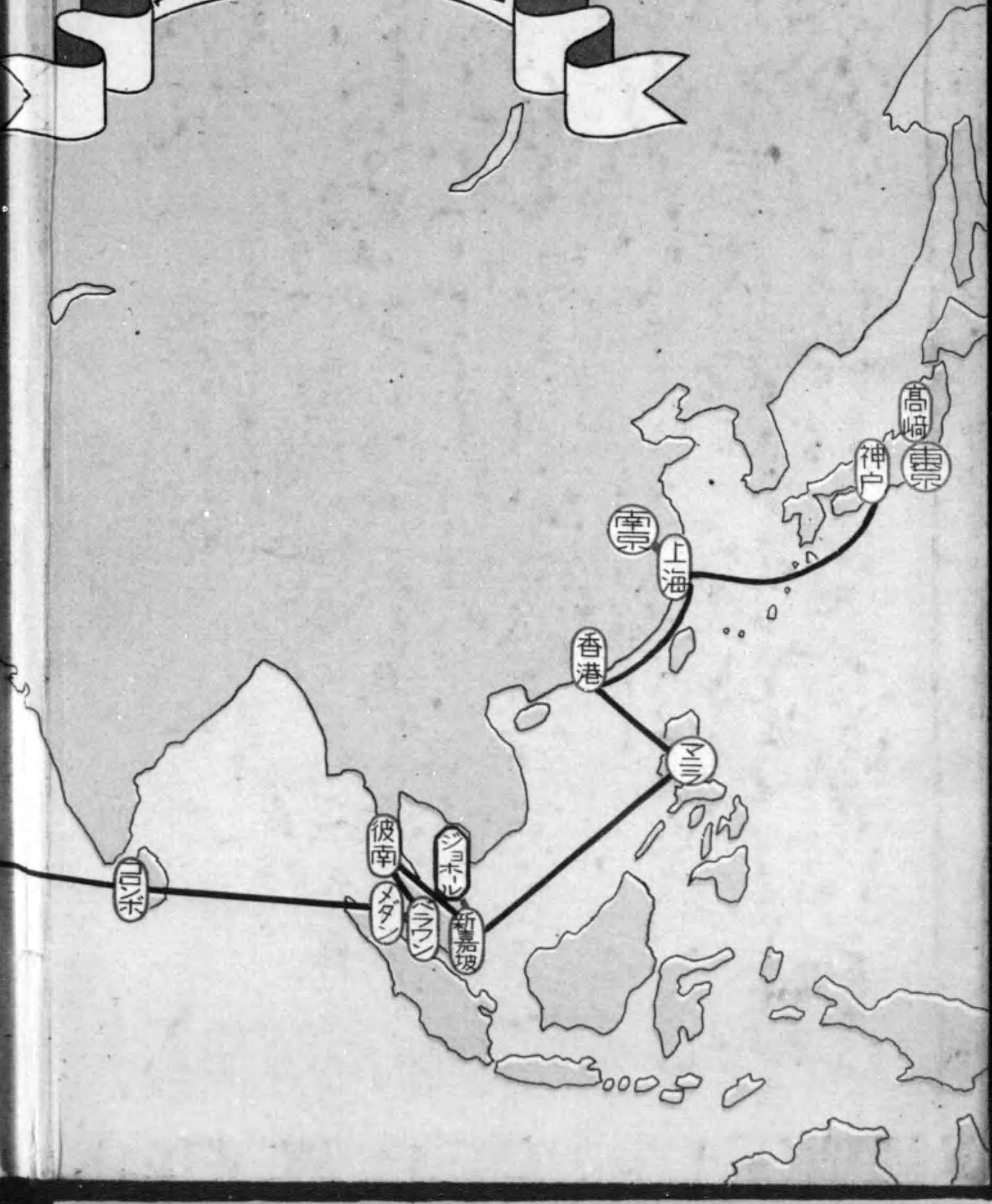


始

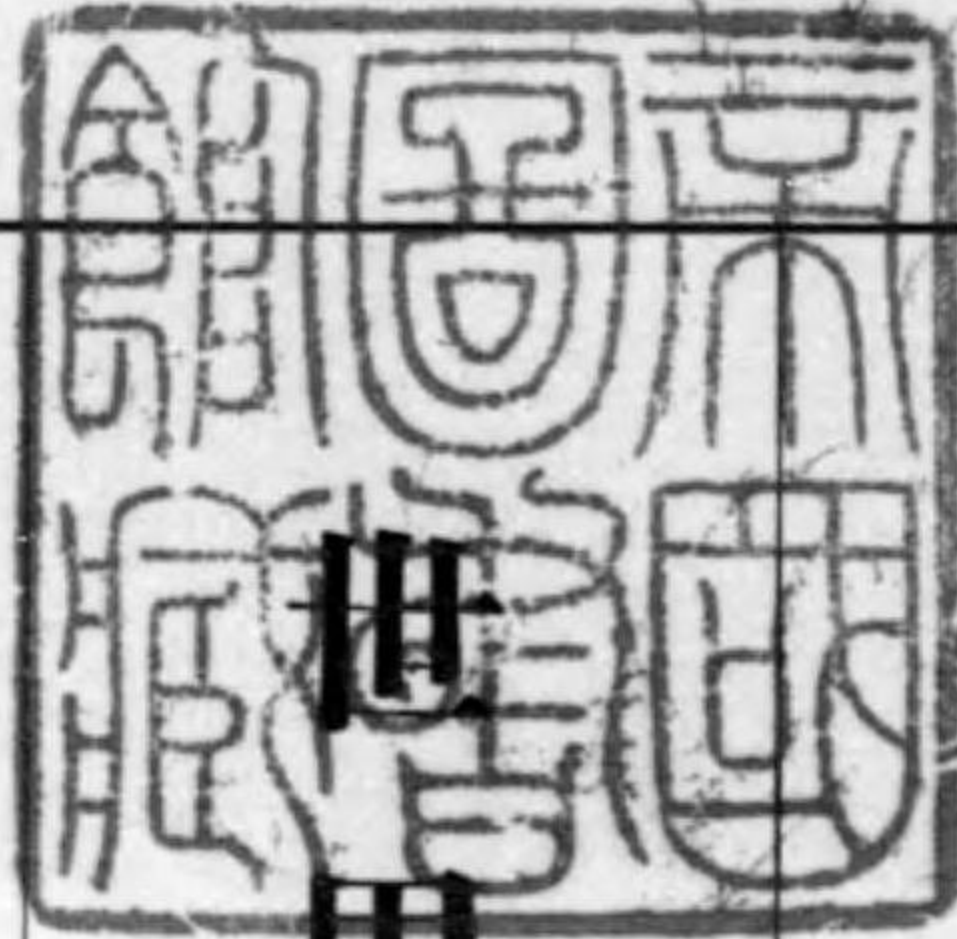




世界一巡経路



290.9
Y92

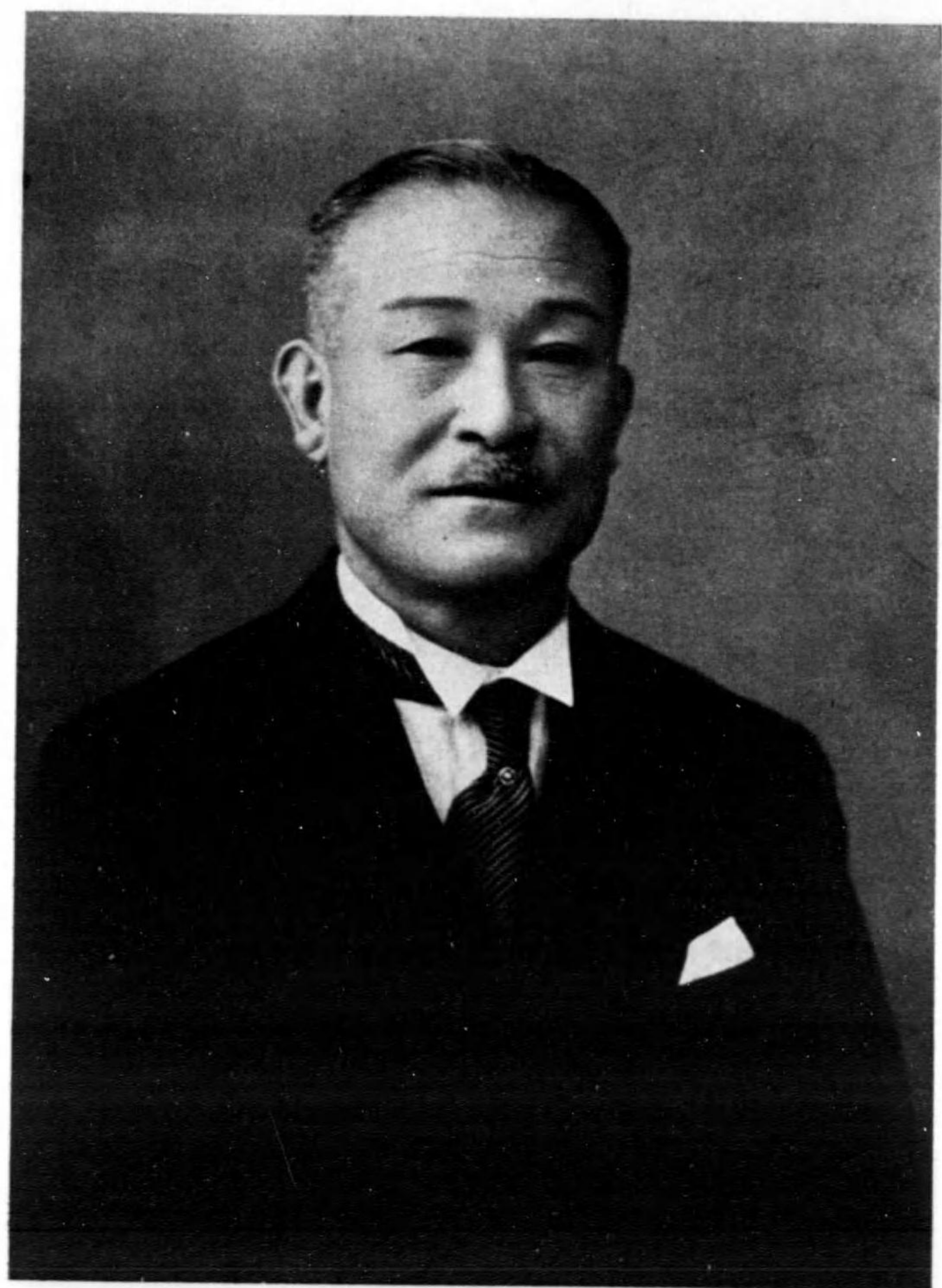


吉野藤一郎著

世界一巡紀行 全



株式會社 吉野藤商店東京店刊



吉野藤一郎



922
41

次

世界一巡紀行 目次

序 川崎克

はしがき

西航隨處篇

伊太利・南佛・モナコ篇

瑞西篇

獨逸・チエツコ・奧地利・洪牙利篇

瑞典・諾威篇

丁抹・北獨篇

一

八九

一二七

一三七

一八五

二四九

和蘭・白耳義篇	二七七
佛蘭西篇	三〇一
英吉利篇	三四五
大西洋航海篇	三八一
亞米利加東部篇	三九一
亞米利加中部篇	四五七
亞米利加西部篇	四八三
太平洋歸航篇	五五九
附錄・雜纂	五八五
世界一巡日程表	六〇五

編輯後記 吉野秀雄	
見返し 世界一巡經路二面	
挿入別葉寫眞 著者肖像二種	
目次 終	

序

吉野藤一郎君は、我が日本貿易振興會主催第六回世界一周實業視察團に参加して、昭和十二年六月より十月に互り、海外二十數箇國を歴遊して來られたのであるが、同行者たる本會専務理事木下乙市君の話によれば、君はこの時齡六十三で、一團三十一名中の最年長者なるにも拘らず、その智識慾、その觀察力、その執筆熱は、壯者を凌いで異彩を放ち、しかも毫も弛緩せず、終始一貫この態度を把持して飽くことを知らなかつた絶倫の精力と克己敢爲の精神に至つては、團中君に比肩する者のなかつた事實に驚嘆を禁じ得なかつたといふ。

君はその旅信を續々雑誌に發表して讀者の賞讃を博したが、今回その全篇を一書に纏めた「世界一巡紀行」を通覽するに、それは何より

も先づ、君が強靱な意志の持主であり、またその熱情が青壯年者に優るとも劣らぬことを物語つてゐる。纔か百三十餘日間に世界を一周すること自體既に容易ならぬ仕事であるが、君は旅中零細な時間を活用して一日平均二十枚の原稿を作り、遂にこの六百頁の大冊を成就した。言ふは易く行ふは難し、長途の旅行の繁忙と勞苦を知る者は、これに對して驚異の眼を瞠らずにはゐられぬであらう。予は茲に於て、成程君は確かに感嘆に値する人物なりと稱へざることを得ない。

君の旅行は日支事變の勃發と期を同じうし、爾來四箇年間は第二次世界大戰の渦中に過ぎた。我々日本國民が大東亞共榮圈を目指して勇往邁進しつつあるの秋、この「世界一巡紀行」が最近の歐米各國の一般事情を審かに傳へ、君の眞摯な氣魄が讀者の海外認識への關

心を深める上に極めて剴切な刺戟を與へると共に、またおのづから日支事變前後の世界狀勢を比較して轉た感慨を催さしめずにはおかぬ點、洵に時宜に應つた出版物といふべきであらう。これ予が君の勞を多とし、而して本書を江湖に推薦する所以である。

昭和十六年八月

前日本貿易振興會會長

川崎 克

は し が き

今年昭和十六年二月四日夜折から第二十二期決算總締括りのため高崎店へ來集してゐた悴三人五店幹部數名と一仕事片附いての會食の席上、東京店の五十嵐支配人から次のやうな申出があつた。

明治三十九年以來の長い歴史を有つ「吉野商報」とこれを受繼いで九十號まで發行した「吉野藤マンスリー」が當局の雜誌統制の意嚮に従ひ、この一月號を以て廢刊するに至つたことはまことに残念である。が、それにも増して残念なのは、同誌に連載して内外共に愛讀された會長の「世界一巡紀行」が、亞米利加上陸のとこゝろで打切られ、遂に完結を見なかつたことである。就ては東京店の一事業として、何とかこれを取纏めて一書を刊行したいと思ふが、默諾しては下さるまいか。云々。

何分突然の話ではあるし、バルブ節約の國策上の見地からいへば、この際數百頁の大冊を編むなどはなるべく遠慮すべき事柄でもあるので、余は一應つとめて辭退せ

ざるを得なかつたが、五十嵐君重ねて曰く、

罇もたひ・深田兩副支配人の決意も固く、既に社長の許可をも得、實は印刷所とも夙に交渉を済ませてある。云々。

そこへ、同席の本間高崎店支配人泉京都店支配人からも熱心な賛意が出たので、事に及んでは諸君の發案に逆らはずのもまた不可なからうといふことに決り、整理編輯・校正裝釘意匠等の一切を擧げて秀雄に委嘱した次第であつた。

實業を絶對の生命として他を顧みる暇なき余にも、たつた一つの趣味がある。それは煙霞癖だ。商賣上の必要にもよるが、余は日本國中足跡普ねからぬなく、滿鮮には二回遊び、北支・臺灣をも巡り、それも世人のあまり往いて見ぬところを熟知するのが余の些細な自慢の種であるが、余はまた一方幼童の頃から地理・歴史の二科目にいたく興味を湧かし續けて來た者で、旅中或ひは地勢・田園・人情・風俗を視察し、または有爲轉變の相を偲んで、腦裡の映像を實地に當つて確かめることを無類の愉樂とした。嘗て羸弱蒼白の少年であつた余に健康を甦らせてくれたのも旅行であれば、後年にながしかの處世の智慧の獲られた點でもまた旅行に負ふところが甚だ多かつた。

昭和十二年、余が日本貿易振興會の世界一周旅行團に参加して、四箇月半に互り海外二十數箇國を巡り歩いて來たことも、己れ本來の性癖が偶々好機に乗じて實現されたといふだけのもので、何等珍とするに足りぬ茶飯事ではあるが、ただ余がこの旅行に一種特別な緊張を感じたのは、いふまでもなく、見聞を海彼に擴めることにより、我が大和民族の發展興隆の將來を再認識したためであつた。外國を知ることはいち我國そのものを識る所以であることの實行を期したためであつた。余は例の如く、寸時も休まず左顧右眄した。都市・山河・海港・島嶼を凝視し、舊蹟・廢墟に興亡の跡を追懐し、旺んならんとする國家と衰へんとする國家との民族性を甄別し、そしていかなる場合にも、これらを祖國日本の諸現實と相對比することを忘れなかつたつもりである。極端にいへば、太平洋航行中視界一物もなく、水平線上の雲影をぼんやり眺めてゐた時でさへ、余はその雲と日本の雲と形色のどう異なるかを見てゐたといつても毫も差支へないのである。

本稿はもと「吉野藤マンズリー」の編輯者秀雄の希望によつて同誌へ寄稿した通信の集録であり、その通信たるや匆忙の間一氣に書き飛ばしては投函したもののみな

る上に、しかも余は文學を解せず學術に無縁な碌々たる一老商人にしか過ぎぬ者であり、これを大方の前に差出すについては、内心恐懼を禁ぜぬのではあるが、ただ本書を手にせられる人々が、若しも余の心事に同情を惜しまれぬならば、祖國を愛するがゆゑにこそ余がいかに慘澹として克明に外國の事情を見極めようと努めたかの熱情を諒解し給ふであらう。それが延いては、青壯年者を刺戟して、心眼を全世界に放たしめ、氣宇宏大な性格を養ふの因縁ともなるならば、余の本願成就これに超すものはない。

余は本稿を作るために、旅中酒を節し、且つ全く夜遊びを廢し、毎朝他の團員より二時間早く起き出でて、前日の覺書を通信に書き直すことを習慣とした。ホテル・船中車中と場所は變つても、余の意志は變らなかつた。最初余をひやかした人も、中途では眞顔になり、最後には一本の寄與を乞ふといふ有様であつた。余も折々時間の不足から、述べたいことも述べきれぬもどかしさに惱んだが、しかしともあれ、茲に見るが如き體裁を整へ得たことを余は秘かに満足とする。

想へば、かの蘆溝橋事件の突發は、余が東京驛出立の十九日後のことに屬する。余

等は七月八日コロンボに寄港した際無電でこれを知つたが、やがて日を逐うて紛糾は深刻化し、英吉利亞米利加に於ては、遂にただならぬ氣配を感じさせられて歸朝したのであつた。爾來四年間の國際關係の幾變轉については改めていふまでもない。余は旅中、獨逸國民の意氣と佛蘭西國民の廢類の對照を見、また獨逸が英吉利と歐洲の覇權を争ふ日の遠からぬ豫感をも記したが、今や歐洲戦争は日支事變と關聯し、日獨伊に對する英米ソの抗立は、愈々劇化の一途を辿つてゐる。我々は最早舊日本に跼踏して晏如たる能はぬのだ。北進よし、南進可なり、須く大東亞共榮圈の大理想に向つて、歩武堂々の進展を劃さねばならぬのである。

諸君子の御健康を祈り、本書への御批評を冀うて、この拙きはしがきの筆を擱く。

昭和十六年八月三日

越山道人 吉野藤一郎

西
航
隨
處
篇

昭和十二年六月十九日より
七月十九日まで

「第一信」ホテル・ニュー・オーサ カにて認む

カバンの蓋をあけたりしめたり



六月十九日。待ちに待つた世界一周旅行の壯途に就く日だ。
さうが血湧き肉躍るといつた氣持だ。
と、日記に書き加るに先立ち、今日の出發に至る
までの経路を掻いっつまんで記しておく。

二月下旬、第十八期の決算を終へ、第十九期の方針も決定
して、昨やと一息ついたところへ、日本貿易振興會（以下單に
「會」と略稱する）の旅行部から第六回世界一周旅行に加入し
たいといふ勸誘のパンフ
ットが届いた。

俺の心は俄然動いた。若しこの機會を逃したら、母は益々
老い込んでしまふだらう、いや母ばかりではない俺自身にし
てからがいかに不死身だと威張つても六十三といふ齡には勝
てずいつ元氣が衰へゆかぬものとも限らぬ、それに今のとこ
ろ家族も店員も無事平穩だし營業も大體順調だ、去年の秋四

十日間北鮮・滿洲國・北支を旅行したが一日として不快な日な
く一度として飯のまづいことはなかつた、今度はその三倍の
日數がかかるがあの調子でいけば蓋し何のこともなからう、
こんなわけで三月の末俺は出掛けることにきめた。

扱て決心した上は周囲の者の承諾を得なくてはならぬが、
いひ出したからには挺でも動かぬ俺の氣性は先刻皆が呑み込
んでゐるので、老婆でも長男の藤作でも一言の文句もない。
ただ困つたのは身體の弱い母で、なかなか應じさうにもな
い。「わしを置いて行くつもりかい？ ロシヤはあぶないさう
だよ。」などといつて淋しさうに顔を曇らせてゐる。その中、
四月二十五日に祖父の五十七回忌と祖母の二十七回忌を富岡
の本宅で營み、序に今秋行ふ筈であつた母の喜壽の祝をこの
機會に繰上げ一族二十數名を集めて盛大に催したのがいたく
母を喜ばしたのと、だんだん氣候も暖かになり母の身體の調
子もよくなつて來たせぬか、「そんなに行きたいならよく氣を
つけて行つて來いよ。」とやつとのことで母の許しの言葉を
得たのが五月一日であつた。

直ちに入會の申込、旅券下附の手續、會費の拂込、磅・弗の



(者著央中) 會行壯店京東・日五十月六

購入。その他あらゆる準備。六月十五日には東京會館で團員の顔合せ。——かくて一切の用意は出来て、毎日々々老妻や娘を相手にカバンの蓋をあけたりしめたり、いそいそとして出發の日を待ちこがれてゐたところが、明後日出發といふ土壇場の十七日夜七

のやうな興奮やらで何が何やら無我夢中で過した。五店所在地及び種々の關係による壯行會・送別會の類は、身體を損ずる掛念があるばかりか、俺は元來かういふ形式的なことが大嫌ひなので一切お断りして、すべて無事歸朝の際の歡迎會に譲つて貰ひ、ただ高崎・東京の二店で店員連と簡單に會食したのみであつた。

高崎驛の出發と東京驛頭の大雜沓

十九日朝、妻・三郎・五郎・和子・洋太郎・店員中野、それに越後からわざわざ見送りに來られた樽大人と共に、新町々内有志・同青年團・新潟縣人會の人々とその團旗に護られて驛へ向ふ。フォームを埋める見送りの方々凡そ四五百名、自分でいふのものをかしいが近來の盛觀、然るに肝腎の俺は三

時、會から急報があつて、「ソ聯の政治的不安、見通しつかず、コースを印度洋廻りに變更するから、服装その他何事もこれに準ぜよ。」とのこと。

そんなわけで、その夜から翌十八日にかけては用意やり直しの忙しさや、小學生が始めて遠方へ修學旅行に行く前の晩時、會から急報があつて、「ソ聯の政治的不安、見通しつかず、コースを印度洋廻りに變更するから、服装その他何事もこれに準ぜよ。」とのこと。

十時上野着、東京店に至り、最後の携帶品の整理と點檢。荷物はトランク大小二個・小カバン一個・酒二升・葡萄酒二本。酒類は皆々笑ひ且つひやかす。

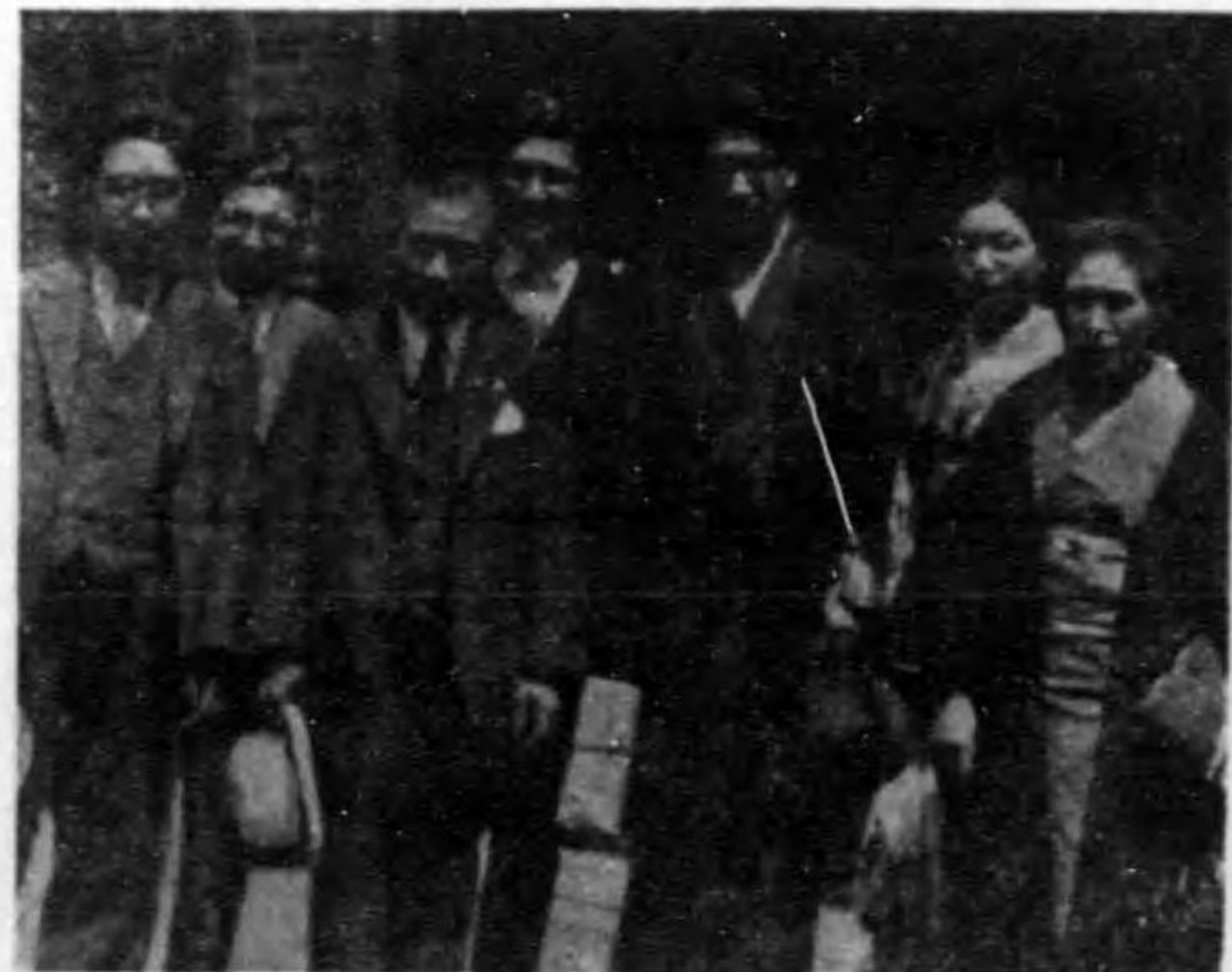
午後一時半東京驛に至る。東京中心の團員十名と會の理事三名合計十三人の名刺受が同じ恰好にすなりと並んでゐる。めいめい自分の名札のところに立つて見送人へ挨拶する。思ひ設けぬ一流呉服問屋の主人・支配人や銀行關係者を始め、家族・店員・親類・知己・朋友等々、これまた三三百人、俺一人だけでもこんな鹽梅だから團員全部の見送人は何千人にも及んだらう。それが一度にどつとフォームへ押し出す。全く立錐の餘地もない。それを掻きわけ掻きわけ發車前につとのことで乗車する。

團員の中、マリー・ルキズ美容院の相原美禰・相原ます兩女史は萬綠叢中の紅二點、商賣柄見送り最も多くまた女性ばかりのために最も華麗である。次に虎ノ門の佐多芳久博士も

大分盛大、三番目が俺のところであつたかもしれぬ。決して見送人の多寡がどうかのうのかうのといふのではないが、量らずも身に餘る多數の方々の御厚志を戴いたので、一言記して感謝の意を表するのである。

フォームの大群衆を見渡す。裕・陽一・壯兒・洋太郎・貞雄等の孫共はそれぞれ人の肩車に乗つてゐるから一際抽んでよく見えるが、女の孫達は今にも踏みつぶされさうで、心配でならぬ。二度・三度起る萬歲。やがて發車時刻の三時となつて特急富士は徐に

てに前店京東・日九十月六





會合せ打員團會興振易貿・てに館會東京・日五十月六

揺るぎ出した。十数日來の淫雨この日忽ち爽快無比に霽れ渡つたことはお互ひに便利好都合であつたばかりか、何となく幸先よろしきを思はしめた。

神戸まで見送る社長藤作も同車。

特急富士車中

横濱にて間嶋夫人・五十嵐未亡人・野澤屋の宇野澤氏、沼津にて正装せる城内氏父子の見送りを受く。

マリー・ルキズさんの見送りは沼津・静岡・名古屋等到着する所頗る盛んで、その勢力各地方へよくもかくの如く浸潤したものをつくづく感心させられた。

會の理事よりコース變更に伴ふ各般の注意と大阪で買入るべき熱帯地方通過に處する身のまはり品の品名の指示あり。會の三名、いづれもここ数日來の忙しさに鬚を剃る暇もなかつたらしく、眼玉さへ凹ませ、名古屋を過ぎてはそろそろ睡魔に襲はれ出したのも無理はない。

豊橋にて管醫學士、名古屋にて岡崎の田中氏・名古屋の若松氏・遠藤氏、それぞれ多數の見送りに送られて乗車、いづ

れも一見舊知の如くである。

夜十時四十五分京都驛着。京店箕輪以下三名の店員及び松居久老に迎へられ、團員とは明日の再會を約し京店に至つて一泊す。

京都より大阪へ ホテル・ニュー・オ ーサカ一泊

六月二十日。早朝入浴。晝、箕輪以下幹部店員と共に別杯を酌む。午後、小泉外近所六七軒へ暇乞ひに歩く。二時四十分分京都發大阪に向ふ。三時半大阪着。阪急デパートで買物。

田村駒商店へ立寄る。それといふのは同店々主田村駒次郎氏の令弟田村寛次郎氏と従弟の平松彦四郎氏が團員に加つてゐるので、同店とは近年東京吉野藤人絹部にて若干の取引があるもので、専務取締役の最明氏に敬意を拂はんがためであつた。しかし、日曜公休日で當直員以外は在店者なく、名刺を託したのみで辭去した。

一行の集合所たる中之島新大阪ホテルに至る。これは二三年前新築された阪地第一のホテルで、客室三百を算し、その

收容力に於ては日本有数のものである。

夕六時から七時半まで、木下氏外會の理事から種々の注意あり、殊にシャルンホルスト號の寄港地に就て詳細の説明があつた。コースの變更による旅費差額約四百圓を支拂ひ、外にツーリスト・ビュロー出張員の好意で第百銀行取扱に依る四割引のレジスター・マークを二百マーク買足す。

二十一日神戸出航、七月十九日ゼノア着港、丁度三十一日間を船中に過すわけである。この獨逸船シャルンホルスト號は横濱・ハンブルグ間を約四十日間航走する快足船で、日本郵船あたりの一萬噸級汽船より十日間早いとのことである。何しろ、これから七月にかけて亞熱帯・熱帯・赤道直下を通過するのであるから、美津濃で水着・運動靴・麻の烏打帽・ノーカラーワイシャツといふやうな耐暑必需品を、また阪急デパートで出來合の浴衣などを買入れ、これでやうやく始めて一切の用意が調つた次第である。

會合の席上朝鮮京城の會員金漢奎氏と初面談。朝鮮信託の監査役で五十歳がらまりの中老人、流調の日本語にて語る。同氏より美事な朝鮮製扇子と團扇を贈られた。

シャルンホルスト號へ乗込む さらばしほしの別れを

六月二十一日。新大阪ホテルに一泊した俺と藤作は、最後の別れと朝食にビールのコップを挙げ、京店の使者を待つてみると、やがて箕輪以下三名がやつて来た。

藤作は神戸住友銀行堺町支店で前日約束した米弗二百五十弗追加買入れのため先發、續いて箕輪以下も神戸に向ふ。

荷物はすべてトラツクに積込んで運び、我々團員は十時自動車に分乗して阪神國道を西行、坦々砥の如き舗装路面を走つて神戸埠頭に向ふ。北に摩耶・六甲の連山を眺め、殊に六甲の密林中に三樂莊を始め宏壯な別荘の隠見する工合、京濱國道などでは見られぬ風致である。しかも阪神間の人口の稠密は日本第一で、約二十軒の間殆ど家續きというて可なりである。

税關にて團員の携帯する寫眞機・映畫攝影機・雙眼鏡等の證明を受け、十一時半乗船す。

【第二信】上海埠頭にて投函す

神戸 解 纜

藤作・箕輪以下京店々員・稻垣氏・下山氏・小森氏・植村氏等の見送人と例の五色のテープを投げ交して別れを惜しむうち、正午、シャルンホルスト號は遂に神戸棧橋の岸壁を離れた。

神戸では大阪の田村氏・平松氏の見送り最も多く、マリールキズさんのそれも相變らず旺んなものであつた。

出立の時、家族・店員一同無事健全の中に、唯一人京都の箕輪常務が先頃來十日餘り病を秘して休むといふ情報に例の神經衰弱不眠症の再發かと案じ、相當永引けば對策を講ぜねばならぬと一昨日藤作と語り合ひつつ入浴したところ、思ひがけなく本人が驛頭へ元氣に出迎へてくれ、病狀を聞くに神經衰弱にはあらで軽い盲腸炎で既に大體治癒した由、また京店の裏絹も豫約注文前年の二三割増に達し、例へばこれまで毎年一千疋内外の注文を常とした廣島の巨商小田政商店の如き



神戸港の別れ(向つて右手に京都店の店旗が見える)

については、今年は同業者を驅逐して約三倍の引受けに成功したなどといふ話あり、何事も好調で安堵したのであつた。

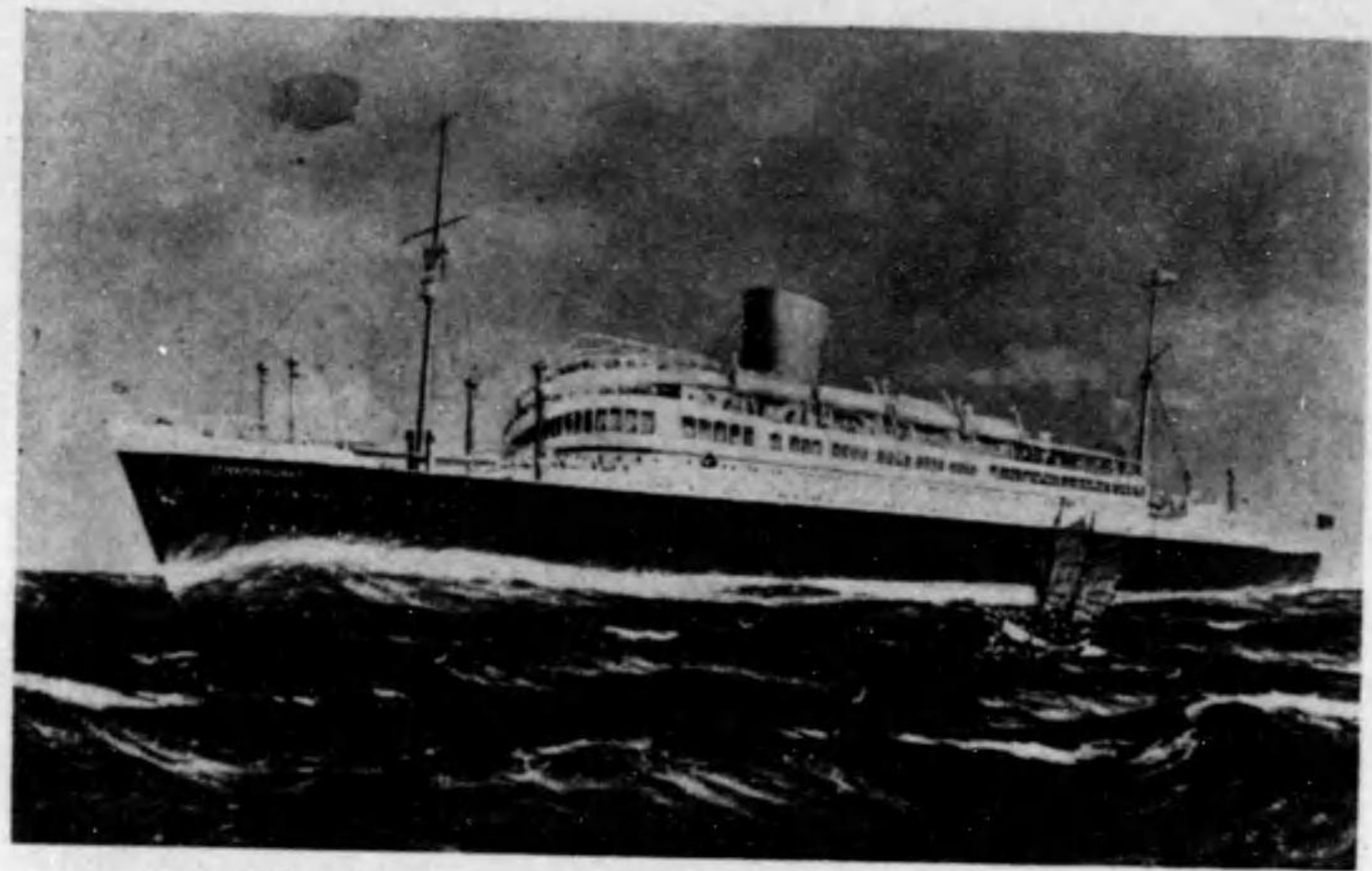
船内生活のはじまり

扱て、ここはシャルンホルスト號Bデッキ百三十六號一等室、大阪西山鐵工場主西山卯之助氏と同室である。

西山氏は俺と共に一團三十一名中の最年長者で即ち六十三歳、そして俺より一ヶ月の長である。阪地の人々の噂によれば青年時代より異常の努力を重ねた稀に見る奮闘家の由、六尺豊かな體軀に筋骨隆々、げに熱情溢るる痛快な偉丈夫、俺の話相手として洵に申分ない。

午後一時半と七時半の二度の食事共になかなか美味、特に肉食嫌ひの俺にとつて野菜と果物の多いのは嬉しく、この分なら一ヶ月間の航海も腹工合には大した差障を起すまいと先づ安心する。何事も英佛流の體裁主義を排して獨逸流の實質本位らしく見受けられるのも快い。

船は北獨逸汽船會社の新造優秀船、噸數一萬八千、秩父丸・淺間丸等より一段大きく、兩船程裝飾には意を須めてをら



號トスルホンルヤシ・社會船汽逸獨北・ンメーレブ

ぬが 實用 便利 第一 浦酒 に出 來上 つて みる し、 設備 は無 論行 届い てゐ る。 午

餐後と四時の茶の會と晚餐後とこの三回に、サロンで音楽その他さまざまの餘興があり、大いに旅情を慰めようといふ仕組である。また甲板には大ブールを始め多くの運動器具が備へ付けられてゐる。すべて申分がない。

午後、上海からゼノアまでの寄港地と視察プログラムの報告あり、寄港地の停船時間は最短十時間より最長二晝夜、この分なら、中南支・南洋・印度も十分見ることが出来る。

航路は紀淡海峡を南下して四國の東南岸の山々を右手に眺めつつ更に南進、午後四時頃徳島沖、午後七時頃高知沖、夜に入つては沖繩列島の間を南航するらしいが、一つの燈臺も見えない。

九時、船中第一夜の眠りに就く。

木魚をたたく

六月二十二日。薄曇、遠望きかず。

昨半日は荷物の整理と西洋式の風呂や食事の心配でさつぱり落ちつけず、カバンの中に入れて來た木魚もテーブルの上へ放り出した儘になつてゐたが、今朝目覺めて不圖思へば今

日は恰も父の命日なので、早速木魚たたきの開業式となる。

然るに、相棒の西山氏は俺の木魚に稍遅れて、これもカバンの中から阿彌陀如來の掛軸を取り出し、これに向つて何やら經文を上げ出した。その態度の眞剣さ、新米の俺などの到底及ぶところではない。聞けば同氏は眞宗の信者だといふ。そして、「あなたは眞宗ですか？ 木魚をたたくのは定めて浄土であります。」といふ。俺は本當は眞宗なのだが、この木魚は浄土宗光明會田中木又先生の贈物で、「どうか世界中の木魚をたたいて來て下さい。」といふ頼まれもので、説明がややこしいので、「さうです。」と答へておいた。百何十日間、俺は浄土に改宗して過さねばならなくなつた。呵々。

西山氏の仕事好きには驚く。二人の息子は共に工學士で自分の工場で働かせ、婿養子も同様であるが、若い人間のやる事が兎角氣に入らぬと見えて、昨日乗船するや否や書き始めて今朝までに何通となく長文の手紙を書いたが、それがすべて仕事の上の事ばかり、工場宛のものには立體・平面・側面の機械設計圖まで附け、かういふ注文はかうせねばならぬとか、自分の工場の増築はあせねばならぬとか、實に大し

た氣の配り方で、この種の精力では敢て人後に落ちぬと自信する俺も、西山氏の前にはたぢたぢとなつた。

獨逸新興海運政策のあらはれ

船内の設備や各等の模様はまだ全部を巡る暇がないので、今少し落付いてから記すことにするが、大體この船は最近進水したばかりの優秀船で、歐洲大戰に際して一敗地に塗れ中位以上の商船は賠償金代りにあらかた聯合國に持つて行かれ一時は海運業の見る影もなく衰へきつた獨逸が、近來ヒットラー總統の猛激なる復興政策に基き頻りに大汽船の新造と海運貿易の進展を計らうと努力してゐるその一つの現はれとして北獨逸汽船會社をして造らしめたものらしく、もともと造船術・機械科學工業にかけては英米に優るとも劣らぬ獨逸のこととて、すべての構造がぬかりなく出来上つてゐるのは勿論だが、殊にいかにもがつちり落着いて、一切の虚色を避け、いはば獨逸魂を明瞭に發揮してゐるところ、昔から獨逸最良の俺には實に氣持がよい。

船内の種々相

部屋の外の風呂は朝一時間晩二時間と制限あつてあとの時間には入れず、さりとて甲板プールはどうせ毎日押すな押すなの大繁昌であらうし、それにいかに暑くとも冷水浴はさすがに年寄の冷水の感があるので、いささか贅澤ながら自室附獨占風呂を一つ買ふ。これが神戸・ゼノア間で百マーク（邦貨八十五圓）である。大した事になつたものである。

それから食事であるが、この日記を書いてゐる二十三日までにも丸二日間六回食事を攝つたが、前以て團員の運動不足による胃腸の障害を憂へてか、船醫も司厨長も將た船長も事務長も熱心に相談合議してくれて、消化よく食欲の進む料理を本位とし、新鮮な野菜と果物の量を普通より多くして日本人の身體に適するやうに取計つてくれてゐる。かういふところはなかなか親切でもあるし、遣方がさすがに科學的で感心させられる。

メニューは日本紙の細川を厚くしたやうな紙に伯林市街だとかラインの古城だとかいふやうな獨逸の名所舊跡を美しく

堂食等一號トスルホンルヤシ



印刷し、これを擴げた両面に英獨二語で料理の名前と材料を記し、特産品には例へばカリフォルニアのネーヴルだとかナボリの橄欖だとかいふ風に解説までついてゐる。中には料理法までくどくど書いたものもある。さうしなくてはゐられぬのが獨逸式なのであらう。

料理の選擇は相當自由で、朝食は約十種の中から三四品を選ばせ、晝食と夕食は約二十種の中から六七品を命ずることが出来る。

一等船客の食堂は約二百人を容るべく、これに豫備室がついてゐる。我々團員はいつも食堂に出る者の三分の一乃至半分を占めてゐる。これに、自室に食事を運ばせる人々を加へて、一等船客は約百人位であらう。食卓は語學の達者な人を一卓に一人づつ交へて自由自在にボーイに命ずるから別に不便はない。何しろ食欲旺盛な青年に伍してのこととて、俺は何よりも食過ぎを警戒してゐる。今までのところ便通は一日一回で平穩無事である。ただ、糞の分量が平素の三倍位あるのはやはり食物の違つたためかと思ふ。

酒は殆ど飲まぬ。毎食事にビールだけを少しづつ飲んでゐ

る。團員中酒好きは不思議に少い。ビールさへ注文する者は稀だ。ビールはさすがにミュンヘンの上等で、濃いのと薄いのと二種あるが、前者の香氣のよさと味のよさ、ついビール好きの秀雄のことを思ひ出す。こんな話を書けば定めし喉を鳴らすことだらう。

前にもいつた通り、俺は山崎氏のくれた澤之鶴の一升瓶二本と新人會のくれた紅白の葡萄酒二本とを、汚ない更紗の風呂敷にくるんで船内へ持込んだが、かういふ蠻カラはどうやら團中俺一人らしい。その俺も實はまだ件のしろものには手をつけてゐない。その中赤道へかかれれば、少くも酒の方だけは腐つてしまふことだらう。出立の際、「あんまり酒を飲むな。」と大抵の人間に注意されたが、今のところ全然神妙なのでから安心願ひたい。

四時の茶の會には菓子と紅茶か綠茶が出る。平素間食しない俺にはこのおやつが大分腹にこたへる。そのせいで大して酒も飲みたくない。何だかすつかり甘黨になつたやうな氣がする。

食費は會でかまはず一日五弗（邦貨拾七圓餘）と決めた。

酒だけは別で、食事は食つても食はなくても平等に拂はなくてはならぬ。いはば、連日連夜帝國ホテルか東京會館の御馳走を食ひつづけてゐるやうな按配で、これをこの世の極樂とでもいふのだらう。

食物のせむと暑さのためで、莫迦に喉が乾く。普段の十倍も水を飲む。その水が實にうまいので訊ねてみたら六甲山の山清水を積んで来たのだといふ。念の入つたものである。

船内の樂しみといへば、毎食後と四時の茶の會に我々一同サロンに集つて、茶菓や果物を攝りつつ談笑する外に、ダンスホールや映畫室の設備もある。俺はダンスには全然用がないが、映畫は、昨夜九時から十一時まで見た。盛装した獨・米・佛(但し獨逸船には佛人はいつも極めて少いといふ)の男女やフイリツピン・印度・ジャバあたりの純黒・中黒の人々と始めて一緒になつた。日本人は我々の一行の外にも五七人ゐるやうだ。

印度人の中に顔中鬚だらけの物凄い人物がゐた。相當の商人か、或ひはひよつとする小侯國の主かもしれぬ。我々のタキシード姿だつて、沐猴の冠に類するものだから他國人は何

と評するやわかつたものではない。

映畫は十九世紀初頭獨逸の一豪傑がカリフォルニアに渡り、農牧の傍ら沙金を掘り當て王侯の如き地位に上るが、一方あらゆる迫害を受け二人の子供はその犠牲となつて殺されるといつたやうなもの。その主人公といふのは、俺が昔映畫で見たジャンバルジャンみたいな俠勇の漢子で、いはばこども獨逸魂の宣傳をやつてゐるわけだ。しかしこの話は實話で、右の男はカリフォルニア州の開拓者として今も石碑が残つてゐるとか。元來同州はメキシコから買収したものでゆゑ、成程さもあらうと思ふ。

上海に近づく

二十三日朝、時計を一時間遅らせる。昨夜の映畫見物で今朝は少しく寝坊、船室の窓から海上を見るに、左岸に四五の島が見え、且つ濁流滔々としてゐる。愈々揚子江の河口に近づいたらしい。これから黄浦口の入口までなほ三時間を要するといふ。

室内の換氣は申分ないし、上甲板の安樂椅子で日光浴は出

来るし、(但し椅子の借賃ゼノアまで十マーク即ち約八圓五十錢)六尺以上の大男でも樂に入れる大理石の湯槽にのうのうと浸つてもゐられるし、運動は十分だし、酒と煙草は大分節減してゐるし、こんな工合なら身體は益々丈夫になる一方だ。これから十一時半の晝食、續いて上海見物の準備だ。團員いづれも見物慾にはりきつてゐるが、中には子供のやうに無茶なプランを持込んで會の理事を困らせてゐる者もある。時間がないのでこれで擱筆、この手紙上海埠頭で投函する。

【第三信】上海にて認む

上海上陸 三菱銀行・住友銀行を訪ふ

六月二十三日。今日の午後から翌々日の午前中までまる二日間上海と南京を見物する豫定だ。

折から、入梅模様の蒸暑さに最輕装の身仕度をなし、肩には雙眼鏡をつるし、ポケットには廿五日神戸へ歸港の長崎丸に託すべき數十枚の繪葉書と旅行記の原稿を入れ、一時半サロンに行けば、やがてここに一同集つて木下支配人より兩地

見學のプログラムを聞く。三四の人を除いてはいづれも始めて見るあこがれの土地である。

既にして船中から黄浦江の兩岸に連なる工場・船會社・ドック等の大建築物を眺め、中央股賑街は如何に大厦高樓が櫛比してゐるであらうか、會遊の北平・天津に較べ將又日本の六大都市に比して如何なる特殊の印象に富むであらうかと樂しき想像に心躍らせつつ、我々三十一名と外に四十名ばかりの船客は出迎への大型ランチに乗り移り、上海ツーリスト・ビューロー出張所の事務員と辰巳旅館のポルター外一名の案内によつて三十分ばかり黄浦江を廻り共同租界の岸壁にて上陸、それより徒歩三四町、共同租界銀行會社の中心地たる九江路に至る。

一行が住友銀行上海支店で上海弗の兩替を待つ短時間を利用して、俺は附近の三菱銀行上海支店に支店長吉田氏を訪うたが、折あしく外出中、副支店長野崎氏に面接して當港の事情について四五問答す。吉田氏は日本人商工會議所の會頭を勤める信望厚き重要人物だとのことでその不在は甚だ遺憾であつたが、しかし野崎氏の應接もなかなか要領を得たもので

あつた。三菱銀行は餘り大きからねど八九間の間口を有する所謂三菱式の重々しき石造建造物で丸之内本店のそれに酷似してゐる。ここに三菱信託も含まれてゐる。

住友銀行の一行に合流、俺も二日間の小遣として若干の金を上海弗に兩替する。この日の相場、上海弗百弗につき邦貨百三圓四分の一、毎日四分の一・八分の一位の變化があるといふ。

住友銀行の建物は少しく舊式ながら行務は相當多忙の様子、そこへ三十一名の團體がどつと押しかけたのだから、豫告があつたといひ條、川口支店長・武田支店長代理を始め眼を廻すやうな忙しさ。一行中の商工業者は關西の人多く、三菱・三井よりも住友との取引者が大部分を占めてゐるため、特に同行へ押しかけたのだといふ。川口支店長は、既に大阪本店から歡待の命令が來てゐるし今晚は是非夕食を馳走したいといつてくれたが、とも角も視察が第一と、三時、自動車七臺に分乗して出發する。

三菱銀行の隣接地には三井銀行・三井物産上海支店が、三菱の建物の數倍もあらうかと思はれる大建築を造りつつあ

り、蓋し當港隨一の機關である。またこの附近には、正金銀行・臺灣銀行・香港銀行・上海銀行・中國中央銀行その他外國諸銀行が軒を並べてゐる。

上海總領事館を訪ひ上海事情を聴く

先づ上海總領事館に至つて敬意を表す。

ここで館員會根氏と交話、その要點を左に略記しておかう。日本との貿易は滿洲事變・上海事變を契機とする日貨排斥の運動によつて當時の兩三年間といふもの大減退を來し實に悲觀すべき状態に陥つたが、ここ三四年間は年一年と恢復に向つてゐる。その原因は左の如くである。

- (一) 世界的景氣恢復の要因がここにもその儘當嵌ること。
- (二) 四川省を除く支那全土の農作物が豐作でしかも價格高きにあること。豐作の一例をいへば、棉花の收穫は平年作一千万ピクル、一九三四年の最悪時には八百萬ピクルに過ぎなかつたものが、昨一九三六年には千四百萬ピクルに達し、本年は更に増加する見込。
- (三) 爲替相場が順調に安定に復したること。

(四) 支那政府の財政・金融諸政策上今や確かにインフレを生じつつあり、物價は年毎に昂騰に向ひつつあること。この點日本と同様。

(五) 支那政府の軍備國防の充實その他あらゆる施設及び上海・南京の都市計畫等により政府の借金が増大すると同時に巨額の金が放散されること。

(六) 近來國內が大體平和に歸しつつあること。

以上のやうな理由に基いて民國は奥地の隅々に至るまで好景氣が浸潤してゐるが、その第一の最も著しき現はれは即ち上海の活況である。

上海だけの日支貿易は近年の最少一億のものが、昨年は一億五六千萬圓、本年は二億に達するであらうが、この貿易高の増進は、上海の紡績・織布會社の新設及び擴張により、その他の工業をも併せて、日本より機械類を輸入する額が多くなつたことが主要な原因をなすものであるから、それだけにこれを反面から見れば、紡績絲・織布の輸入は最早進展の見込がないといふことになる。

また日本の爲替管理と商工省の輸出入の統制は、些か藥の

ききすぎた感があり、そのために進展すべきものが進展せぬといふ憾みなしとせぬのである。

上海新市政府前にて(中央島打帽者著)



上海と
ころど
ころ
日本領
事館を二
十分ばかりで辭し

それより武昌路・吳淞路等の繁華街を通り、新公園を横に見、日本海軍陸戦隊本部の堂々たる建物を仰ぎ、上海神社に詣で、日支及び上海事變戦死者の英靈に類づき、日本人火葬場共同墓地に上海事變最初の犠牲者たる梁瀬松一郎氏の墓を吊ひ、次に東北方に數哩離れた上海新市政府前に車を止め附近の新市街建設豫定地の全貌を見渡す。

上海の大都市計畫は、かの吳鐵城が上海市長時代に、時恰も、上海事變に於て十九路軍の一敗地に塗れたる後、城内支那人街が共同租界（日・英・米・伊・獨・西・葡等）及び佛租界の美麗宏壯なるに比し餘りにも見すばらしいのを痛嘆し現上海の東北五六哩の距離にある廣漠たる田畑何萬町歩——俺の質問に答ふる人なきも恐らくは二里四方もあらうか——三四百萬人を收容出来る土地を強制買収し、その中央、二十尺位の基壇の上に北京宮殿に擬したかと思はれる例の上海新市政府の老大なる建物を立てて支那人にも外國人にも威容を示さうといふのである。

附近には大學・運動場・野球場・プール・競馬場等の設備はあるが、一番大切な商店舗は極めて少い。

街路は新市政府を基點として放射線狀に擴がりその他丸型あり基盤目型あり設計頗る宜しきを得てゐるが、果して市民をここに吸収することに成功し得るものであらうか。一體上海でも南京でも首都の建設に就ては、全く日本の維新當時の如く金を貸す國さへあれば如何なる不利を忍んでも借金してこれをどんどん投下しようといふので、その遣口が第一無鐵砲である上に、肝腎の商賣人がさつぱり移轉しようせず、また諸工場もなかなか出來さうにもないのだから、果して將來その理想が實現されるや否や頗る疑問とせねばならぬ。昨日も今日も雨にて閉口。最早時間がないので第三信はここで切上げて投函、第四信は香港から出す。

【第四信】香港にて投函す

上海陸戦隊本部慰問

前便は住友銀行で兩換の後、敬意を拂ふべく上海總領事館を訪問、會根書記生から貿易その他の上海事情を聞いたところまで書いたかと思ふ。

それより共同租界の殷賑街を通過して所謂閘北の地に至れば、ここはいふまでもなく上海事變最初の紛擾地、砲彈又は爆彈の炸裂した跡のなほ残れるを見る。新公園を瞥見して次に上海神社に詣で當地に於ける戦死者の慰靈をなす。その傍に膨大なるホテル若しくは大巨船の船室の如き形式の白聖の建物あり、これぞ在留日本人の保護に任ずると共に上海附近の支那軍部を威壓する我が陸戦隊本部である。俺は素より愛國の熱血溢るる者、豫て用意の菓子大箱一箇を個人としてここに差し出した。

上海新都市計畫の理想と現實

市街を離れて東方郊外に出づること若干哩、大上海新都市を建設中の茫漠たる廣場をドライブする。これは前便にも少し書いたやうな氣がするが、四五年前、現廣東政府主席たるかの吳鐵城が上海市長時代に巨額の借款を起し、將來一千万人の人口を容るるに足る東洋一の近代的大國際都市を建設しようといふ理想に基いて着手されたもので、幹線道路には基盤目あり丸型あり放射線ありあらゆる形式を應用し、また將

來は結局閘北一帶との連絡を計らうとしてゐる。

新市政府の建物は二丈餘りの基壇の上に立てられた例の極彩様式にちよつびり西洋流を加味したもので、華麗か俗悪か一寸判断に迷ふやうな毒々しさを呈してゐること恰も北京宮殿や南京の軍部・參謀本部・諸官省（南京は後から見たのだが）の體裁と同様であるが、その濃厚さも勿論支那人の趣味には合致して多分大いに氣持よがつてゐるのであらう。

この廣場は以前大體畑地であつたのを一旦強制買収して適宜に分譲をしようとするもの、各種の役所と役人の住居はぼつぼつ出來たが、何しろ三四哩四方もあらうといふところへやつと二三千の家屋が建つた現在の分では、てんで容器と中味が喰ひ違ひすぎて話にも何もならぬ。剩へ目下壯大且つ完全な大埠頭岸壁を造りつつある黃浦江岸からこの新都市敷地に向つて數哩の間、數十間幅の大舗裝道路を一直線にぶつと抜くといふのだから、愈々以て支那人の途方もなさには驚くの外はない。

だが、肝腎の大衆や商賣人は果してここに集まり來るであらうか？ 吳鐵城去つて後は市長の後任未だ決らず、無理な

借金には限度あり、理想への歩み極めて遅々たる上に、算盤勘定強き支那民衆は、甘く勧誘しようが厳しく強制しようがいやならいやで梃でも動かぬのだから始末が悪い。されば、如上の理想の實現を危む人の多いのも道理である。

新市政府では吳鐵城の創意により、——といつても實はヒットラーの模倣だが、——集團結婚をさせてゐるといふ。市の役人が媒酌人となり、府の建物の最上階で數十組一度にこれを行ふのである。

一體支那人は婚期まで營々と働いて相當の貯蓄をするが、古來の風習に縛られ折角の勞苦の結晶を結婚に際して忽ち徒費するを常とする。かかる悪習慣を矯正しようとする新市政府の努力は、さすがに近代的意義を有するものといへよう。

上海邦人の模範的大工場内外綿紗廠

上海新都市計劃敷地の西南に日本人の共同墓地あり、ここで上海事變最初の犠牲者梁瀬松一郎氏の墓に詣でた。香烟絶ゆる時なく、氏も亦死して餘榮ありといふべきだ。

上海日本人の模範工場たる内外綿紗廠を觀る。これは大阪

に本社を有する内外綿株式會社の上海工場で、本社は米印兩國棉花輸入の大手筋、傍ら阪神地方に數多の工場を經營する資本金約五千萬圓、好配當の大會社である。支店長兼工場長藤山道彦氏の懇切な説明によつて場内隈なく參觀、同行者中日本でこの種の工場を見た人少く、皆珍しがつた。

巡覽中の藤山氏の説明と、社員・職工の氣分を軟げるために作つた青芝生の廣場で茶菓の饗應を受けた際の藤山氏の挨拶中の言葉と、それに俺の觀察をも加へて要點を記せば次の通りである。

(一)上海工場の創立は今から約三十年前の明治四十一年である。

(二)上海に於ける紡績工場は、大體經營難に陥つた支那人の工場を買收して擴張したものが多く、當工場は往時の關西紡績界の大立物川村利兵衛氏が社長時代自ら上海の有望なるを取上げて創立したもので、今工場事務所の入口に立つ銅像は即ち川村氏のそれである。因に現事務は佐々木邦藏氏である。

(三)全支殊に揚子江沿岸の中支には多量の棉花がしかも低

廉の生産費を以て生産され、一方上海附近は支那第一の人口稠密の地であるから、莫大なる需要力を有つてゐる。

(四)明治の新設當時の勞働賃銀は日本の半分又はそれ以下で、殊に男工は三分の一であつた。近來、男工は日本の一圓二十錢に對する支那の八十錢、女工は日本の八九十錢に對する支那の六七十錢といふ平均で、兩國大いに接近して來た。

(五)第一・第二工場合せて職工三千人、錘數何萬、織機何千(數字失念)。

(六)製品は、五枚朱子・三ツ綾・天竺・金巾・キヤリコ・綿鍛子・ポプリン等支那人向きのもの。

(七)支那人女工も日本同様婚期に至るまで永く勤める。最初の半年や一年は移り氣が多いが、結局好待遇の工場へ歸つて來るのが常である。支那人女工の技術は日本人に比して七掛位の程度、されば工賃安くとも必ずしも有利ではない。

(八)勞働時間は朝六時から夕五時までで、この間晝その他に一時間の休憩がある。夕六時に夜業する者と交代、深夜業もする。工場法の制裁などは一切なく、同業者數工場の中合せ的内規があるのみだからこの點はかなり有利である。

(九)以前輸入税の安かつた頃は、印棉・米棉を混用したこともあつたが、今は高關稅のため支那棉だけを原料としてゐる。従て最高級品は出來ぬが、支那棉は印棉より白いので製品の生地は却て美しい。

(十)支那の棉花生産高は、最近五年間の平均一千萬ピクル、十一年は未曾有の豐作で千四百萬ピクルに達した。而してこれが支那好景氣の一つの原因たることは前に記した通りである。

(十一)支那人の經營する紡績會社は經營の拙劣と資金難のため續々倒産する。由來支那人は個人事業に於ては成功するが、我利心強く協調の念に乏しきせむか、少くも數人の協力をする會社組織に於てはどうも失敗し易い。

(十二)この工場は一部分を見たのだが、廣々として且つ清らかに整頓され、日本有數の工場に少しも遜色を見ない。

(十三)上海紡績業も支那棉を原料に出來る間はなほ將來性があるが、一度戰亂に陥れば忽ち打撃を受けねばならぬことも考慮せねばならない。

(十四)將來人絹工場も適當の場所に設立されるであらう。

大體以上の如くである。茶菓の接待を受けた後、俺が織維工業に關係あるのと且つ年長者であるので一行を代表して挨拶し、感謝の意を表した。

そこへ住友銀行の福岡・武田両氏が、川口支店長の命を受けて今夕支那料理の馳走をしようとして迎へに來られた。

辰巳旅館に宿る

次に上海の西南隅にある東亞同文書院の外観を見て同院出身の烈士が大いに國家のために盡瘁したことを偲び、次に昔「支那人不可入」の立札を立てて支那人を牛か豚扱ひにしたので有名なゼスフルト公園を見た。入場料は二角即ち二十錢である。この入場料あるために、支那人の入場者極めて少く、それも清潔な近代人のみ、大體は洋人である。

それより上海の銀座・新宿街ともいふべき黃浦灘路（バンド路といふ）虹口方面を具に縫ひ廻つて車上よりその賑はひに感嘆し、最後に城内に近き四馬路飯店杏花樓で川口支店長の支那料理の饗應に預つた。料理は十五種に及び本場だけに頗る珍味であつた。

九時宴を終れば、若い人達は遊び場へ、壯年組は競犬とハイヤライ（俺は昨年これを天津で見ることがある）の賭博へ出掛けたが、我々聖人組四五人は會で指定の辰巳旅館に投じた。この主人は長崎の出身で上海邦人間の二成功者である。

上海の日本旅館はすべて十三軒、日本人の往返繁きため、いづれもなかなか繁昌してゐるといふ。辰巳旅館の宿料は上海弗五弗、邦貨五圓二十錢ばかりである。

上海から南京へ

二十四日午前八時、南京行の特快頭等車（特急二等車）に納まり、上海北站を發して首都南京に向ふ。上海・南京間は三百一十一公里（支那ではキロを公里といふ）即ち約七十八里であるから凡そ東京・名古屋間、若くは東京・仙臺間位と思へばよろしからう。汽車賃は急行券共一等十一圓餘、日本よりは低廉である。路線は廣軌だが敷設方法拙きか振動はかなりひどい。時速は六十哩といふから日本の特急程度か、釜山・奉天間の特急「光り」や大連・ハルビン間の特急「亞細亞」よりはすつと遅い。

便所は極めて不潔でしかも調理場と隣り合せである。食事は皆座席へ運ぶ。切りに熱き茶をすすめる。緑茶一杯二角（二十錢）である。

この日曇天で遠望きかず、それでも各驛の状態と農村・耕地・作物等の様子は判る。到るところに高き古塔あり、いかにも遠き昔から開けた土地なることがわかる。地味は肥沃で大體水田が多く、今は植付の後十日か十四日位、越後平野の水田に似た感じがする。また南京に近づいて、その邊濕地の多いのと、山脈絶えてなく稀に筑波山の半分程の小山が現はれるのと、米田や豆畑・野菜畑の混り合つて見えるのと、それらの印象は上野・水戸間の沿線風景に甚だ似てゐる。ただ農家や種々の建造物に異色があるので、身の支那にあるを省みるのみ。

車中吳縣の薨を眺めた。これ即ち蘇州の地、人口六十萬の大都市である。また無錫といふ繭・生絲の名産地にして又日支配に用ゐる原種上繭の特産地を過ぎた。次なる大驛鎮江は、古來揚子江南岸有數の要害の地、人口二十萬と稱せられてゐる。

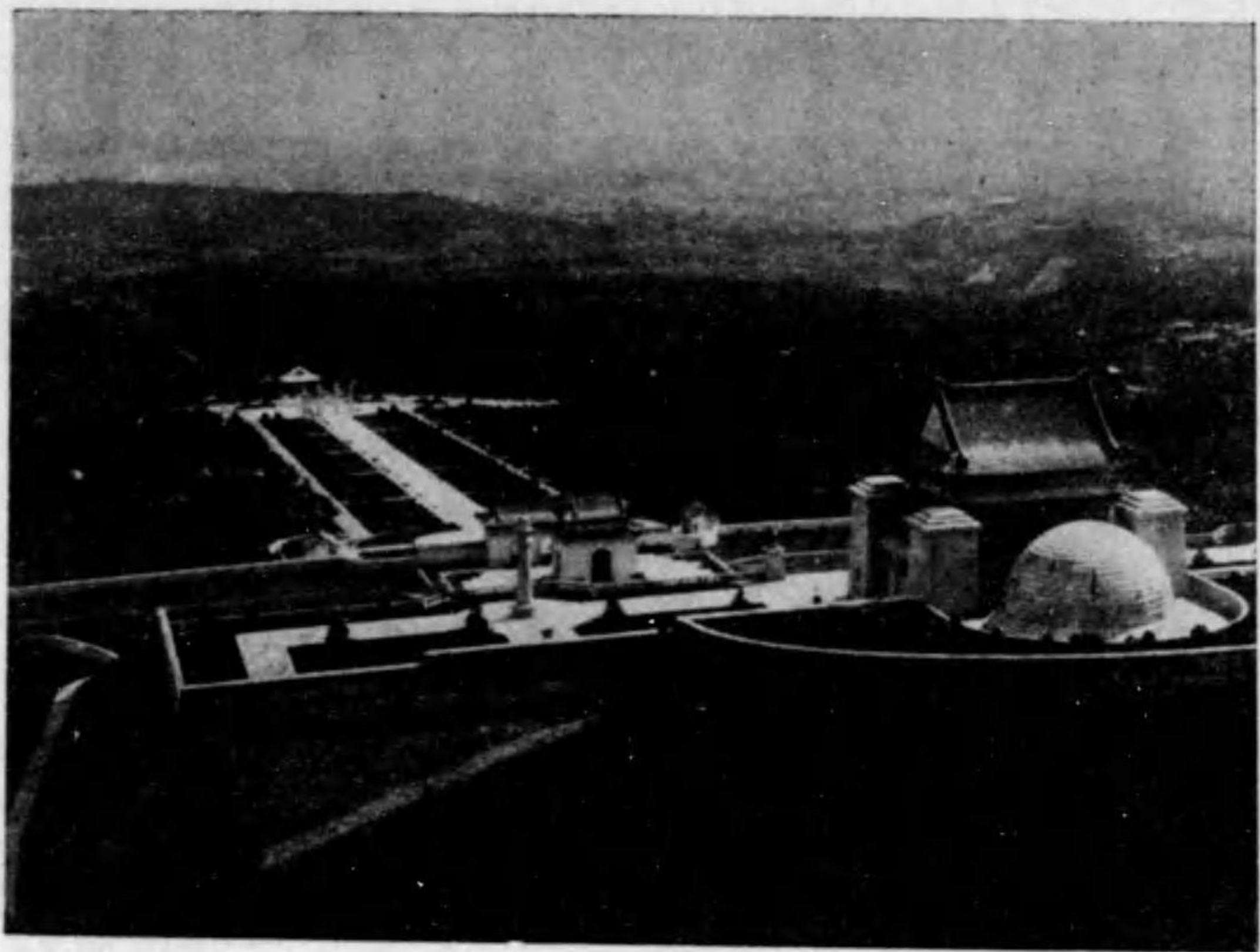
上海・南京間の列車は、普通六七時間、最も遅きは朝の五時四十分上海を發して十七時半（午後五時半）に南京に着く。だから實に十一二時間を要するわけである。然るに一方の特快車は四時間四十八分しか要せぬのだから、その差實に大なりといふべきだ。

上海・南京間の直通列車は一日に五回あるのみ。北京行急行は一日僅か一回あるのみ、これは南京・浦口間を汽船に汽車を乗せて揚子江を渡る仕掛になつてゐる。上海から北京までの所要時間は約二晝夜であるといふ。

明孝陵と孫文廟

十二時四十八分南京着。雨中自動車四臺に分乗して新都市計畫中の南京を訪ふ。

南京の城壁は支那・滿洲を通じて最も長く、實に三十哩に及ぶといふ。城壁數十町毎に大門あり、各門毎に憲兵及び保安警備隊等の三四の兵士がゐて、一々人員と豫め届出た名簿とを引合せて入門を許可する。歸路も同一の手續を繰返す。相當嚴重なものである。外に名所・舊蹟・寺院・公園の入口



陵山中京南

に於ても大體同様でたとへ調査せずとも嚴重に監視する。莫愁湖のほとりを過ぎ、遙かに北極閣を望見して後一旦城内の繁華地に入り、それより南京隨一の名山紫金山々麓靈谷寺址なる明孝陵を見る。これは明の太祖洪武帝と馬皇后を合葬したところで、雜草離々たる間に點在する往古の大建築の廢墟と陵道に相對立する古雅掬すべき石人・石馬は、明朝の盛時を無言裡に語つてゐる。これらすべて五六百年前の貴重な美術品である。

紫金山の中腹には東洋の巨人、新中華民國の父たる孫文の廟がある。これは數年前五百萬圓を投じ、支那古代の様式に西洋建築の精神を加味して營んだもので、青天白日旗に擬へて頗る明朗上品なる紫色の瓦を用ゐたところなど莊嚴簡樸の趣に富んでゐる。

歸路城内の主要街衢を通り、新興南京が尙未だ上海に比して格段の差あるを感じた。

南京諸事情

日本大使館を訪ふ。大使は不在、參事官は事務繁劇のた

め、總領事館員副領事田中豐千代氏と會見、近時の日支外交關係に就いて聽取す。交話の要點左の如くであつた。

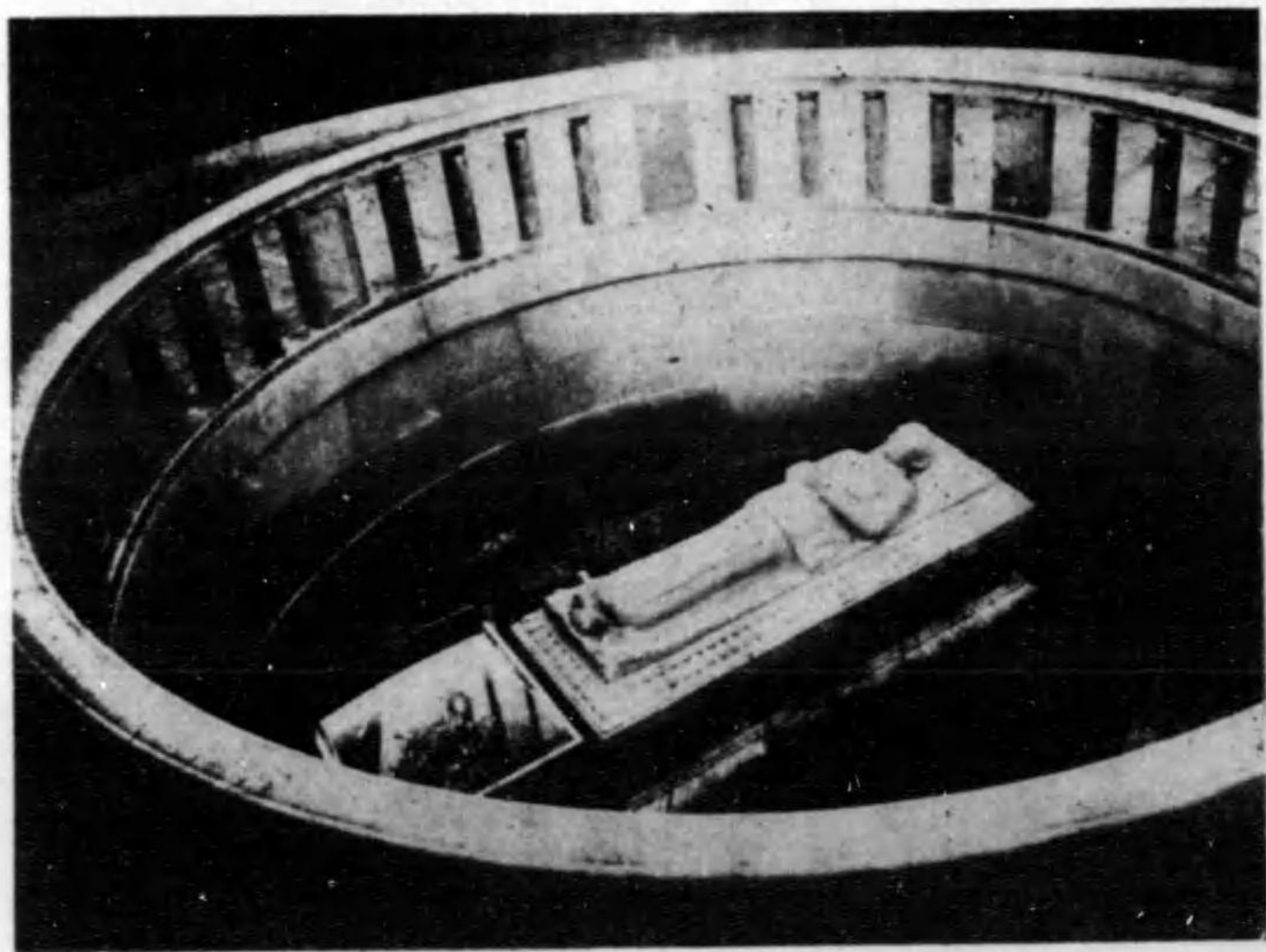
(一)南京の人口は大正七八年まで四五十萬を上下するに過ぎなかつたが、數年後急激に勃興増加した。即ち新都市計劃を定め商工の發展策を講じ、役所・官宅・會社・銀行等の建設甚だ多く、それに準じて各種の職工が夥しく入込んだ。何といつても支那四百餘州の首都であるから、その發展ぶりは滿洲國の新京以上のものがある。現在人口は百一萬、而して苦力・兵隊・官吏の多いため男六十萬人、女四十萬人の割合であるといふ。

三十哩に垂んとする城壁内の地域は、計畫通りに進めば將來優に三四百萬人を收容することが可能であらう。

(二)大使館はもと北京にあつたもの、遷都の後南京は外交事務上非常に不便多いので一旦上海に移り、次に茲二三年來始めて南京に移つた。現在は總領事館と同居せるがため建物も貧弱である。

南京在住の日本人は僅か百三十名に過ぎぬから、總領事館の方は殆ど用事がない。今は大使館の外交關係のみが多忙で

像臥寝文孫・廟文孫



ある。

日本人は一時三四百人を算したこともあつたが、漸次減少して四五年前は百人以下にさへなつたことがある。しかも大使館関係員はその中八十名にも達してゐる。

目下支那側に迫つて適当な地所を買収し新公使館を建てたいとの希望で土地の交渉をしてゐるが、先方は容易に便宜を與へてくれさうもない。

(三)大使館員の出入に際しては保護の名目によつて數名の兵士が監視的に護衛するが、それが全く極端で何事にも手も足も出ぬやうな状態を呈し、宛然交戦敵國中にある思ひのする位である。

(四)商人や學生の南京入りはこれをスパイ扱ひにし、非常に慎重且つ猜疑的態度を持してゐる。とに角支那は、僅か五六時間で達し得る上海に於てさへ首都南京の様子は瞭然と知り難いといふ程の明朗性を缺く政治外交ぶりを執つてゐる。

(五)抗日排日は今後も続く。たとひ排日はせずとも一度事ある時は飽迄も抗日しようといふ氣配だけはかなり濃厚なものがある。

幼童より大學生に至る排日教育は益々極端になつてゆくらしい。この日本に對する悪感情は政治的・外交的には到底解決の方法がない。何か歴史的急變化なくばこれを親日に轉化させることは至難である。

支那の軍事上の設備稍々整ふに連れて、政府は不遜にも日本必ずしも恐るるに足らずと宣傳したものが、これは些か薬の效き過ぎた感あり、民衆が日本の偉力を實際以下に見積り、支那の軍備を實際以上に過信してしまつたのは滑稽である。ただし、支那の民衆殊に商賣人は決して政府の計劃するやうな盲目的な抗日には走つてゐない。

北支の問題も一朝一夕には解決し難い。今後幾多の難關を突破しなければならぬ。

南京政府とソ聯との間に密約などのあつた形跡はない。ソ聯も國民政府とは根本的に相容れぬものを有つてゐる。英國よりの借款は一部成立、なほ引續いて成立を見るであらう。但しその使途は必ず經濟上の目的に置くこととされ、英國人は嚴重にこれを監視してゐる。

(六)南京は上海とは異り、地の利悪しく産業興らず、附近

農産品の集散地たると、政治上の都市たるに外ならない。

(七)南京百萬の大都市に一人の藝妓もみない。料理屋も一定の箇所に限られてのみ存在する。これは勿論猛烈な壓迫によつて然るのであるが、こんな風に娛樂機關がないため、支那官吏の主要な人々は皆上海・蘇州・鎮江等に住み又は第二號を置き、公用の時だけ南京に来るらしい。紳商・大官連の一流は上海で遊び、二流は蘇州で遊び、三流以下はやむなく南京に止まるのだといふ。折角の綱紀肅正もどうやら形式的のものに終つてゐるやうだ。

(八)蔣介石は、西安事件の際の負傷が原因で相當重き病狀にあり再起むつかしからうとの説も行はれ、とに角目下廬山にあつて時に要人を集め命令を發するに過ぎぬらしい。

しかし萬一蔣介石が倒れるやうなことがあつてもその後繼者は直ぐ出て来る。相互の勢力争ひの百害あつて一利なきことが既に認識され、また國民政府の組織機構も完備して來てゐるから、政府そのものの崩壊までは考へられない。

蔣介石は地方軍閥の勢力を殺ぐため、財政的方面即ち軍の賄ひを停止したので彼等の發行する紙幣又は軍票の信用はい

たく失墜し、宋哲元にしる韓復榘にしる閻錫山にしる地方軍閥には最早往時の面影なく、自然中央に歸依せざるを得なくなつた。それ故蔣介石なき後も、地方的豪傑が國民政府を無視してこれに取つて代るといふことは不可能となつてゐるらしい。

(九)要するに、日支外交の前途には幾多の問題あり、しかも事毎に老獪英國の策動が介在するので、同種同文の兩國間の親善が果していつの日に來るか、洵に遼遠の感なきを得ない。中田副領事の談話の要點は大略右の如きものであつた。

南京の特異性

最後に更に城内の主要街路を通つたが、その印象は北京に劣り、天津・奉天・新京の支那街程度の賑はしさであつた。蓋し城内廣大に過ぎて百萬の都市も尙且つ物寂しき氣がするものであらう。

再び城門で査證を受け驛へ戻る。この時雨未だ止まず。驛及びその附近には煙草屋があるのみで、繪葉書その他の小買物をする店もない程、南京は政治・軍事一點張りに出來上つ

た都會なのである。とに角、百萬の都市に一人の藝妓・公娼なく、料理屋も一定地域以外にはないといふのは随分風變りな遣方もあつたもの、一向面白くなくて非常に面白いといふ矛盾が南京見物の特異な感銘である。

なほ、寫眞機や雙眼鏡は到るところ嚴禁され、何の役にも立たなかつた。

十七時半(午後五時半)、南京發の快速車によつて上海へ歸る。車中座席にて洋食の食事をとる。洋食は四品で一圓五十錢、麥酒一瓶八十錢、葡萄酒上等小コップ一杯七十錢、なかなか値打がある。

二十一時五十分上海着、一旦辰巳旅館へ立寄つて大荷物を受取り、最終のランチで歸船。この間相當の大雨あり、ために麻服も帽子もびしょ濡れとなつた。入浴の後深夜一時に就寢、疲れて快く眠つた。

上海自然科學研究所

六月二十五日。小雨。

初發九時のランチで上海へ渡る。今日陸戰隊を訪問する人

々に頼み、更に菓子その他雜品の寄贈をなす。

俺は今日は佐多博士外一名と共に祁齊路なる上海自然科學研究所を參觀することとする。これは上海で有名なばかりか實に東洋第一の完備せる自然科學研究所である。

所長なる斯界のオーソリテイ新城理學博士に面接し、而して博士の語るところを聴けば次の如し。

(一)明治三十三年の義和團々匪事件の賠償金の殘額七千萬圓は、その後の妥協に基いて支那側が毎年々賦によつて若干づつ日本政府に支拂ふことになつたが、その金を以て昭和初年に工事起工、土地が二十萬坪で百萬圓、建物が百萬圓、機械器具の設備及び研究用書籍の蒐集費が百萬圓、總計三百萬圓を費して建設したのがこの研究所である。

(二)研究所の目的は、日本文部省と支那政府側との約束によつて、支那の風土を對象とする自然科學——漢法醫學・本草學、その他動植物學・礦物地質學等——を研究しようとするもので、既に續々研究の結果を發表してゐるが、特に支那の風土病については前所長が醫學博士であつたため貢獻するところが頗る多い。

(三)上海事變の時も流石に何等の迫害をも蒙らなかつた。云々。かくて、新城博士は所員をして廣大なる建物及び研究室を案内せしめられたが、所藏の書物は和書・洋書三萬五千部、古代よりの支那文獻七千部、外に動植物・礦物の標本類多數あり、門外漢の俺もその秩序整頓の工合には一驚を禁じ得なかつた。

上海出航

次に一二の百貨店に立寄つたが、時間乏しく、且つ格別の感想も浮ばなかつた。慌しく住友・三菱兩行に感謝の意を表し、正午發のランチで歸船した。この日も蒸暑く、また昨日の如く大雨あり、濡れ鼠となつた。

午後三時半出航、夜臺灣海峡に入つたらしく、右に福建省あたりの燈火を見た。

星三つ四つ瞬く。どうやら梅雨も上るらしい。

今日から甲板のプール開き。一等は第一デッキに、二等は第二デッキに、それぞれ専用のプールがある。

娛樂としてはデッキゴルフ・デッキテニス・ピンポン外二

三、小兒用としては木馬・自轉車・ボート・盛砂等、すべて到れり盡せりである。

今日までに十五回食事をとつたが、献立は毎回全部違ふ。例へばアイスクリームなどでも、その型と製法がいつも變つてゐる。これからの二十五日間もこんな調子だといふ。

この船は横濱・ブレーメン間を四十二三日間で走り、ブレーメンへは八月上旬着の筈、それから八月中旬ブレーメンを發して九月下旬、又は十月上旬、我々一行の日本歸着に先立つこと二週間位に横濱へ着く由。されば不用品は一切ゼノア上陸の際この船に託して送り返さうと思ふ。

今夜も映畫があつたが、獨逸語のトーキー故さつぱりわからず、さつぱりわからぬ我々を慰めるつもりか、神戸で買入れた東京音頭や寶塚歌劇のレコードを鳴らしてくれた。

六月二十六日。朝六時目覺め、右に福建省南方の島嶼を望む。東方は何も見えぬが、最早臺灣の南端であらう。

六時香港着の豫定が二三時間遅れるといふ。香港見物丸一日の筈が半日半夜に縮まつた。しかし見物は夜の方が面白いと喜ぶ連中も多い。

今朝七時の室内温度は煽風機をかけて八十五度、甲板上は八十二度、日中の暑さが思ひやられる。

前に書き忘れたからここに書いておくが、船名のシャルンホルスト (Sharnhorst) といふのは獨逸が昔プロイセンといつた頃の豪傑の名で、この人シーザーにも比すべき大人物であつたといふ。船のサロンの兩側には左にヒットラー總統、右にヒンデルブルグ元帥の大油繪を飾つてあるが、總じて英雄崇拜は獨逸魂の一要素をなすものであらう。

この原稿は香港で投函する。

「第五信」シンガポールにて投函す

香港到着 甲板上の夢想

六月二十七日。揚子江口に於ける潮流の加減でさすがの巨船も三四時間停船を餘儀なくされ、木下支配人から香港上陸は大體正午であらうと豫め申出でのあつたのが更に遅れて零時半となつた。いつもより幾分早目に午餐を攝り、一時半サ

ロンに集合、二時香港の對岸九龍港の棧橋に上陸した。

これに先立つ二時間前から俺は既に甲板上に佇立して、香港島を主とする諸島嶼及び九龍半島の一部の地勢を飽かず望見したが、英國東洋貿易の心臓部としてまた支那艦隊の重要根據地として、シンガポールと共に數十年間莫大の金を投じ智腦を絞り盡して作り上げた香港は、成程立派な港だと感心した。

歐洲諸列強の東洋を舞臺とする爭覇角逐の歴史は、遠くは西班牙・葡萄牙の活躍時代から次第に和蘭・英吉利の勢力伸張時代に移行行いたものだが、その後英國が支那をこつびどく苛め抜いた彼の阿片戰爭あり、又英佛聯合軍の北京攻略あり、これらの話は俺が幼少年の頃父からも聴き、學校の教科書でも習つたが、今如上の史實の主要部分をなす香港を目のあたりにして感慨自ら切なるものがあつたのは當然である。

徳川の初期大船巨舶の新造を嚴禁し、且つ支那・南洋へ渡航し白刃をかざして日本の威武を振うた所謂倭寇を禁遏した鎖國政策、十五代の最後に至るまで固守した自己本位政策が若し萬一なかりせば、果して我國のここ三四百年間の歴史に

如何なる變化を齎したことであらうか？ 或ひは夙に東洋の覇者として現在の數倍もの領土を保有できたかもしれず、或ひは歐洲諸國より科學的兵器に於て數十歩遜色のあつた我國のこととて蘭英あたりの侵害を蒙らなんだとも斷じ難く、そんなことをとつおひつ考へて時の經つも忘れ、茫乎として眺め入つたのであつた。

九龍と香港

俺の夢想は銅鑼の音に醒まされ、驚いて船室に戻つて食事をすまし、三時九龍港に第一步を印した。

扱て九龍半島とはどんなところかといふに、九龍港は九廣鐵道(九龍・廣東間)の發着地、而して同半島は英國が香港對岸廣東省へ勢力を伸張すべき根據地として將又香港々市の防禦線・生命線としてかねて垂涎措く能はざるものであつたが、何年前であつたか明確には記憶せぬが、香港占居數十年の後何等かの外交手段によつて九十九ヶ年式の租借權を得たところだ。

今や香港の人口五十萬、九龍は四十萬以上、計百萬人に近

き大港市を現出し、共に純然たる英領といふも不可なき位九パーセント英人の勢力下にある。

九龍上陸、鐵筋コンクリートの大停車場を見る。附近に百貨店や勸工場式の賣店や一般の商店等賑ふ。九龍郊外三四哩の啓徳には國際大飛行場あり、遙かにこれを望見す。

九龍・廣東間は約百哩、急行列車で三時間を要す。乗客なかなか多いといふ。

七八千噸乃至一萬噸までの船は香港側に着くが、それ以上の船は近來九龍港棧橋に着くを例とする。双方四五萬といふ大都市であるから、小蒸氣は五分乃至十分置きに出航、九龍・香港間の最も狭きところは一哩、この渡船賃は香港弗の十セント即ち日本貨十錢七八厘となる。下ノ關・門司の渡しに比し、船は悪い。又あれは二十分に一回位だが、これはそれより頻發するから乗客は半分位、そしてあれは二哩十錢、これは一哩十錢餘である。下ノ關と門司二市で人口三十萬、關門六市計七十五萬とすれば、渡船者數は略々同數位のものであらうか。

九龍から連絡船に乗れば香港の中心地たる埠頭に着く。上

海からの電話によつて、松原旅館の主人及びボルター二人迎へに来る。今日は生憎の日曜で總領事館も銀行・會社も皆休みのため、松原主人が東道役となつたわけである。

香港は七八哩平方位の小島、全山殆ど山ばかりで平地は極めて少く、海岸線の小刻みに出入するところに幾多の小灣あり、裏側即ち南方へ向つた方には舊香港の澳港あり、ここは現在小型船の碇泊所となつてゐる。北岸即ち九龍半島に面せる地は東西五哩あり、その中央は英人、それより東は支那人、西は小區域ながら本邦人、それに接して支那人が占めてゐる。西方の支那人街と海岸にある若干の平地から山の中腹にかけては商店街をなし、それより上は山頂まで別荘・住宅・ホテル等で埋められてゐる。

香港支那人の土地狹隘緩和便法

香港で珍らしいのは、——これは既に上海にもあるにはあつたが、——支那人の殆どすべてがアパートに住んでゐることだ。幾十幾百の家族が三階・四階・五階の四角なアパートに住み、その建物は九分通り木造で、相當時代のついた色合ひを呈してゐるところから考へるに、元來この島は非常に狹隘で平地乏しく、餘程無理しても五萬人か七萬人しか收容できぬものを、とに角四五十萬といふ大人口を強ひて收容しようとするには、空地・庭先など一切の無駄を排除して土地一杯にアパートを建てるより外仕方ない。又都市の美觀からいつても、支那人が勝手に一軒々豚小屋式の家屋や小店舗を建てるよりどの位ましかりない。——多分こんな場合に最初か中途かの香港政廳の役人の頭のいい人が考へてかういふ規定を作つたのかと思ふ。されば、日本流の計算によると人口五十萬なら戸數十萬の割だが、香港は五十萬の人に對して全島の家數やつと一萬か一萬五千位にしか過ぎない。俺は初め對岸から香港を展望して成程家は大きいものばかりだが、どうしてこれだけの家數の中に、またこんな狭苦しいところに五十萬の人間が住まへるだらうか、支那人は恐らく山の陰



む望を龍九りよ港香

へでも引込んでゐるのであらうと想像した程である。

香港の町は傾斜に添うた雜段式の建物の累積、しかも支那人の住む木造アパート、風當りはいいし、水路は少いし、これではいざ大火といふ時にさぞかし悲惨事を生ずることだらうと俺一流の直覺を働かせて案内人に訊ねたところ、これまでさやうなことは覺えがないとあつさり片附けられた。よく火の用心のいいところとみえる。

香港見物ノート

香港見物の印象を、俺が即座に手帖に記しつけた断片のままに次に記しておく。

埠頭から乗合大型バス二臺によつて左廻りに島巡り。

(一)全山花崗岩なり。

(二)二階附電車走る。これは上海にもあつたが香港のはあれよりもレール廣し。一階六仙、二階十仙。二階涼しさうなり。

(三)埠頭は數ヶ所あり。設備舊式なれど略々完備。狡猾な支那人の唯乗りを防ぐため、鐵道も埠頭の通路にては鐵柵・

鐵扉を以て固め、一人宛しか通れぬやうになす。

(四)市の中央空地にヴィクトリヤ女帝の銅像立ち、その左右にエドワード皇帝・皇后の銅像あり。また香港占領及び開發の功勞者サー・フランシス・ネリーの銅像及び歐洲大戰平和記念塔あり。

(五)西南方の裏手に香港日本總領事館・香港總督府・同官邸及び青芝見事なる大競技場あり。

(六)競技場の突當りに香港上海バンクの大建物あり。香港・上海兩地に最も堅固なる信用を保持する銀行なり。横手に高等法院あり。

(七)中央市場附近はまるで日本のお祭り騒ぎ。街路は海岸通りの七八間乃至十間の道路を除けば、すべて廣くて五六間、普通四五間、支那町はもつと狭い。

(八)支那人街の商店や、日本人街の百貨店及び専門店は、日本商品多し。マークは不明なるも大體が日本製らし。高級品には歐米特に英國品多し。

(九)日本旅館は松原外三軒のみ。總じて英人に壓迫され、日本人の貿易その他齒が立たぬ。

(十)全人口五十萬中、英人五萬、邦人千六百、米人四百、近來白系露人入込むもその數不明。

(十一)山の中腹の空地にて牧草を作る。競馬用駿馬の飼料ならん。特に牧草作りに巧妙なる支那人に栽培せしむ。その設備と煉瓦建の馬小屋を見る。英人は支那人よりも馬の方を大切にするなり。呵々。

(十二)ドライブ・ウエイは香港名物の一つ。この道路だけは堂々たるもの。十數年前着手して五六年前完成、延長五十哩、二三尺下から鐵筋を入れその上をアスファルトにて固む。日本の三寸か五寸アスファルトを流しその代り一二年で忽ち癖の入るのと違ひ、これは永久損ぜぬ仕掛。幅は廣きところ七八間、狭きところ四間、千七百呎の天邊まで車のまま行ける。元來この山には、三四十年前に造つた東洋最初のケーブル・カーがあつたが、ドライブ・ウエイができてからはケーブルはさつぱり乗り手少くなれりとぞ。ケーブルも長さ一哩半あり、八九百尺の山腹まで登り得。

ともあれ、この自動車道路は乗心地すばらしく、且つ山頂は暑さも五七度低きため英支人の有力者は近年住宅を上へ上

へと建てたがる傾向にあり。山麓より山嶺までは亞熱帶植物繁茂、香港の美觀これに負ふところ尠からず。

香港の夜景、その壯麗さいはん方なし。常綠樹・潤葉樹に蔽はれたる大傾斜に無數の燈火點綴するなり。門司より下ノ關を、別府沖より別府温泉を、青函連絡線にて函館を、等々の夜景より十倍も美しいと思へば可なり。神戸港の夜景もこれには遠く及ばず。

(十三)ドライブ・ウエイには紙屑一つ落ちてゐず。道路に對する公德心の厚きに感心す。支那人と雖も次第にこの良習慣に追隨せるならん。例の日本での辨當の食べ殻散らかしや樹花を無暗に折りとる非常識は是非改めたとしと思ふ。

(十四)香港島は僅かに三四十平方哩の小島なれど、到るところに入江あり、而して人家稀なるところは海水自ら清澄にして、海水浴脱衣場・ホテル・喫茶店等の設備萬端立派なり。

(十五)青芝のゴルフ場二つ。しかし、それより美しきは競馬場なり。これは餘程以前よりありたりと見え、港の中心街に近きところにある。山頂よりこれを瞰下すればえもいへぬ壯觀なり。

(十六)新教・カトリックの教會や盲啞學校・陸軍兵營、それぞれ風變りな建物にておもしろし。

(十七)ドライブの道すがら、瀬戸内海高松附近の島々の眺望に似たる場所あり。又日本松のみの山も見ゆ。アカシヤの並木・合歡の並木・火焰樹の並木等いろいろの並木あり。火焰樹といふは、赤き葉の上に更に火焰の如き眞紅の花群がりて咲くなり。

(十八)それより一旦市の東部を廻り更に再び中央の英人中心街や支那町を抜け、今度はヴィクトリヤ峰の最高所目指して進む。この道がいには表道にて、東方の裏道に比して住宅や別荘頗る多く、殊に海拔五六百尺の位置にある恰も龍宮城の如き支那流の極彩色の一大建物には一驚せり。塀も橋も門も玄關も花崗岩にて疊まれ、幾十棟の屋根は陶製色瓦を輝かし、屋根飾りには鯨鏢・靈鳥あり、實にどうもぶつたまげた贅澤さ、俺の値踏みによると先づ二百萬圓といふ住居なり。門標に「胡文虎胡文豹住宅」とあり。父子か兄弟か知らねど、何れは支那の大威金、多分は上海を本部とし南洋方面に活躍して大いに金權の威力を振廻す所謂華僑の大立物ならん。

(十九)更に上りて絶頂に達す。この間にケーブルの終點あり。ケーブル架設當時よりのものと覺し古びた山上休憩所や喫茶店・土産物賣場あり。この展望は、眼下に香港股賑街の宏大なる建築物の團塊あり、遠くは對岸廣東省の重要地帯に及ぶ。また九龍半島の方面を眺むれば、遙か東北方に啓德飛行場や無線電信局や重工業工場區域など見え、香港既に飽和状態に達し漸を追ひて對岸に觸手を延ばしゆくの状態にとるが如く、同時に英人の勢威牢固として抜くべからざるものあるを感ぜしむ。

(二十)歸路は別路によつて降る。貯水池二三あり。雨水と少量の清水を貯へ、これを濾過して飲料水に供するなり。ドライヴ・ウェイ數十哩の間、兩側二三丁目毎に一つづつコンクリート製の水槽あり。これに雨水や清水を溜めて附近の貯水池に導入するなり。水を大切にすること驚くに堪へたりといふべし。

(二十一)約三十哩に亙る全香港の視察を約三時間半に遂げて下山。今日の案内者をその主人とする松原旅館に一旦落着き、それより日英人の百貨店街を見て、繪葉書や身の廻り品

など買ひ求め、夜七時半の連絡船にて船へ戻り、食事・入浴などを済ませ、香港よりの見送人等と別れを告げ、船は十時出航せり。

この日折あしく日曜にて總領事館や正金銀行・三井銀行あたりを訪ねること能はざりしは甚だ遺憾なりき。

出航に當つて香港夜景の美觀を満喫せしが、黒き山影の裾には無数の大螢光、中腹には點々たる小螢光、或ひはルビーの如く又はダイヤモンド・サファイヤの如く輝く。正に世界三大夜景の一たる名聲に恥ぢず。ベッドに入るが惜しかりし。以上が香港見物のノートなり。

比律賓群島の概念

六月二十八日。船中無聊。圍碁をやつたり運動をしたり、青壯年者のプールの水泳やデツキテニス・デツキゴルフ等を見る。

この夜再び映畫があつたが、例の獨逸語トーキー故團員中わからぬのは俺ばかりではない。

六月二十九日。朝五時半頃よりそろそろマニラ灣周圍の山

々を眺む。灣は西南に向きて開き、ルソン島の中部にあり。島の廣さは約四萬平方哩即ち日本本州の半分位である。南方にミンダナオと稱する大島あり。これも約三萬七八千平方哩の大島である。

比律賓群島の全長は南北千百哩、東西の最長八百哩、大小三千の島の總人口千三百萬人、内土人に次いで支那人が多く、日本人は専らミンダナオ島のタヴァオ附近でマニラ麻の栽培に従事してゐる。比島の全邦人二萬人の中、その七八割は麻及びその他の農業に従事するといふ。

マニラの人口は三十二萬、内日本人五千、支那人五萬、米人三千位だといふ。ここに日本總領事館・正金銀行支店(爲替取扱を主とす)あり。又日本人街には大小數多の百貨店及び雜貨商あり。これらは日本人及び土着人相手に商賣をやつてゐるが、到底支那商人には及ばない。

貿易高(十一年度)は日本よりの輸入三千六百萬圓、輸出五千二百萬圓といふ。されば日本にとつては全く輸入超過國即ち先方にとつては日本が大切の得意先となるわけである。産物は砂糖を第一とし、マニラ麻・煙草・椰子樹より採る

没日の海南



各種の半製品・米等であるが、近來石原産業の手によつて銅・鐵等の鑛石も出るといふ。比律賓全島に涉り、就中マニラ灣内の漁業は日本人の權益に屬し、相當の收穫を擧げてゐる由だ。

マニラ港の對岸南方に無電の一大アンテナが見えるが、こゝは比律賓唯一の海軍々港カヴィテで、いざといふ時にはたとへ獨立の後と雖も米國東洋艦隊の根據地となるべく、こゝより更に東方の米領グアム島と併立する肝要地點だといふ。

マニラ雜觀ノ一ト

マニラ港の棧橋は東洋一と世界一と米人の誇るだけあつてさすが膨大なもの、數年前の竣工にかかり、鐵骨コンクリート造りで工費二三千萬圓を要したとか。棧橋の長さ二百四十間、幅三十間、高さ約四五尺、三四萬噸の巨船たりとも、兩側に三隻宛計六隻を繋留し得るのみか、いかに吃水高き優秀船でも巧みに甲板上より乗降できる仕懸けがある。貨物の積卸しには一切電力クレーンを用ゐるが、クレーンの數といひ、派手な設備といひ、例の錢金を惜しまぬ米國式の大袈裟

さで、これといふのもマニラ人を嚇かす意味が半ば以上加つてゐるのであらう。

現在のところ、マニラの産業特に農業は同國人の怠惰癖によつて割合に振はず、勢ひ千何百萬人の土人の購買力つかず、結局貿易等は伸長の度が少いので、従つて數千萬圓の棧橋も十分の利用を得てゐない有様の如くである。

我々の船まで日本總領事館副領事の木原氏（内山領事は臺灣行きのため不在）、日本商工會議所理事長原氏、タヴァオの麻栽培その他二三の殖産業に關係する古川義三氏（これは丸紅商店専務古川鐵二郎氏の令弟で令兄によく似てゐる）、及び東洋ホテルのマネージャー等出迎へに來られ、例の四町に餘る長い棧橋を渡り、事務所の前より四十二人乗りの大型バスに乗つてマニラ見物に出掛ける。左にその手記を掲げよう。

（一）海岸通り及び附近の廣場を快走す。行手の右に國會議事堂あり。白聖の宏壯なる殿堂なり。米國領となりし以來、青年學徒が歐米の新空氣と自由民權の説に心酔し、數年前獨立のこと定まるや、比島政府は民衆の希望を入れて一種の懐柔策として建てしもの。最初三四層樓となすべき豫定が財政



像銅と塔念記のルーザリ士志・ラニマ

の都合によりて二階建に變ぜしといふ。日本のそれには比すべくもあらねど、しかし人口千三百萬人の半未開國の比律賓としては相當のものなり。

議會制度を聞くに、選舉は普選により、議院は下院一院制、代議員は四百八十人、會期は十月より翌年二月まで、日曜・大祭日を除く滿百日間も議論倒れの小田原評定を續けるらしい。

（二）廣場の突當りに上が逕信省下が郵便局の二階建あり。議事堂よりも更に大なり。高塔聳ゆるカトリック寺院と議事堂とこれとを以てマニラ三大建造物となす。

（三）これに先立ち、埠頭より程遠からぬ芝生の廣場に西班牙主權時代の千八百九十六年西班牙政府の詭計に陥り死刑に處せられし比律賓獨立の父リザールの記念塔及び銅像あり。恰も支那革命に於ける孫逸仙の如き地位にある愛國の志士なり。リザールは政治家又は法律學者としてのみならず、言語學者として著名にして、世界八ヶ國語に通せしといふ。餘程國民に追慕されると見え、リザールの名を冠せる街路・廣場・公園等多し。比律賓はリザール死刑の後二年の千八百九十

八年、米西戦争によつて米領となれるが、今日の獨立は蓋しリザールの植付けし種子の芽生えしなり。今の大統領ケン

は恐らくリザールの衣鉢を繼ぎし弟子かと察せらる。

(四)海岸に近き數條の大街路及び廣場には、アカシヤ・マ

ンゴー・椰子、時に火焰樹(鳳凰樹の俗名)の並木あり。

(五)城内に入る。城壁は日本のそれと同じく石堀なり。水族館を見る。小規模ながら、美魚・珍魚に富む。

(六)正金・三井・三菱・石原産業等の支店は市の中心街にあり。正金銀行支店へ貨幣の兩替に行き、太宰支店長に敬意を拂ひ、十五分ばかり交話す。

ここは大體に爲替事務のみを取扱ひ、それ以外は在住日本人の取引上の便宜を計るなれど、邦人は僅か四五千人、それも七八割まで職工・労働者・漁業者の占むるところなれば、大した仕事もなきなり。

マニラの氣候は四季共八十度乃至百度の間の往復にて大差なく、且つ雨季・乾季の季節片寄り過ぎて變化乏しきため家庭的倦怠を生じ易く、どうも面白からぬこと起り勝ちなり。いはば男子のみの餘儀なく働くとこにて妻子は兎角マニラ

掘立小屋散在するは餘り結構な對照に非ず。百姓の貧乏は氣の毒なれど、その原因の半ばは怠惰癖にあることを思へば即ち自業自得ともいひつべし。立派な別荘を見て、どうして、何養!といふ發奮なきや、これも過去六十三年間感奮を以て終始せる俺にはさつぱり解けぬ謎なれど、蓋し、太陽の熱度腦味噌のよきところを溶かすならんか。可悲。

(八)マニラ銀座と稱すべき中心小賣街はかなり股賑、比島人・支那人の間に日本人の店も混り小百貨店らしきもの又は雜貨専門店など相當の店舗見ゆ。ここにて、ノーカラーのワイシャツ一枚買ふ。日本の一圓二三十錢程度のものが一ペソ

九十フェニー即ち邦貨三圓三四十錢なり。(ペソは米弗の二分の一に當る)十割の關稅ありてもその利益率は大なるものなり。

(九)堂々たる米國式映畫館あり。日本のよりも立派なり。比島人も米國趣味にかけてか、日中より續々と入込みつつあり。映畫館の數、市中に百を以て數ふるといふ。

(十)中央マーケットを見て後、日本人小學校を參觀す。生徒六百、遠く國を離れて熱心に教鞭をとる先生達の苦心察

には長居せずといふ。風土の人心に影響するの大なるそれ此の如きか。

マニラの人口三十二萬の中、支那人五六萬、日本人四五

千、日本人會々員二千七百人許りなりといふ。

比律賓には四十數種の人種を數へ八十餘種の言語行はるる故、馬來人と西班牙人の關係を始め雜種無數なり。而して氣候風土のために總じてのらくら者多く、麻・砂糖・煙草・米等の産物の栽培も、若し日本人に作らしむれば、同一面積にて三四倍乃至五倍の收穫を擧げ得んものを、この地の百姓は極めてのんびんだらりとやりをる様子なり。

(七)郊外五六哩ドライブして實地を見るに、相當肥沃の土地も雜草の生えるに委せ、米や麥を作るにしても草をとらずにそのまま植付ける始末にて、俺のやうな勤勉且つ經濟觀念の發達せる人間より見れば、齒痒くて仕方なき位なり。しかも農家の生活程度は如何? その住家たるや實に甚しき陋屋にて、屋根と圍ひにはアンペラを用ひたり。成程風入りはよいかもしれねど、とても人間の住處とは思へず。郊外の洋人

或ひは支那人その他の別荘の華麗なる中に、かかる無産者の

するに餘りあり。男女の先生十五人許りの中、比島人一二ありといふ。

(十一)午後四時半より六時まで、マニラ郊外の高級住宅街・アパート街の一角に立つ日本人俱樂部に在り。俱樂部は正金支店長太宰氏を會長として、會員二千七百人を擁す。

この夜、マニラ在勤の官吏・實業家中の有力者十名程集まる。即ち左の如し。

- | | |
|--------------------|--------|
| 總領事館領事 | 木原氏 |
| 同書記長 | 原氏 |
| 正金支店長兼日本人俱樂部會長 | 太宰氏 |
| 日本商工省貿易通信員マニラ駐在 | 渡邊薫氏 |
| 三菱商事マニラ出張所長 | 鈴木不二雄氏 |
| 三井物産マニラ支店長 | 河村雅治郎氏 |
| 大阪貿易株式會社副社長 | 森誠之氏 |
| 大同貿易株式會社マニラ支店長兼取締役 | 中村直二郎氏 |
- それに、臺灣駐屯軍の武官二名と我々一行二十名(十名餘不參)と併せて約三十名にてお茶の會を催し、圓卓會議を開

催する。

正金の太宰氏座長となり、日比貿易の現状と進展策、對米貿易の狀況、比島の生産力・消費力の概要、主要産物と日本よりの輸入品、關稅障壁問題等を語り合ふ。米國品は無稅の特典あり、これに反し、日本は比島人と合本にて拓殖業・工業を起すにも、外に便法はなきにあらねど、普通投資額四割以下といふ制限ありとぞ。

渡邊貿易通信員は痛快極まる悲憤慷慨家にて、役人としての立場をかなぐり捨てて個人として滔々北守南進政策を演説し、比島は獨立後結局日本と聯繫するに至るべきを斷言して憚らずと結べり。

(十二)夜七時歸船。木原副領事と原書記長、特に船まで見送らる。

八時出航。ここにての乗客は、上海・香港よりも少し。以上がマニラ雜觀のノートなり。

渡邊氏熱辯の一節

既にマニラ見物は済んだが、かの日本人俱樂部のテイー・

パーティーに於ける貿易通信員渡邊氏の熱辯今なほ耳朶に存するを以てその一節を記しつけておかう。

氏は常に南洋を活動舞臺とし、比島にだけでも既に十三年を経た人で愛國の志士氣取りの激越なる言辭を用ひ、政府の役人たる位置を離れ渡邊一人としての意見を述べるのだと豫め斷り、次のやうな痛快淋漓眞に溜飲の下る名演説をやつてのけた。

「東西八百哩、南北千百哩、亞熱帯に位し、太平・印度兩洋の鍵を握り、しかも天然資源極めて豊富なるこの比律賓群島は斷じて西班牙や亞米利加の所有物たらしめてはならぬ。比島獨立後は、日本人の祖先が比島人と人種の系統に於て關係あることと、大和民族獨特の任侠と剛毅——それは既に比島人の認識しつゝあるところだ——を利用して大いに日比親善の實を擧げ、結局は日本の保護國たらしめなくてはならぬ。北方は滿洲國に止め、今後は北守南進、即ち比島を足場として幾多の蘭・英領諸島を開發しなくてはならぬ。比島は、砂糖・米・煙草・椰子製品・麻の五大産物の外に、銅・鐵・金等の礦物に富み、今や三井・石原あたりの日本實業家の經營

發展しつゝあり、殊に南方ミンダナオ島のタヴァオ市には、同市人口十萬人の中日本人一萬五千人がゐる。麻の栽培に従事し、その投資額數千萬圓、現在の投資價值一億圓、日本人の純利潤毎年數百萬圓に達してゐるが、土地所有權問題の安定によつてはなほ伸展する見込十分である。日本人の投資は合資・合名・株式何れも十分の四を超過してはならぬといふ法律があるが、堅實信用のある比島人又は米國に生れた日系第二世を活用すれば、絶對多數の株を得ること必ずしも難くない。

由來、日本本州・琉球・臺灣・比島、皆島嶼であり、太古の昔南洋より日本へ渡つた原始民族は科學的に見て比島方面の人種に關係するところ淺からず、日本よりの寒流と比島よりの暖流が交互に流れつつ兩國の生産物を豐饒ならしめてゐる點など誠に妙味あるではないか。

中世の日本人が日の丸の旗を翻しつゝマニラを攻め落したことを思へ。また明の末日本の女性を母とする鄭成功が三回これを陥落せしめ、たとひ短きは一日天下、長きは一と月天下でもマニラに號令を下したことを思へ。比島こそ日本の保

護と提携を必要とする天與の地といふべきである。寒さ酷しき北滿、遠く隔たれるブラジル等に移民を獎勵する金と力の何分の一かを割いて若し比島にこれを加へるならば、その効果いかにかりであらうか。

北守南進！ これぞ日本帝國永遠の發展の根本的方策である。云々。

渡邊氏の雄辯長時間に亘つて一同を煙に巻いたため、座談會としての意見の交換は極めて短時間に終つた。しかしこの熱情漢が我々に相當深い印象を與へたのは事實で、これに對して何か物いひたげな風であつた列席の陸軍武官も結局その愛國の志を諒としてか、そのままに終つた。

日本對比律賓の貿易高は左の如くである。(日本を主とする輸出入)

昭和十年度

輸出四千二百萬圓、輸入五千萬圓(入超八百萬圓)

昭和十一年度

輸出四千三百萬圓、輸入五千九百萬圓(入超千六百萬圓)

船中雜事

讀書・運動・日記かき・座談會の音頭取り等々で、一行中何だか俺が一番忙しさうだ。食事は七八人の一卓中俺が一番食氣が旺んで、青壯年者からうらやまれてゐる。糞の分量は平常の二倍、色も大いによろしい。入浴時の摩擦と運動・體操が效くらしい。酒は持參の日本酒二升の中、十三日間にやつと七合ばかり飲んだだけだ。食堂では二日間に一度ミュンヘンの濃厚ビールをコップ一杯(約一合)づつ試みてゐる。こんなに香りのいいビールは今まで飲んだことがない。日本ではビールや牛乳を飲むとすぐ下痢する癖のあつた俺が、ここでは一向その氣配のないのは品質のせみか風土の影響か、とに角、俺はすつかりビール黨・牛乳黨になつてしまつた。

何しろ上等食物の食ひ放題なので若い連中の中三四人は腹を壊し、老年組にも多少弱つた人が出て來たが、俺は益々元氣旺盛だ。これも俺の永年の鍛練——毎朝頭から腹へ腹から足への數百回の冷水摩擦やその他人知れぬ保健法の苦心の然らしめるところと俺は内心大分得意であるが、しかし或ひは

母や老妻やその他が毎日俺の無事を祈願してくるので神佛の庇護があるのかもしれない。さう思へばついでに有難涙が出るのだ。

七月一日。會の木下氏より會計報告とゼノアまでの歴訪土地の概況及びシンガポールの詳細な豫備知識に関する談話あり。あと讀書にて過す。

七月二日。午前中、シンガポール上陸の準備。磅を海峽植民地弗に兩替す。(一弗邦貨一圓七八錢)

シンガポールでは越後柏崎出身の傑物、高忠商店を是非訪ねたいと思ふ。

船中生活で一番つらいのは氣温九十度以上の流汗淋漓の中を、カラーのついた洋服をきちんと着て食堂へ出る時の暑さだ。殊にタキシードを着る時は——これまでに二晩着たが——第一恰好からして沐猴の冠でその窮屈さ加減といつたらない。それから密閉といひたい位に締切つた風呂も息苦しい。しかし椅子・テーブルの生活には全く慣れた。

最も愉快なのは、太平洋・印度洋の澎湃たる波濤を眺めながらデツキの上を散歩すること、一周三四丁のものを毎日

三四十周位歩く。清淨なる空氣、おのづから肺腑を洗ひ盡すの感がある。

一行の中三分の二までの人々は、既に日本の米・味噌が戀しくなつたといつてゐるが、俺はまるで逆で、船中の珍味佳肴に出會つては味噌や澤庵は最早大して魅力はない。どうも俺は變り者らしい。

船中で感心させられるのは、マツチを大切にすることだ。一本のマツチ棒と雖も無駄にはしない。元來日本では、宿屋・カフェー・喫茶店・街頭廣告等、到るところタダのマツチの氾濫で、そのせむかマツチの一箱や二箱は何とも思はぬ悪習慣がついてゐて、俺はいつもこれを苦々しいことに思つてゐたが、シャルンホルスト號上に於けるマツチの尊重は、はからずも俺に大なる満足を與へた。事小なりといふ勿れ、これ亦獨逸魂の一つの立派な現はれなのである。

〔第六信〕彼南にて認む

新嘉坡上陸 ジョホール王國へ

七月二日、午後二時新嘉坡着。丸一晝夜碇泊の豫定だつたが、着港が二時間許り遅れたのでそれだけ見物時間が縮まつたわけだ。會の木下支配人が、晝は新嘉坡島の對岸なるジョホール王國のゴム園を見學し、夜は自由行動にするとプログラムを發表する。

早速用意を整へ、自動車七臺に分乗して出發。當地第一の日本旅館東洋ホテルの主人及び案内人二名附添ふ。埠頭に近く、三井物産・日本郵船・大阪商船・横濱正金・日本總領事館などの並ぶ樞要街あり、これを横切つて、總督府官廳・市公會堂・郵便局などの宏壯な建物を右手に眺め、英人街・支那人街の間屋・小賣店・百貨店町や日本人街の商業區域を抜け、ものの十三四哩も行けば、ここに新嘉坡とジョホール王國とを境する約一哩の海峡がある。

ジョホール王國は、いふまでもなく馬來半島の極南端に位置し、東西の最長二十六哩、南北の最長十四哩、總面積二百二十平方哩の小國であるが、扱て件の海峡には、海中を通ずる二三十間幅の堤防狀の立派な道路あり、これを渡りゆく感じは全く湖水の畔を走るかのやうである。

ジョホール王国の入口には、兩側相向ひにどえらい警察署あり、その前には馬來人の巡查數人が頑張つて我々一行の旅券と新嘉坡警察署の證明を検査する。新嘉坡でも相當うるさかつたが、ここでは一層うるさくて十五分もかかつた。實に嚴重なものである。それといふのは、新嘉坡は無税の自由港だが、ジョホール王国ではかなり重税をかけるため密輸の脱税が止まぬからである。——そこでこんな挿話が生れる。：

：日本製のゴム靴新嘉坡で五六十錢のものがジョホールでは五割程度の従價税をかけられて八九十錢から一圓となる。されば、馬來人のアタマのいい奴は何かの用事で新嘉坡へ渡る時、行きは裸足、歸りはすました顔でゴム靴を履き込んで来る。——査證のやかましい今一つの理由は、爰一兩年來英國が新嘉坡軍港の龐大な擴張を計畫し、大海軍・大空軍の建設に熱中してゐるので、もしや、日本その他から軍事上のスパイが入り込みやしないかと警戒するためであるといふ。新嘉坡の髪むじや印度巡查や英國軍人の眼光ただならぬものあつたのも成程と合點された。ジョホール王国の方は英國へのお追従として嚴重にしてゐるらしい。

新嘉坡島の最北部からジョホール王国を眺めた風景は眞に絶景だが、前にいつた海峡道路(つまり一種の地峽)を渡り、内海を左手に見て西方に進む四五哩の間は、道路は七八間幅で申分なく、土地の凹凸の變化も面白く、椰子その他の熱帯密林中に色とりどりの別荘點在して遠望にも優る佳景、南洋有数の勝地の稱あるも故なきでない。途中、ジョホール王の宮殿・ジョホール政廳・小學校・中學校・女學校・カトリック教會・回教大寺院・動物園・病院等あり、いづれも鬱蒼たる植物に蔽はれてゐるのだから、いはばすべての機關が一大公園中に包含されてゐるといふも可なく、ジョホール王たる者、たとひ英國の保護領主なりとはいへ、こんな極樂淨土に住むとは何たる幸福の身であらうぞと思ふ。

それから道は海岸を離れ、農園及び果實(パイナップルその他)罐詰の工場地帯へ入る。椰子林・芭蕉畑が最も多い。更に行くこと十二三哩、——といへば新嘉坡埠頭からは三十二三哩になるが、——熱帯産業株式會社セナイゴム園及び同工場に達す。

熱帯産業株式會社を觀る

この會社は純三井系のもので、またここは同會社經營事業の一部にしか過ぎない。

工場長福島英彦氏の説明を要約すれば次の如くである。

(一)ゴムは世界的・國際的商品で、且つ戦時・平時を問はずに必需品である。ゴムの需要は世界的數字から見ても一年毎に一割づつ増加して行く。爰十年間には正に倍加したといつてよい。しかも氣候・風土のゴムの栽培に好適な土地は世界中に比較的少い。

(二)大正年間以後、投機的事情も加味されて、ゴム相場は實に千變萬化した。即ち大正六七八年頃には最高一封度一弗(これは新嘉坡弗、邦貨約二圓)以上にまで奔騰したものが、これに次ぐ世界的低物價・事業萎縮時代に影響され、昭和五六年頃には一封度唯の五六仙まで下落し、各ゴム園共異常なる不引合に陥り、現にこの熱帯産業の株式なども、大三井家の背景と好況當時の内部保留・堅實償却を以てしても尙且無配當、五十圓拂込の舊株唯の十圓臺とさへなつたが、今や滿

洲事變この方の大軍擴張時代を謳歌しつつ、四五年間變昇りに昇り、今や一封度の新嘉坡標準建値が三十二仙臺になつたので、最早十分に引合ふ上に、賣行きも亦頗るよろしい。

次に馬來及び蘭領東印度の二大ゴム産地發達の由來やこの會社外日本數會社の投資狀況等について種々話のあつた後、工場附近なる二十五年齡の最も排液量旺なる一本のゴム樹に熟練せる一人の若き馬來土人を登らせて、切付け・採液の實際を見せ、更に生ゴム液を火力又は天然力によつて煉し或ひは乾燥する等各種加工工程の説明があつた。一口にいへば、溶液を凝固せしめ、これを一枚約一封度の型に作り上げ、嚴密に検査の上百枚を一捆として荷造りするのである。

南洋の果物

見學終つて後、茶菓・麥酒・平野水及び南洋特産果物の接待に預つたが、就中果物の美味は果物マニヤの俺を全く狂喜せしめた。

樹上にて十分に成熟せるパイナップルや巨大なるパパイヤもさることながら、例の南洋果物中の王者といはれるマン

ゴースチンの味こそは絶讚に値するものであらう。形は茄子といはんか無花果といはんか、赤黒き斑點ある外皮は一寸グロテスクだが、皮を剥けば、中には純白の例へば百合の芯の如き實あり、食へば香氣高く酸味・甘味兩つながら完し。俺の好物たるネーヴル・オレンヂや紀州蜜柑や水蜜桃も、このマンゴースチンにはとても及びもつかぬなどと思ふ。

歸路雜觀

やがて一天掻き曇つて來たので永居は無用と、當番團長の松田氏と木下支配人から厚く謝辭を述べ、俺の音頭にて熱帯産業株式會社の萬歳を唱へて歸路につく。

當地方の氣温は五六月の最高が屋内九十七八度、今日（七月二日）は八十八九度、十一月・十二月の最低八十度前後だといふ。

新嘉坡市中にもジョホールにも、香港や比律賓同様に、鳳凰樹（火焰樹、又ファイヤの樹ともいふ）がなかなか多い。樹高二三丈、樹枝の周圍十間乃至十五間四方、葉は合歡に似て、上部太陽の直射を受けるところに眞紅の火焰の如き花を

密集的に開くのである。

ジョホール巡査兼軍人の検査は往路同様に嚴格である。この査閲官についてはこんな話がある。

嘗て英國の新嘉坡總督がジョホール王國の皇太子に向つて、馬來人の巡査・軍人は兎角收賄によつて官紀を紊亂し關稅の脱稅を默許するやうな形跡があるから、いつそ罷いかめしき印度雇兵に代らしめたらどうかといつたところ、皇太子即座に總督の言を一蹴し、「ジョホールは馬來人のジョホールである。ジョホールの巡査・軍人は斷じて馬來人でなくてはならぬ。ジョホール王に忠節を致す馬來人の數は無限である！」と火焰樹の花の如き大氣節を擧げたとか。蓋し英國は、王とか酋長とかいふ虚名を與へて嬉しがらせ、實質はすべて己が手中に收めようといふ政策ばかり執つてゐるのだが、右のジョホール皇太子の啖呵には相當味はふべきものがあるではないか。

越後出身の商傑高忠商店を訪ふ

話は相前後するが、抑と俺が新嘉坡上陸に際して、異常に

心ときめきを感じた理由は、俺と郷里を同じくする越後相崎出身の成功者たる越後屋吳服店（高忠商店）を訪問する樂しみがあつたからだ。今やうやくその始終を語る得る段取りとなつた。

ジョホールから新嘉坡へ戻り、東洋ホテルに立寄り主人公に越後屋の所在を訊けばすぐこの近所だとのこと。そこで一旦船へ歸つて直ちに夕食を濟ませ、同室の西山氏及び佐多博士と三人連れになり、埠頭で馬來人の自動車を雇ひ、約一里弱の彼方なる日本人街の中心地ミツドル・ロード街に至つて越後屋を訪うた。

越後屋高忠商店の店舗は今年五月に新築落成して向ひ側から移轉したばかりの間口二十間（内貸家の間口八間許りあり）、奥行十五間、鐵筋コンクリート造り最新様式の堂々たる三階建、數回乗つた馬來人自動車運轉手五六人の誰一人知らぬ者のなかつた位ミツドル・ロード街でも斷然顯著なる高級商店である。

新嘉坡の地價は邦價に換算して一坪五百圓乃至千圓、特上は二千圓まであるといふが、越後屋の所有は百坪以上あり、

全三階總延坪は五六百坪、而して三階は事務・札入・荷造・入荷等の處理と嵩張り物の置場に宛て、二階は高級絹布・純絹物の陳列場に、一階はモスリン・人絹・綿布の陳列場を用ゐ、また入口には三箇の大節窓あり、これには廣中高級絹布・更紗模様佛蘭西縮緬・鐘紡山科工場製逸品・人絹綿布高級品等がそれぞれ手際よく飾られ、照明もまた申分ない。各階の高さ十六七尺といふ贅澤普請、一坪邦貨六七百圓も要したことであらう。

ジョホールへの往路既に人に託して手土産を届けておいたから俺の行くことは承知してゐてくれたであらうが、店頭に至ればこの時は營業時間外のこととて中央入口のシャツターは下り、横の出入口の戸締りも嚴重、依て隣家の日本人雜貨店から電話で頼めば、直ちに開扉、我等三人を請じ入れてくれた。

俺より六歳の長であつた一代の商傑高橋忠平氏は六年前六十四歳を以て世を終り、爾來サワ子未亡人（本年六十四歳）は株式會社越後屋吳服店の女社長・女主人となり、數十名の店員を統率して名だたる女傑振りを發揮してゐるのである。

常務の福田氏を始め、山岸・關・罇等の幹部店員諸氏に會ふ。福田庫人氏が高崎在の出身（これも越後野田村に深き縁故ある人なり）である外は全店員越後柏崎地方の人で、關君は高崎吉野藤店員中野の友人、罇君は俺の義兄罇藤吉氏の縁故の者、また高崎吉野藤店員笹川の實弟もここに居り、いづれも未知の人達ながら、語れば忽ち舊知の如くである。これらの幹部諸氏は忠平氏子飼ひのすべて二十四五年以上の勤績者、現に女社長サワ子未亡人に對して全責任を雙肩に荷ひ涙ぐまじきばかりの活動を續けてゐる。近來世界的好景氣の波に乗り、立派な成績を擧げてゐるらしく、年商は不明だが、俺の想像によれば、新嘉坡弗にて百二十萬、邦貨換算その二倍は下るまいと思はれる。

忠平氏在世の大正十年までは八九割まで日本人相手、殊に日本人藝娼妓・料理屋女中向きの和服地を商つてゐたが、この地の西洋人旅客の出入次第に多きことと、無關稅國たる好條件に恵まれてゐることと、大正九年のパニツクによつて競争相手間に倒産者續出したことと、これらの事情重なる機會に乗じて、大正十年來斷然廣巾に進出、純絹無地（佛蘭西縮

緬や富士絹）及び同型付（友仙や更紗）の高級品、人絹・綿布の優秀品を取扱ひ、又西洋人向き日本服即ち仕立上りの友仙・刺繡等の打掛けや長襦袢用下着を商ひ、或ひは西洋男子用品生地の切賣りをなし、遂に外國人向き廣巾類の賣上高は全販賣高の八割に達し、残りの二割が従前の日本人向き小巾物（中形・ポイル・ジョーゼット・京呉服・西陣物）として餘勢を保つといふ状態である。而して越後屋の買先は、京都の西村惣・鐘紡山科工場、神戸の龜井、大阪の丸紅・市田等であるといふ。

サワ子未亡人は郷里柏崎に在り、毎年一兩回新嘉坡に來つて各一ヶ月間位滞在、業務を督勵し決算などを覽るといふ。今春は福田常務の案内でビルマの佛教靈場巡りをしたといふが、篤信の越後人としては洵にさもあるべきことだ。高崎の老妻なども船にさへ強くんば、悴共に案内させて印緬の佛蹟を見物させたいものだと思ふ。それはともあれ、サワ子氏たる者いかに女丈夫とはいへ、頼む夫君忠平氏には先立たれ、往年かけ換へなき一人息子には不慮の横死といふ一大衝撃を加へられ、財富何百萬を積むともさすがに心淋しきもの

があらう。さればにや、忠平氏の遺言により高橋家は一代限りにて廢家と定められ、店だけは會社組織として先代の遺志を永續せしむるのであるといふ。現に柏崎本町二丁目なる時價三十萬圓と稱せられる宛然城廓の如き本宅は忠平氏の臨終に際し維持費一萬圓をつけて柏崎町へ寄附し（これ現在の喬柏園なり）、未亡人は附近のささやかな住ひに起居し念佛と寺詣りを仕事として餘生を送りゐるのである。（本稿整理係吉野秀雄曰く、父が新嘉坡に越後屋を訪うた七月二日より二週日の後余は偶々越後柏崎町に遊んだが、その時その地の新聞に、サワ子未亡人が柏崎町公會堂建設資金として、新嘉坡ゴム樹林賣却代金十七萬圓を西卷町長の前に差出し、町長爲に感激の眼をうるませた云々の記事を見た。以て父の記事を補足する。）

越後人にして商傑高橋忠平氏の名を知らぬものはあるまいが、實際に新嘉坡に赴いて越後屋の實際を見た者もまた稀であらう。俺がここに同店の状況を稍々詳しく叙述したのも越後人士の興味を考へてのことだ。しかし、人若し忠平氏夫妻を以て單純なる物的成功者とのみ目するならば、それは大いな

る謬りである。我々が忠平氏夫妻に學ぶべきは、第一にその海外に新生命を開拓したる勇猛心であり、第二にその貯へたる財力によつて社會公共に盡さんとする高潔なる精神である。俺はこの日越後屋を訪問してかねての念願を果したことを欣快とする。而して俺の最初の故郷柏崎地方の青年諸君中より第二の高橋忠平の出でんことを衷心より待望する。

福田常務の案内で附近の夜景を見物、四五の邦人商店に立寄つて繪葉書その他の小買物をなし、また二種の邦字新聞によつて黒龍江ノ艦撃沈事件の詳細を知る。それより約一時間半、福田氏の説明にて諸所ドライブ、市内樞要の街衢・大植物園（上野公園の十數倍あり、自動車の一週二十分を要す）・西海岸海軍根據地附近・英人支那人の別莊地等を見る。

十時半歸船。福田氏に厚く謝辭を述べて別る。誠に忙しく洵に痛快なる半日であつた。

この日雲影あれど天氣よく、船室内の氣温八十六度。

杉田領事と會談す

七月三日。杉田新嘉坡領事の來船まで二三時間餘裕がある

ので、同室の西山氏と共に再び越後屋を往訪、福田氏の案内でドライブ、昨夜とは別方面の郊外納涼地・高級住宅地・日本人墓地・日本庭園式公園・東部海岸等を順々に見巡る。

歸船すれば、杉田領事は既にサロンへ来てゐた。

杉田氏は今春まで印度でも最も暑いカルカッタに居られた由で、馬來人と間違はんばかりに色黒く、而して談論風發の快男兒、我々十五六名を相手に新嘉坡を中心とせる最近の南洋事情を説く。

同氏の喝破せるところを要約すれば、——滿洲を以て日本の生命線とするならば、南洋はその培養線でなくてはならぬ。當港を根據地とする邦人漁夫はその技術極めて巧妙で遠く濠洲近海まで出漁して漁獲高頗る多く、新嘉坡及び南洋で消費する魚介の三分の一乃至二分の一は邦人漁夫が供給し、その餘りは冷蔵して下關・若松・東京附近の漁港へ積出してゐる。これは活躍の一斑であるが、その他ゴム・煙草・麻・椰子・米・果菜等の農産物にしても、又鑛業・商業にしても、幾多の辛酸を嘗めて先輩の築き上げた地盤を確守し、大いに國富を致して滿洲方面で遺分を補つてゆかねばならぬ。幸

ひ新嘉坡は國際的好況の波に乗り、鑛産物・農産物等市價すべて昂騰、爰十年嘗て來見ぬ活況を呈してゐる。云々。

四億の富豪胡氏兄弟

正午杉田領事辭し去るや、積荷の關係から出航約二時間遅れると聞き、西山氏の萬一乗り遅れてはと案ずるのもきかず、またまた市中へ飛び出し、かの香港ヴィクトリア山腹に龍宮のやうな豪華な邸宅を營んでゐることを前便に書いた胡文虎・胡文豹兄弟の新嘉坡に於ける邸宅及び私立博物館ともいふべき寶庫を観る。胡は果して華僑の親玉、素廣東の出身で數代を閱する中に今や兄弟の財力は二億弗(邦貨四億圓)に達したといふからすさまじい。

寶庫の陳列品は古代から近世に及ぶ金・銀・翡翠・瑪瑙・玉等寶玉石類の器具・置物・衝立・聯などが多く、書畫は少く、一見して拜金趣味、チャカチャカ趣味、恐らく猶太人に似て商賣一方金より外何も知らぬ人物であらうか。ただよくもこんなに金目のものを蒐集したものと、その努力には一寸感心させられるが、或ひはいざといふ時に捨賣にしようとい

ふつもりなのかもしれぬ。とに角、この寶庫一つでも何千萬元といふ財貨であらうと思ふ。

兄弟兩人の肖像畫があるのを見れば、双方共五十がらみの苦味走つた好男子、眉太く鼻筋通り髪ふさふさとして且つ漆黒、殊に眼光はさすがに炯々、全く心憎きまでに拔目なき面構へである。

馬來人の運轉手の話によれば、胡の家は昔は阿片その他の密輸出入で儲け、それから銀相場の劇變や高利貸で儲け、今では日本から南洋方面へ入る薄荷及びその製品の七割までを取扱つて巨利を博し、南洋に多い英蘭系猶太人の商人や金貸も胡の怪腕には一目を置いてゐるといふ。また彼等兄弟は支那領土内の四五ヶ所・ラングーン・バンコック・パタビヤ等至るところに愛妾を置き、その數は十號を超えるとか。さも

ありなん。
午後二時、出航に先立つて越後屋の福田常務またまた船へ來られ例のマンガースチンその他の珍果を盛つた籠を贈られた。俺は福田氏に向つて主家のため邦家のため、愈々責任を重んじて將來更に飛躍されんことを祈つて別離の詞とした。

この夜、疲れて早くベッドに入る。

彼南名所めぐり

七月四日午後三時、彼南港に着いた。

英領馬來聯邦の彼南とは一體どころか?

彼南は相當古くから英人によつて拓かれた南方航路の要港、即ち、馬來半島の中部で半島中最も東西の幅廣き箇所の西海岸に位し、歐洲と極東を連結する地點にある。英國が彼南の開發に骨折つたのは、新嘉坡とラングーンの間貿易港にせんがため、現に錫の輸出によつて名高い。

彼南の人口は二十萬人、内支那人十五萬人を占む。英人百五十人・邦人二百人を含む文化人は五六百人にしか過ぎぬ。彼南は新嘉坡と同じく小島にある港市で、彼南島は新嘉坡島に比すれば遙かに小さく、約半分強といふ面積である。

港内が浅いせむか一哩許りの沖合に碇泊し、艇船によつて棧橋に着く。これより先き同地唯一の日本人旅館たる福島縣出身の朝日旅館支配人山崎君船まで出迎へられて彼南の大要を聞かせて貰ひ、やがて棧橋より七臺の自動車に分乗して見

物に出掛ける。

郊外四哩のところに、蛇寺といふを観る。彼南へ立寄る旅客は必ず一度は見る名所ださうだが、單にちつぽけな支那式の寺にしか過ぎぬ。これを蛇寺といふのは、寺の後ろに蛇の安住する大きな穴があり、そこに青や褐色の蛇が何十匹となく住んでゐて、毎日一匹宛て二三個の鶏卵を貰つてのろろ遊んでゐる。それが寺の大燭臺の上やお賓頭盧の腹や懸額の蔭や賽銭箱の廻りなどにとぐろを巻いて晝寝し、たまに頭や尻尾を少し動かす。その状南洋土人の常習たる怠惰癖・居睡り癖と全く同様の感じで、世の中にこんなくだらぬ見世物もあるかと驚いた。——たまにはつまらぬ方に驚くのも藥にならうか。

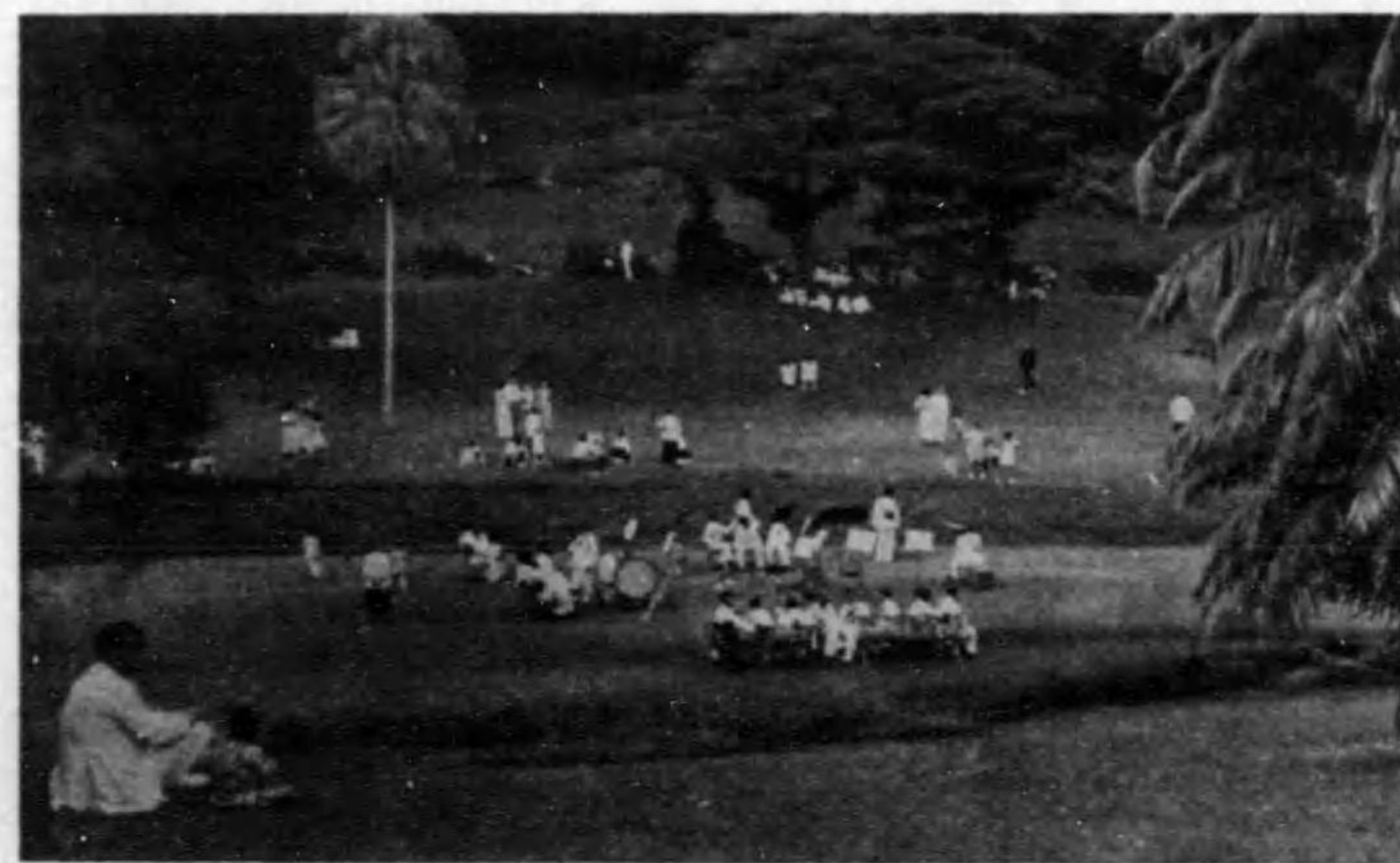
蛇寺から三哩許り離れた支那佛寺の極樂寺へ行く。埠頭・蛇寺・極樂寺と、この三つは三角形の三頂點をなすやうな位置になつてゐる。

途中椰子の林や陸稲畑を見ながら極樂寺に着く。丘陵の間に挟まれなかなか形勝の地を占めてゐる。北京萬壽山のそれのやうな十數階の高塔、赤青黄緑紫の極彩色に塗られた數棟

の堂宇、

男女別に
左右一棟
づつある
禮拜堂、
そして愈
々本堂に
至れば、
本尊は阿
彌陀様で
はなく支
那や滿洲
のと同じ
き布袋然
たるぶく
ぶく肥り
の佛様、
これでは

園物植の南彼



一向ありがた味が出ない。

この寺は馬來半島から惡どい搾取をやる華僑が、十數年前罪ほろぼしのために建直したものだといふ話だが、その華僑は即ちかの胡文虎・胡文豹の兄弟ではなからうか。といふのは、この寺の頗る立派な總門は胡氏兄弟の寄附に係るものであるからだ。そしてその門柱には左右に「極天上下無如佛」「樂園莊嚴總是禪」なんかんといふ「虎」や「豹」のどこからこんな音が出たかと思はれるやうな聯がかかつてゐた。

この和尙は臺灣人で、今東洋佛教大會か何かがあつて大阪へ行つてゐる由だ。

休憩室で熱き支那綠茶を飲む。船中で毎日甘たるい珈琲・紅茶(日本茶もあるが薄すぎて香りなし)ばかり飲んでゐたので、この綠茶は實に美味であつた。附近の賣店で、繪葉書やガラス玉まがひの寶石を負かしたりはめられたりしながら少し買ふ。

更に四五哩奥の彼南島の最高峰ピナン・ヒルへ向ふ。山高二千三百呎で比較的險阻、全山花崗石質で恰も瀬戸内海の小豆島か屋島半島のやうな工合、しかし純熱帶植物の繁茂して

あるところは大いに違ふ。山麓にケーブル・カーの發着驛あり、最初の一線は千二百呎上り、更に乗換へて別方角へ千百呎上つて頂上に達す。二線往復一等二弗・二等一弗である。

香港ヴィクトリア山のケーブルが東洋最古のものだといつてゐたが、このケーブルは香港のを造つた技師の親爺が設計したのだといふ。あれよりは今一段古いのかもしれない。親子でケーブルの架け較べなどといふのは面白いではないか。しかし、かういふものの「最古」自慢は一面あんまり感心したものでなく、日本各地のケーブル・カーに比して車室その他の設備は大いに劣つてゐる。

ケーブルの途中、二三十疊敷もあらうかと思はれる巨大な天然花崗石が無數にごろごろしてゐるのが見られた。日本なら直ぐにもころがし落ちて燈籠にでもなんにでもこなしてしまふだらうが、この邊の人間にはそんな智慧はあるまい。

二十分ばかりで頂上驛に着いた。本當の頂上は尙一哩先きの二三百呎の高みだといふが、そこまでは行かぬ。このあたり一體小傾斜を帯びた高原地帯で溫度も下界より十度低く、今夕は八十度位なもの、しかも樹木頗る繁茂して、建築美に



シャルンホルスト號甲板上の著者

富んだホテルや別荘多し。別荘は英人や蘭人のもので支那人は十五萬人中僅か三人の昔からここに住んでゐた者の外は斷然排斥されてゐる。

特に、
 テル一軒あり。その附近には野球・クリケット・ゴルフ・庭球等の設備整つた運動競技場見え、傍らに巡査屯所や郵便局や賣店など並ぶ。山頂高原のドライブ・ウェイもここより走つてゐる。
 遠景は馬來半島の廣大な陸地、——馬來半島なんかといつても、そちらにゐては無闇に細長い出張りだ位にしか感じないかもしれないが、どうしてどうして、彼南島對岸邊の半島の厚味は二百哩以上あり日本本土のそれに十分比敵する。黒きは椰子の密林で、青きは陸稻・麻・茶・煙草等の畑と水田、馬來海岸線を走る汽車が嘘のやうに小さく見える。バンコックへは六七百哩、ラングーンへは千哩もあらうか、實に纒渺たるものだ。
 眼下には彼南の港、これは恰も屋島のケーブルを登つて高松市や雄島・雌島を眺めるのと同じ氣持だ。蛇寺は山の蔭だが、極樂寺は間近にあからさまに見える。これは屋島から金比羅を望むに似てゐる。
 ビナンヒル・レストランは七八十人樂に入れる建物、屋外の芝生は椰子で日光を遮り、數百人憩ひ得る椅子・テーブル

の設備がある。すべての調子が、彼南の人々及び對岸小市街の農園經營者達が大量中の一二ヶ月間を快適に過し得る避暑地として發達したものであることが肯かれるが、殊に英國の方策としては英人居留民を永く馬來の地に引留め、これを墳墓の地として事業に出精させようがため、また新嘉坡の總督や馬來州知事の完全な避暑地たらしむべく、特にこのビナン・ヒル上の經營に骨を折つてゐるのである。
 歸路もケーブル・カーにより、絶景を惜みつつ下山、山麓から再び自動車に分乗、彼南郊外の別荘地域・高級住宅地を巡り、次に植物園を見る。

この植物園はその規模新嘉坡植物園には遠く及ばぬが、天然溪谷を利用した地勢は名古屋の東山植物園に趣の通つたところあり、天然樹の外に數多の珍樹や特殊の大樹を植込み、猿その他の南洋小動物や色美しき小禽類を放ち飼ひにしてゐる。新嘉坡でもここでも入場料といふものをとらぬのは結構なことである。
 彼南市中に支那人の數いかにも多く、今更ながら驚くの外はない。國亡びて山河ありとはいふが、山河はあつても政治

「第七信」シャルンホルスト號
 船室にて認む

ペラワン港とメタン市

七月五日。昨夜彼南を發し西南方に向つてマラツカ海峽を横切つた我等の船は、今朝六時蘭領印度スマトラ島の北岸ベラワン港に着いた。打見るにさ程の良港とも思へぬが、とに角一つの川の河口に位してゐるし、メダンの外港としてはここより外に適當の地がないのであらう。埠頭・棧橋・倉庫・荷揚場等の貧弱さ、上海以來の大港津を見慣れた我等には著しく目立つ。日本の歐洲航路は彼南よりラングーンを経てカルクッタ又はコロンボへ直航するのが普通で當港へ寄る船は極めて稀であり、外國船と雖も和蘭メールを除けば大抵は素通りするらしい。

ベラワンはスマトラ島の首都メダンの外港といふのみで、それ自體としては別に見るべきものはない。

メダン駐在の米垣領事及び佐藤書記生・大阪宮崎商會自轉車部代理店主駒井氏・大阪三鼎商會特派員某氏等船まで迎へに來られ、メダン見物の打合せをなす。一時間許り早く朝食、八時勢揃ひ、三十五人乗りバスでメダンに向ふ。

メダンはベラワンから凡そ十五哩、椰子・油椰子・芭蕉等の林や畑の中を貫いて英領のそれと同じく完全なアスファル

ト道路あり、これを突走ること三十五分、メダン日本領事館に着き、それより市中見物と買物をなし、更にバスにて郊外の煙草畑を見に行く。

メダンの周圍は盡く土地肥沃、殊に煙草の耕作に適し、夙に和蘭本國の大會社が數多の煙草會社を經營したが、いづれも當初より大なる利益を收め、四五十年前の一寒村は化して忽ち人口七萬の都會となつた。(馬來土人三萬五千・支那人三萬、邦人の三百五十人を加へた文化人四五千。)

煙草畑は五月までに刈取りを終るので、今や一丈に餘る煙草の幹が數百本宛束ねられて數十町歩の間にはら撒かれてゐるが、これは燃料になるのである。

この地の土質・氣候全く煙草の栽培に適してゐるが、しかも最上質の煙草の收穫を擧げるがためには實に八年間に一回のみ土地を使ひ、あとの七年间は雜草の生えるに委せて地味を養ふのだといふ。これによつて見ても、いかに地面廣潤にして人間の數少く、土人があくせく働かぬかが解るであらう。その代りここで採れる煙草は葉卷の外皮を包む極上品質のものとなるのだといふ。

メダン日本人會後援の日本人小學校を參觀す。先生は校長夫妻と訓導一人、皆東京豊島師範の出身だといふ。生徒は四十人、なかなか品格よろしい。

土人酋長の家や婆羅門教・回教の寺院を見る。和蘭の政策といふものは、(一)土人を恫巧にさせぬこと、(二)土人に金を貯めさせぬことの二原則から出てゐるのであるから、馬來土人のためには小學以上の學校教育は決して施さぬ。それから、金はなるべくお寺やお堂や酋長へ獻納させる。酋長そのものも精々おだてて邸宅などを立派にさせ贅澤をすすめて實力を殺いでしまふ。馬鹿で貧乏で熱帯獨特の精神弛緩なら、政治はやり易いにきまつてゐる。土地なども出来るだけ和蘭政府又は蘭人が譲り受ける方針をとつてゐる。總じてこの邊の呼吸、さすがは永年植民政策に骨を折つた和蘭だけのことはある。

動物園を観る。二十貫の猩猩・二丈の大蛇・大ライオン・大虎・大蜥蜴等々。

日本人墓地を観る。すべて純日本式の墓で、九州人殊に長崎人のが多い。

メダン市設市場を観る。これは誠に歴大なもので、長さ百間・幅五十間即ち五千坪の新造建物が四棟も並び、飲食物を主として盛んに賣買してゐる。マニラの市場より格段大きい。恐らく東洋有數のものであらう。

市の中樞街で邦人商店の近江屋・江幡等へ立寄り、繪葉書などを買ふ。鱈皮・蜥蜴皮製品の並んでゐること、新嘉坡に同じ。しかし値段はこの方が高いやうだ。

附近の芝生で檳榔樹と毘盧樹を見る。兩者語音は似てゐるが、物は全く異り、毘盧樹といふのは、樹幹の下部一丈許り茶褐色、その上一丈許りは青く、椰子に似て更に綺麗な樹姿である。

墓地の條でもいつたが、邦人は九州人多く、殊に長崎人の多いのは例の天草の女丈夫(？)連が開拓の先導となつてやつて來た關係からかと思ふ。

メダン郊外及び市中を巡ること四時間、邦人所有のゴム園は餘り遠き故見物を見合せ、最後に當市第一のレストラン蘭人經營のテミューレンといふ店にて、三四品のスマトラ料理と名物ライスカレーを食ふ。米垣領事以下前記の諸氏の外に

三井物産メダン支店長兼メダン日本人會々長たる宮本氏も來會。何分朝飯がいつもより一時間早くこの會食が午後二時といふのだから腹の減り様一通りでなく、スマトラ料理はいふに及ばずライスカレーまで二皿三皿のお代り、一行中の親掛りの香氣青年達は、この暑いのにペラワンから態々やつて來たのもこのライスカレー食ひたさのためだつたなどと白狀する。かくて一同満腹、終りに當地特有の生果を食ひ果汁を飲み、四時發歸路につく。

途中馬來土人が日本種の蜜柑を賣るを見附け、駒井・佐藤兩氏の通譯で二籠を買ひ、バス車中皆々大いに試む。黄青の混つた色合といひ葉附きの工合といひ、丁度十月末に熱海・小田原あたりで食ふのと寸分違はず、蘭貨一ギルダ即ち邦貨二圓に六十個位、一個三錢五厘、値段まで日本の初物に同じ。但し、土人二人の一人は籠の底に薬屑を入れ一人は風呂敷を入れ、一籠八九十個もあるらしく装つてゐたが、實際は六十個にも足りなかつたのは滑稽である。彼等にも莫迦にならぬ狡猾さがある。

五時前歸船、見送りの米垣氏・宮本氏・佐藤氏・駒井氏等

と甲板の上で惜しき別れを告げ、五時半出航す。

この日の溫度室内九十度、丁度日本の土用中位で割合凌ぎよかつた。當地方は五六兩月が最も暑く、今はそれより平均五度低いとのことだ。

メダン附近の有望性

レストラン・テミューレンで會食中米垣・宮本兩氏から聞いた話を左に記しておく。

(一)メダンを中心とするこの地方はなほ邦人の發展すべき餘地十分にある。商業に農業に特殊の工業に、大いに進出せられたい。(郊外ドライブ中、俺自らもこの地の有望性を考へさせられた。)

(二)關稅は割合に低く二三割中心であるが、日蘭會商によつて定められた輸入統制の割當あり、輸出貿易を急激に増加させることは不可能で何等かの機會を待つより致方ない。結局、スマトラの産物、即ちゴム・椰子油・麻等の原料又は將來更に發見の可能性ある鐵・銅・錫及び石油等を買入れ、その代償として織物・雜貨等を賣込むより途はない。

(三)メダン市内外の道路完備して宛然大公園内に行くが如き感のあるのは、要するに土地の生産力豊かで高級住民の富有なることを物語つてゐる。

参考のために勞働賃銀をいへば次の如くである。(一ギルダは二圓見當)

馬來人勞働者——一日三分の一ギルダ乃至半ギルダ
支那人の番頭・官廳雇員——月給三十ギルダより四五
十ギルダ

和蘭人の官吏・商館員——最低百五十ギルダ、最高四
五百ギルダ、郵便局長七八百ギルダ

右によつて土人對文化人の貧富の懸絶を見ることが出來よう。和蘭人經營の煙草會社などは一時五割より十割の配當があつたといふ。

家賃は市營小住宅で月十五ギルダ、家族四五人で住ふ一寸した家は四五十ギルダ、家賃に限らず物價すべて東京の三倍と思へばよい。世界中一番物價の高いのは南米ブエノスアイレスだといふことになつてゐるが、新嘉坡中心の馬來・スマトラ地方も相當の高物價區域である。

(四)この地方はマニラなどに較べて一層地味が肥えてゐる。同じ馬來種でもこの人間は比律賓のやうに拘摸や盜賊を働く奴が少い。

何等かの機會に和蘭と交渉して、所謂満足國・不満足國のかね合せを遂げたい。今はその準備時代として、大いに日本人を送り、未開の土地を借りて農園を切拓くことが何より急務である。

スマトラ事情

序を以てスマトラ島について書いておかう。

スマトラ島はマラツカ海峡を隔てて馬來半島に相對し西北から東南に跨る世界有數の大島、即ち日本本州に四國を合せた位の面積はあるかと思ふ。夙にジャバ・ボルネオ・セレベスと共に蘭領となり、巧妙且つ苛烈な植民政策にかけては世界第一の稱ある和蘭によつて酋長始め一般馬來人の搾取されること三百年間、和蘭の國富も和蘭人の私財も蘭領印度支那群島に負ふところ幾許なるかを知らず、現在なほ搾取は繼續されてゐる。

スマトラ島の人口は九百萬、大部分は馬來種、面積に比して人口は稀少である。地勢は中央は四五千呎の分水嶺あり、これによつて東北部と西南部に分たれてゐるが、前者即ち馬來半島に相對する部分の方が、後者よりも地質よく、生産力多く、文化も進んでゐる。

産物は、ゴム・煙草・茶を以てスマトラ三大生産品といひ、外に椰子油・椰子製品・麻・木材(チーク・ラワン)・果實等を出す。農業の収入多く、又必需原料品の輸出が順調であるために生活が豊かで物價が高いのである。

和蘭政廳はジャバ島のバタビヤにあり、スマトラ島はその總督の支配下に屬してゐる。文化の程度は斷然ジャバが第一、遙か下つてスマトラ・セレベス・ボルネオ・ニューギニヤの順序である。

船内雜記

七月六日。昨夜小腹痛あり、少しく下痢したのは馬來蜜柑の食ひ過ぎのためか。携帯のピオフィエルミンを飲んで忽ち全快す。

昨夜時計一時間遅らせた。(出發以來これで二時間半遅らせたことになる。)時差のあるせむか今朝は五時半に起きてなほ暗い。こつそり起き出し、讀書兼物書室で、二時間ばかりこの原稿を書く。

午後天候險惡となり、波濤荒れ大雨疎る。午後六時氣温八十度以下に下り、ノーカラー・ワイシャツ一枚では少し寒い位である。蓋し南海航路初めての涼しさだ。

大阪の井上氏と碁を打つ。二勝三敗。神戸以來二十番の中九勝十一敗といふことになつてゐる。尤も先方は二目置いて俺が白ではあるが。吳の多川氏は俺より三目強く、相手がないで困つてゐる。

今日は時間の餘裕があり、腕が鳴つて仕方がないから船内の模様見たままを書くとするか。

俺の二十九日間の住ひは、最下部から四階目、船先に向つて右手の七十九號といふ二人部屋。風呂・便所・洗面所まで入れて十三四疊位、寢室兼仕事室は八九疊、兩端に一人宛のベッド、俺は窓際の方で西山氏が奥の方。窓は徑一尺三四寸、風は入るが夕日が暑いので一利一害。洋服入れ・雜品入れに

は獨逸式の棚があつて誠に工合よろしい。風呂・洗面所にはタオル・石鹼の備付あり、眞水・海水共に冷熱の二種、これは使ひ放題。化粧道具も使用自由。ベッドの彈力は申分なく、蒲團も枕もパンヤ入り、但し枕のぐにやぐにやは感心せず、東京で携帯を見合せた枕が戀しい。海面の清淨な空氣を徑三四寸のチューブで上下左右に絶えず室内に吹込む、これがなくては一時もゐられぬ、換氣ばかりでなく温度も五七度下げる。卓子も椅子もガツチリ重々しい獨逸式、皆純白のカバーかけられ、カバーは隔日に洗濯される。床の絨氈も相當のもの。萬事秩父丸の一等室などよりは清爽の氣分に於て勝れてゐる。電氣は盡くスキツチ、照明申分なし。テーブルには日本の盆栽、時々花も来る。湯は朝五時から夜十一時まで、毎日海水温浴が出来るから腹も減るわけだ。

甲板の最上部には十餘種類の運動器具備はり、外にデツキゴルフ・デツキテニス・デツキクリツケツトなど。毎朝六時半から三十分獨逸人の體操教師が丁抹體操を教へる。その他十五坪の水泳プール・ピンポン・角力・レスリング・拳闘等の設備。少し品澤山すぎるやうな感あり。

次の甲板は一等の船室、廊下は廣きは五間狭きも三四間、運動にも使ふが、アラビヤ海や紅海を渡る時はここで寢るのだといふ。安樂椅子の借賃は十マーク、借手の名前が書いてある、俺は寢冷えを恐れてまだこの椅子では眠つてみない。

次ぎが船の軸と艦のある甲板、ここにサロン、碁・將棋・カルタ・音楽・映畫等の娛樂餘興室、音楽は晝晚餐の後に一時間演奏、映畫は五日間に一回、おやつはサロンで出る、お茶に菓子無料、お代りも勝手、中央が酒場・休憩室・讀書通信室、これだけで一室をなしサロン同様器具調度頗る贅澤、シヤルンホルスト・ヒンデンブルグ・ヒットラーの大油繪と南洋風俗を畫いた滑稽な繪掲げあり、續いて一等船客の大食堂、百五十人から二百人位入れる、三人から六七人が一組となり四五十の卓子に就くわけだ。サロン以下の三つの大きな部屋はそれぞれ十二三間四方即ち百四五十坪位、その周圍は廣い廊下でやはり安樂椅子が並んでゐる。

最上部から四番目の甲板には一等船客の部屋が向ひ合ひに五側あり、上の段の船室と合せば合計百三四十位になるらしい。



シヤールンホルスト號

その次の甲板は二等船室・サロン・運動場、その次は三等、しかしこの船は大體が高級船なので三等は少いらしい。そのうちに事務長から船内全部の案内をして貰ふ筈だ。俺はなぜこんなことをくどくど書くのかといふと、出發の前にも宣言した通り、郷土の青壯年者に外國見物を奨めたいといふのが俺が今度飛び出して來た一つの目的であり、六十

三の親爺さへあの通りだ、我輩も一つ出掛けてやらう！」といふ元氣な人間の現れることを切に望んでゐる次第であるのだから、さういふ人々に何かの参考にもなり、多少遊意の刺戟にもなれかしと思つて努めて詳しく書いてゐるのだ。だから俺の話相手は旅行通の専門家ではない。何にも知らぬ人をも忽ち船内生活に慣れさせようと思つて一所懸命にペンを走らせてゐるわけだ。以下をもさういふつもりで読んで貰ひたい。

食堂は朝八時、晝零時半、夜七時から開かれ各一時間半にして閉鎖される。酒はなるべく酒場でやるのが原則だが頼めば食堂へも持つて來てくれる。三食の外に朝七時に最上部運動場の喫茶室で茶菓、十一時にはサロンの談話室でスーヴ、午後一時茶、四時茶菓、八時茶、十一時茶・果物・牛乳、一日六回のサーヴィス、されば神戸から持込んだお茶・果物・罐詰など皆不要、これは俺ばかりでなく大抵の人が失敗、俺の持込食料は日本酒だけ残してあと全部新嘉坡高忠商店へ贈つて來た。

食事のことは前にも書いたが、肉・魚・サラダ等各五種

類位の中から選ばせる。オーダーヴル・スーヴ・コーヒー・アイスクリーム等も數種類の中から好みのものを注文出來る。それらは立派なメニューにづらりと書き立ててある。それで、朝は五品、晝と夜は八九品から十品位腹へつめることになる。元來洋食嫌ひの俺もすつかり洋食黨に早變りして、米・味噌・澤庵扱ては蕎麥・天麩羅・鰻などを思ひ出しても格別魅力なく、刺身さへ食ひたいとは思はぬ。酒はミュンヘン・ビール實にうまく、携帯の月桂冠は十四日目の今日やつと一升空いただけ。残りの一升は今晚催される「日本の夕べ」の會で獨逸人に振舞はうと思つてゐる。喫煙量も平常の半分、一日二三十本である。

食堂の無缺席者は、俺を筆頭として三四人になつてしまつた。青年寢坊黨は朝食に合はぬことあり、船に弱い人もある。しかし幸ひなことに、下痢と風邪と齒痛の外には病人一人もゐない。

船内のことは今日はこれ位にしておく。海益と荒れ狂ひ、溫度遂に七十八度に下る。神戸出帆の際と同溫度である。今朝六時スマトラ島の西北端の岬角を見た

が、これからいよいよ印度洋にさしかかるのだ。印度洋に入つて却て溫度下るとは變だが、これは例のモンスーン（貿易風）の吹く加減であらう。コロンボへは八日の到着く筈。

ソロバンばなし

今日もかなり書いたが、肉食の效目かどうもエネルギーがあり餘るので、いまま少し續けていかう。今度は俺の得意のソロバン話とするか。

前記のやうな海上極樂淨土の生活をしてだけだけ費用がかかるかといふと、航海三十日間一等旅費（食費共）百四磅、邦貨の千八百圓未滿、風呂代を入れて千八百五十圓、食事は日本の最上料理よりもいいから、これが一食五六圓としても一日一磅、三十日間で三十磅、これを引き去れば純船賃は七十何磅即ち千二百圓許り、神戸・ゼノア間の距離はどの位あるか計算してみないが假に一萬哩としてこれを汽車で行くとすればどうなるか。汽車一等一哩十錢餘とすれば、一哩は哩より長いから——丁度千二百圓位になる。船は汽車に較べて決して高いものではない。ゼノアから先きのホテルも一

泊二磅、晝は半磅位であらうからこれも一日四十五圓、三十日間で千三百五十圓。船の方がどうせ待遇が上だから、ホテルに較べても船は値打があるやうだ。

ビールは一杯五分の一マーク即ち二十一錢、洗濯賃はカラ一十七錢、ワイシャツ四十五錢、シャツ三十五錢、洋服丸洗ひ九十錢、靴磨きは無料。食堂の隣りに寫眞機・映畫撮影器を始め獨逸製品ばかりを賣る店あり、その値段を見るに割合に安い。

ソロバン話をやつてる中に思ひ出したことがあるから、事は前後するが、ここへ書いておく。

メダンで駒井氏から聞いた話。——スマトラでもジャバでも道路がいいので、自轉車の需要はすばらしいものだ。毎年日本から百七八十萬圓位輸入する。それだけに競争も劇しく、二割五分以上の關稅とかなりの運賃をかけて一臺の小賣値が裾物二三十ギルダ（一ギルダは約二圓）から上物でも四五十ギルダ位にしか賣れぬ。ところが、大阪邊の商人はスマトラへやつて来て無茶な投資をする。値が無理だから品を落す、品を落すから信用に傷がつく。國家的に見てもこれが

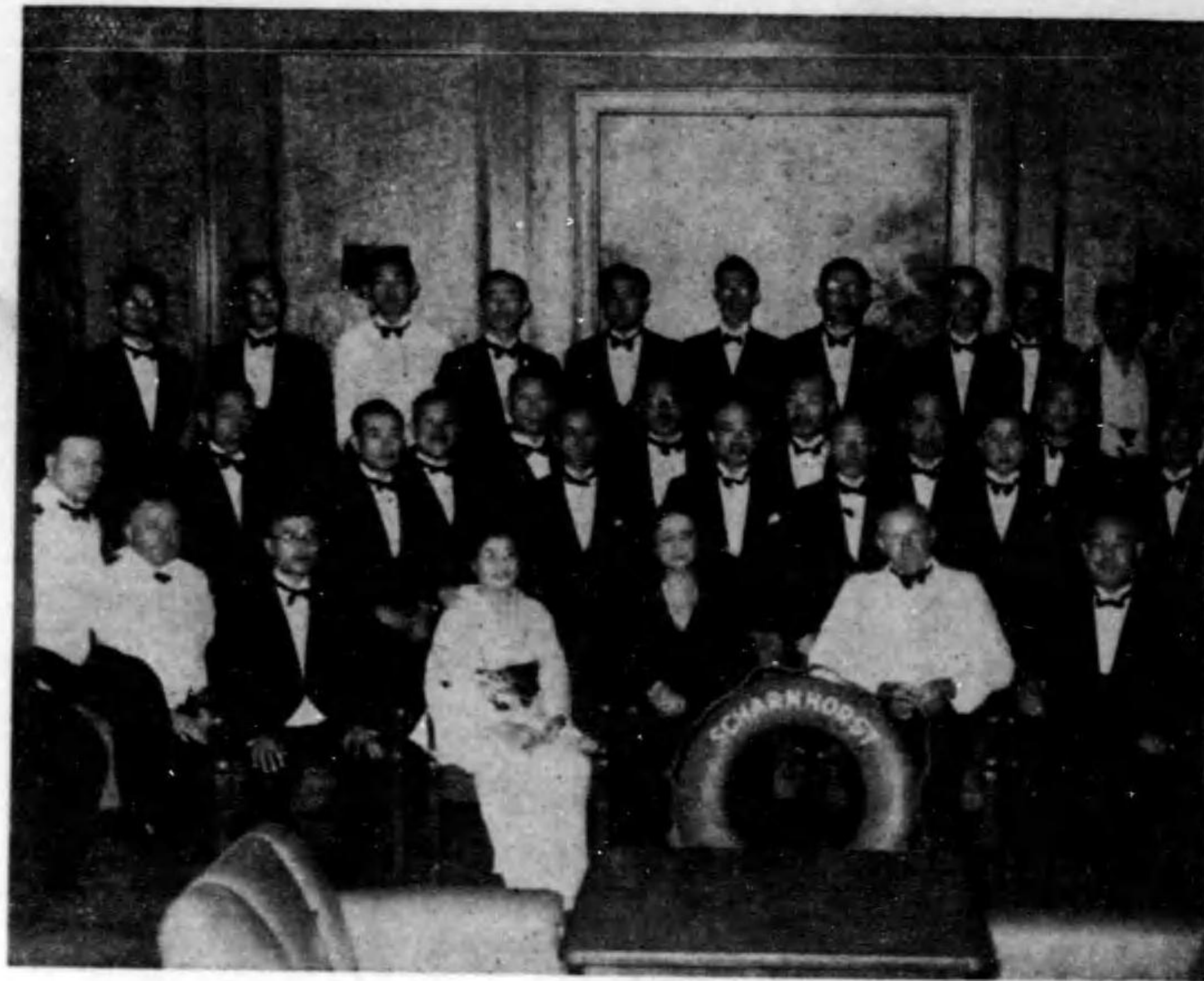
一番よろしくない。云々。

ジャパン・ナイト

七月七日。昨夜九時から社交室でジャパン・ナイトが催された。そのあらましを記しておく。

一等船客百五十名は、シャンデリヤ眼も眩く輝き、岐阜提灯と五色のテープに裝飾された會場に盛装して集り、定刻一同座席につけば本船附バンドは日本民謡を奏し始む。木下支配人英語で挨拶を述べ、これを獨逸人バンツホッフ氏獨逸語に翻譯し、次に冷凍日本酒を以て祝杯を舉げた。この酒は我々の寄集めを寄附したもの。外に日本から携へ來つた洋文バンドが東京音頭を吹奏し始めるや、青年組は手拍子勇しく世界人歡呼の中に踊りめぐること三周、二周目からは飛入りの外人もあつて大盛況、それからフォックス・ストロツト・ワルの社交ダンス二替りあり、又野上氏は種明し附手品で喝采を博し、最後にシャンパンの杯を舉げて閉會にした。

この夜風雨強く船體大動搖、しかし一同の男女國境を超越



(者著目人三りよ左てつ向列中) 影撮念記トイナ・ンバヤジ

して歡樂を共にし、殊に日獨親善のための效果百パーセント、船長スタイン氏も大滿悅の態で、悉く上出來の意を挨拶した。

昨夜の疲れで今朝は珍しく寢坊、而して、今日は故國の七夕祭に當ることを思ひ出す。

試みに溫度表を検するに左の如くである。

- 神 戸 八十度(海水七十二度)
- 上 海 八十三度(海水七十五度)
- マニラ 八十七度(海水八十五度)
- 新嘉坡 同上

昨六日は風雨のため特に涼しく八十度(海水七十八度)、今日は晴、今この稿を終らんとする午後六時、八十三度(海水八十一度)だ。

普通空中よりも海水の方低いが、マニラでは海水の方一度高いこともあつた。

船の所在は北緯六度、真正面に六度の線を西へ向つて進んで行く。

「第八信」スエズにて投函す

セイロン島及びコロンボ事情

七月八日。スマトラ島の西北端から北緯六度の線を真正面に西へ西へと進んだ我等の船は、この日朝八時コロンボ港防波堤内に入った。コロンボ着港が約二時間遅れたのは、所謂モンsoonのためで、即ちこの貿易風は、夏は西南から東北に向つて吹き冬は全く逆の方向に變るのであるが、今日はその向ひ風が餘程強かつたのだ。

朝食を済ませて後、ランチで出迎へてくれたコロンボ領事館金子書記生とサロンで三十分許り會談、セイロン島及びコロンボの概況を聞いた。これより先き、ベラワン碇泊中、コロンボの久我領事から無電あり、丁度日本の練習艦警手・出雲の二艦がその地に投錨、自らは艦長・將校連を佛齒寺へ案内——これ所謂キャンデー巡り——の約束ある故、金子書記生を代理に派遣するといつて來てあつたのだ。金子氏は若くて温厚な紳士、而してその談話を要約すれば、次の如くで

ある。
セイロン島は印度南端の東南方、北緯六度の位置にあり、面積は北海道の五分の四位の小島であるが、東西南三洋航路の樞軸に當り、殊に氣候・地味農産に適するため割合によく拓け、今や全島の人口五百五十萬人、最近の貿易高四億留比(邦貨約五億圓)を突破するの勢ひを示してゐる。輸出の主なるものは、セイロン茶(紅茶)・椰子油・麻・ゴム等、輸入は綿布・人絹・雜貨・米・石油・小麦等で、日本よりの輸入は近時割當制限を加へられて伸力が鈍いが、ボンベイ方面の對日棉花の輸出増加するに連れて輸入割當量も増加する。しかしその増加比率に就ては毎年厄介な問題が發生してゐる。全印度の貿易高は、英國を始めとしてその額頗る多いが、その中、對日本の輸出入高は左の如し。

日本よりの輸入
昭和十年 一一八、〇〇萬圓
同 十一年 一一六、〇〇萬圓
日本への輸出
昭和十年 三〇六、〇〇萬圓

同 十一年 三七三、〇〇萬圓
即ち昭和十年に於ては一億八千八百萬圓、同十一年に於ては二億五千七百萬圓の對日輸出超過となるわけである。次にセイロン島のみに限つた對日輸出入高は左の如し。

日本よりの輸入
昭和十年 一一、〇〇萬圓
同 十一年 一三、〇〇萬圓
日本への輸出
昭和十年 二、八〇萬圓
同 十一年 二、七〇萬圓

即ち昭和十年に於ては九百二十萬圓、同十一年に於ては千三十萬圓の對日輸入超過で、全印度貿易の場合と逆の關係にある。いふまでもなく全印度はボンベイを出る棉花大量のため日本の方が印度の大切の得意先であり、セイロンには日本向け農産品なき故に反對にセイロンの方が日本のお客となるわけだ。(日本内地には緑茶あり、臺灣にはウーロン茶ありで、セイロン茶の輸出が殆ど無力となるのである。)
コロンボはセイロン島の西南に位する全部人工を以て成つ

た良港、激浪の奔騰に備へるその防波堤は有名である。全市の人口三十五萬、内英人九千、この九千人が人口五百五十萬のセイロン全島を支配する。他の歐米人千人、邦人五十七人(この中に二人の齒醫者と二軒の商店あり)、支那人三百人。——この支那人の数が、これまで見て來た馬來半島や蘭領印度の各港市殊にコロンボから僅か二三日程のスマトラ島の都會にも全人口の三分の一から多くは七八割まで居住してゐるのに、このセイロン島に來て俄然極端に減少するのはどういふ理由によるのであらうか。さすがの華僑の勢力も彼南・ラングーンが打止め、その以西には及ばぬのか、印度やセイロン島は人口稠密で支那人の入込む餘地がないのか、いづれかであらう。

セイロン島の政治機構は、印度とは異なる英國王領即ち英國植民省の直轄地で、最高爲政立法者はセイロン總督である。普選によつて一院制の議會あり、議員数は五十名、その中から内閣々員が選出されるが、大藏・軍務・司法及び總理の四大臣は英國の官吏がこれに當つて斷然押へてゐるのであるから、セイロン人は理論的には行政權も立法權も認められてゐ

るやうなもの、事實上は英人に急所々々を握られて、手も足も出ないのだ。

セイロン島の時計は東京より四時間遅れ、倫敦より四時間進んでゐる。経度でいへば兩都間の中央にセイロン島があるわけだ。

氣候は五六兩月が最も暑い、海濱は風多くて凌ぎ易く、朝夕は大暑中と雖も大いに冷味を感じる。一年中の平均温度は八十二三度といふところである。

人種は人口五百五十萬中シンハリメ族三百萬人、メシール族百二十萬人、あとはマレー種や白人との混血種である。

貨幣は留比貨、一留比は邦貨の一圓三十錢に當る。

セイロン島の日本より買入れる商品の八九割までは、阪神地方近來の輸出統制にも拘らず、あらゆる手段方法を講じ安賣・投資をも厭はず、これには英國商人も舌を捲いて驚いてゐるといふ。日本商品の輸入品目は人絹布・綿布・雜貨・ゴム製品・セルロイド製品・樟腦・薄荷・セメントその他頗る多岐に亘り、現にビールなども値段引合ふため多額の約定あり、どしどし輸入されてゐるので、セイロン政廳の高壓的禁

止若くは極端なる制限がなければよいがと案じられてゐる。

コロンボ見物

金子書記生及びコロンボ有名の寶石商でかねて日本人旅客に馴染深いA・K・ハシムムの支配人と店員一名等に迎へられ、ランチで上陸、先づ税關前の廣場から埠頭の大觀を縦にし、ハシムム寶石店へ郵便物の投函を托し、それより自動車六臺に分乗して市中見物。繁華街・土人街、印度寺院二三、その中の一つは愛國の志士大ガンヂーがセイロン議會開會中に土人議員を鞭撻するため屢々來泊するところといふ。それから競馬場・大學、次で一面に青芝生の公園に入ればここは宛然郊外のやうな閑靜さ、白堊の大殿堂はコロンボ市廳舎、博物館にはマンモスや大鯨の骨、六尺四方もあつて眞中の隆起した龜の甲羅、古代印度の壁畫・美術品、キャンデー王の寶冠や寶石、金銀を鏤めた椅子など珍品いろいろ、園内には鳳凰樹・椰子樹・菩提樹、バンヤンの木は數百條の根のやうなものを上から下へ垂れ、何とかいふ寄生蟲が何とかいふ植物の葉にしつかと己れを結びつけ、生長も變色も枯死も全然植



コロンボのクエーン通り

物の葉そのものと運命を共にするのも見え、また印度風の竹が二三本一とかたまりに生えた下蔭には、例の印度人の蛇遣ひが頭の扁平なコブラを巧妙に使ひこなして旅客から投錢をねだつてゐるが、このコブラといふ毒蛇どうも氣味悪し。次が國會議事堂に總督府官邸、廻り廻つて動物園、代る代る象の背に打乗つて寫眞やパター・ベビーを撮り、大學前の通りを南へ走り、マウント・ラヴィニヤの海濱なるグラント・ホテルへ入つて午餐を攝る。ここまで來れば埠頭からは既に七哩である。扱て打見る印度洋の逆捲く大怒濤、日本でいへば紀州の潮ノ岬か四國の室戸岬といったところだが、それらよりも一層雄偉寛濶な氣分、ホテルは小高い巖丘の上に立つ立派な建物、設備も相當なものだが、食事だけは、何しろ船中の贅澤料理に慣れてゐるのでいかにも見劣りがして食慾も進みかね、殊にライスカレーは徒らに名のみ高くして實は米質悪く焚き方も下手で日本人の口には合はぬが、それでも日本食にあこがれ切つてゐる老人連の中にはお代りを請求した者もあつた。居ること一時間許りで引返す。

歸路はヴィクトリア・パークを通り、再び寶石商ハシムム

の店へ戻り、俺も象の置物三箇と眞珠・畫帖・繪葉書等八留比餘の買物をした。練習艦隊二軍艦の水兵さん達千名以上上陸のためハシムの店も大混雑、それに時間も乏しかつたせゐるか、一行中高價な寶石を買つた人は少かつたやうだ。ハシム老人は沖商賣の行商人上りだが今や財數百萬を積み、特に日本の旅客を歓迎する親日家、店員の大部分が日本語を操り、サーヴィス本位・偽物皆無主義をモットーとして業務に精勵、日本人一等船客なら、歸國後送金の約束で何千圓の寶石でも貸賣りして大いに度胸のいいところを見せてゐるとか。夕四時半のランチで歸船、一時間の後出航す。

アラビヤ海西走

これより愈々アラビヤ海に入る。紅海の入口アデンは北緯十三度であるから、北緯八度のコロンボからは幾分北寄りになるが、先づ大體は西へ西へと航走を續けるのである。

コロンボで我等と別れ、同船の勝沼博士等と共に所謂キヤンディー見物百五十哩のドライヴをやつた團員四名より、夕食後その模様を聞いたが、佛齒寺は既に頽廢何等莊嚴の感じ

なく、ただ象に水を浴びさせたり、荷物を運搬させたりする光景が、樹木繁茂の背景と相俟つていかにも印度の田舎の情趣あり、土地は二千呎許りの高原で避暑地としては中分ないが、豫想したやうな名勝古跡ではないといひ合つてゐた。俺は百五十哩のドライヴが萬一身體に障つてはと憂へて行かなかつたが、道路は非常に立派、時速四十哩で突つ走つたといふことだ。

七月九日。早起、日記を書く。曇深く風ありて涼味百パーセントだが、アラビヤ海へ乗り出したせるか波浪高く船體動搖、食堂へ出る人も常より少い。甲板上の氣溫朝八十三四度、晝八十五六度、今日からゼノア到着までの丸十日間中寄港はスエズとポートサイドだけであるから、船内無聊、殊に内外人を問はず二十代・三十代の血氣旺んの連中は餘剩エネルギーの捌け口に困じ、遂に船員の主催で毎日各種の運動競技を催し、その成績を採點、ゼノア上陸の前日これを通算して船内賣店の品物を賞品に出すことに決定、我々も一人一馬克乃至十馬克の資金を出した。

午後益々風募り、波濤荒くなる。讀書と園芸に過す。

この日一の鳥影をも見ず。一商船に出會うたのみ。七月十日。風波強し。氣溫朝八十一度、晝八十三度。船量の人多く、食堂出席者、晝はいつもの三分の二、夜は半分となる。

讀書。出發に際して藤作・秀雄の兩人が船中の慰みにと買つてくれた海外旅行記その他十一冊中、渡邊良助といふ人の「周遊六萬軒」外三冊讀了。その中で一向興味の出なかつたのは堀口大學の「僕の初旅世界一周」といふ本。蓋し愚著といふものがなあらう。

夜に入つて多々益々船體振動、安眠を得られなかつた。

七月十一日。アラビヤ海はいふまでもなく南方明けつ放しの大海、これへ西南方亞弗利加大陸のソマリーランドあたりからモンスーンがどつと吹いて來るのだから、その風はさぞや驚くべき熱風であらうと想像するかもしれぬが、實は今朝など甲板は七十七度といふ出發以來の冷氣、アラビヤ海々上でこんな涼しい目に會はうとは夢想だもしなかつたところだ。しかしいざ紅海となればドデン返し暑さになるのではないかと案じられる。

海南の怒濤(シヤルホルヌトスル號甲板上より寫す)



嘘ふなかれ！ 甲板で少し怪我をした

こんなことを書くのは俺の負惜みや強がりの缺點を證明する材料を提供するやうなもの、少くも家族の者共の笑ひを招くのが落ちなのだが、——人から受けた親切を忘じ難く敢て書き止めておくが、——實は俺は少し怪我をした。それはかうだ。

去る九日即ちコロンボ出航の翌日の午前十時半頃、一行中の今氏（青森縣人だが先祖は越後今町の出身で町名を苗字とす、現に北海道余市に住す）と甲板の上で徒歩競歩をした。今氏は四十三四歳の男盛りだが、俺も負けるのが口惜しさに大馬力をかけたたん、何をいふにも履き慣れぬゴムの運動靴、スツテンコロリンと倒れかかつたのをドッコイショと危く踏張つた利那、左足の躰を引違へ、それがなかなか治らず、これでは十五日のカイロ行十六日のスフィンクス・ピラミツド見物も駄目かと大悲觀、さりとて若造の船醫に診せて二十馬克もふんだくられるも癪の種、そこで俺のカベンの中からアルコールにメンソレータム、西山氏からは齒痛止めのヨ

ジームチンキまがひの藥、菅谷氏の弟さんからは妙布、といつた按配にいろいろ工夫したがさつぱり癒らず、その中食堂通ひの俺の珍妙な歩きつきを見附けたのが佐多博士で、特に數回自室に招き、佛人オーゲン氏の發見に係る筋肉リユーマチスの藥を佐多氏が日本人向きに改良してリユーマテアと名付けて既にその特效試験済みのものを二日間數回に亙つて塗つてくれたが、靈藥の力いやちこで、今日は最早七八分通り恢復、一兩日中にはオーゲンならぬオーケーとなること確實。これならエチプト見物も何のそののである。

佐多博士は薩摩の出身で本年五十一歳、母に仕へて至孝、今春七十歳の母堂を東京に迎へて箱根・熱海邊へ遊んだところ、母堂は齡よりもずつと若く、氏は失禮ながら俺よりも老けて見える位の人なので、どこの宿屋でも夫婦と間違へられたとか。こんな笑話に限らず氏は話題豊富の話上手、しかも頗る腹の出來た落着きのある風格の主である。

怪我のために食欲は不振だつたが、それでも俺は二十一日間六十三回の食堂皆勤者七名中の一人だ。同室の西山老は少しく船暈の氣味で今日も食事をボーイに運ばせてゐるが、室

内では蒸暑くて食ふ氣になれぬといふ。

西山老とはもう二十五日間も同室同居のこととて、室内ではお互ひに素ツ裸、小さからぬ畢丸を丸出しにして語り合ふ眞に赤裸々の附合ひをつづけてゐる。ゼノア上陸以後は、團員中のいろんな人物と組合つて宿をとるようになるが、さまざまな人間の性格に觸れるのもまた楽しみである。

ともあれ今日は今まで中になく大暴れに暴れ、一行中半數以上の者がベッドに呻吟、しかし俺は怪我も経過よく、意氣軒昂だ。

假裝競技に木魚の手柄

七月十二日。早晨四五時頃の一二時間一寸風波靜まつたと思つたらそれは一時的の現象で、アラビヤの南ソマリランド岬角の東に竝列するソコトラ群島の北岸を通過した時西南風の當りが弱められただけの話、六時半から三時間許り前日同様の大動搖、十時になつて靜まつたのは、風が收まつたのではなくて船がアデン灣を稍と深く入つたためである。もうあと三日すれば數千年の文化華かなりし埃及の都入り

が出来るかと思ふと、さすがに胸が躍るのである。

今朝來氣温上昇、午後二時八十九度、これはマニラ碇泊中と同様の暑さである。

夜、食堂に假裝競技會あり、外人も相當の傑作を出したが、我々三十一人中にも訪問着のお嬢さんやインデヤンの酋長や婆羅門の僧侶等の秀逸があつた。投票の結果は果して誰の優勝となつたか、俺は早くも九時半に寢入つてしまつた。

七月十三日。バプエルマンデブ海峽を渡つて愈々南北に細長き紅海に入る。これより先き午前十時頃北方に一島嶼見え、小燈臺或ひは望樓の如きもの立ち、また谷間には十數棟の重油タンクらしきものあつたのは英國權益内のものであらう。しかしこのあたりの土地は一體に不毛の如くに見受けられた。

紅海に入れば、西南部は佛領及び英領ソマリランド（伊領ソマリランドは更に南方）の一部で、エチオピアの首都アヂスアベバはこより約五六百哩、即ち東京・青森間位の距離に當る。

十時より一時間、木下支配人より種々の報告とカイロ見學

の注意とゼノア上陸以後巡歴すべき各地の豫備智識に就て談話あり。

昨夜の假裝競技會の結果を聞くに、一同深更サロンにてビールとカクテルの満を引きながら百三四十票の投票を開いて發表したが、内外人中の最優勝者は勝谷氏の婆羅門教徒で、氏の僧侶然たる姿もさることながら、俺の貸した例の木魚をオーケストラに合せて敲いたのが喝采を博した半分の理由であつたらしい。マリールキズ美容院相原兩氏の苦心の着付けによる岡田・田村兩氏の振袖姿も勝谷氏には一籌を輸したらしい。俺の携帶した木魚もとんだところで手柄を立てたものだ。今日まで四日間禁煙したが、果していつまで續くとか。

紅海を北へ北へ

七月十四日。朝旭光異様に輝く。右方は定かには見えねどアラビヤ西岸寄りの回教の本家本元メツカあたりか、左手は伊領エリトリヤから英領スダン、その亞弗利加沙漠より吹來る熱風のため温度急昇して午前十時既に九十一度となつた。

船中生活及び十一日の怒濤の寫眞の焼増しが出來た。十枚で五克馬、即ち邦貨約七圓(レジスター・マークで拂へば四圓二十五錢)である。

本郷の大工萩原重吉さんの贈物榮太樓の梅干糖は、船へ持込んだものの蓋あける折もないので、若い愛嬌者のボーイに與へたら、翌朝曰く「ジャパニーズケーキは齒にはさまつて困るが、實に甘くありました。」とのこと。

紅海といふ名はどうして起つたかといふと、太陽の直射光線が、深い深い海の濃綠色に映發し時に紫外線の關係で紅色を呈するからだ。紅海の長さは千三百哩、幅は廣いところ二百二十哩、狭いところ百哩、深さは最深二千米、日本の本土なら二つ位どぶんと入つてしまふのである。

この夜甲板の安樂椅子に倚つて西南方遙かエチオピア方面の空にかかる弦月を眺めた。室内は九十度以上だが甲板上は八十四五度で微風甚だ快適、俺に若し文學の素養少しでもあれば、こんな時一句捻るんだがなあと残念に思つた。

船内見物

七月十五日。船長の好意で、希望者若干名船内隈なく見物す。シャルンホルスト號は前にもいつた通り、ヒットラー自慢の新造船、邦貨換算千二百萬圓の巨資を投じ、東洋方面へ獨逸の勢威を張り、貿易の隆盛と海上權とを英佛より回復しようとしてあらゆる科學の粹を集めて建造したものである。

船長は若い機關長に命じて機關室その他の最底部まで案内させ、機關長は一々獨逸語に手眞似を加へて説明してくれた。俺には獨逸語は解せぬがその話の要領は次の如くであつたかと思ふ。

(一)機關はタービン式蒸汽機關で、九千三百キロ即ち一萬四千馬力のもの四個あり。外に發電裝置あり、これは重油を燃料とする。蒸汽機關も電氣機關も豫備の機關を以て萬一に備ふ。

(二)電力は暖房・冷房・冷蔵・煽風機・電燈(全船千五百燈)・エレヴェーター(四ヶ所で七階上下)・湯水の配給・貨物積卸し用クレーン等に用ゐる。

(三)船員二百名の室の明るさ清潔さ中分なし。待遇もかなりいいらしい。

(四)機關室にすら油汚染・塵一つ見えす。ここに働く人さまで多からぬに掃除の行届けること驚くの外なし。

(五)船員の規律嚴格なるはいふまでもなし。各自蔭日向なく責任を重んずるは勿論なれど、更に獨逸魂の發露とも稱すべきは、自分の受持分以上に凡そ船のためなら他の人の受持分にまで心を須めて努力を惜しまぬことなり。

(六)船内火の用心の嚴重さはとても想像の外なり。それでも帆布や絨氈が煙草の吸殻にて穴をあける損害莫大なりといふ。特に日本人船客は無闇に吸殻を投げ捨てる惡癖あり、これは是非やめて貰ひたいと手眞似足眞似で注意され、我々大いに恐縮す。

(七)食堂・酒場・洗濯等の支拂は一切傳票サイン式なるが、これまでのところ三十一人中一人の計算間違ひもなし。何事もすべて確實にて氣持よし。金錢その他の貴重品は保護預けすることを得。一人毎に姓名を記せる金屬製小匣に鍵を附けて貸し、それを大金庫中に納むるなり。なほ、船内には五馬克・半馬克等の小切手式傳票を發行通用せしむ。

(八)乗客・船員・火夫・支那人の下級労働者を加ふれば、

毎航一千を下りしことなし。一町一村の如き大生活なり。しかも、船員以下の數百人は起床より就寢に至るまで毎日一分間の相違もなく任務を遂行するといふ。他の國の船に乗りし經驗のある人の話を聞くに、この船のサーヴィスの丁寧と迅速、殊に間に合せ式小細工の絶對になきことは洵に賞讃に値するといふ。げに然らん。

スエズに近づく

今日は朝のうち尙暑かつたが、船北するに従つて太陽南に下るせみか、午後より冷風吹き始めかなり涼ぎよくなつた。船は北緯二十度のあたりから、スエズに向つてどんどん進んで行く。スエズは三十度で丁度薩南大島邊の位置だからめつきり涼しくなることであらう。二十五度以北となれば、東西兩側にこれまで見えなかつた陸影・島影現はれ来る。上總の鹿野山のやうな山、上州の荒船山のやうな山、いろいろな形の山すべてが丸裸の岩山である。

紅海の熱風も十二・十三の二日を頂上として下り坂となつた。案ずるより産むが易いといふわけである。

「第九信」ゼノアにて投函す

スエズからカイロまで夜中の奮進

七月十五日。故國を想へば、今日あたり富岡店は春蠶の豊收と藪價の高値に購買力頓に上り、前年對比相當の賣上増加を見、老妻や娘共も賣出しの手傳ひに轉手古舞を演じてゐることであらう。高崎店・京都店では豫約販賣裏絹の見分けか、東京店では既に夏物を終へ部署を定めて冬物仕入手順を考究中か、いづれにもせよ一同の諸士自己を没却して吉野藤のために奮闘してくれてゐることであらう。諸士の勞苦を思へば、俺と雖も漫然と遊山氣分にはかりなつてはをられぬ。歸國の後は海外の新知識を一同に鼓吹し、外人商店經營の長所を自店のそれに應用して大いに効果を擧げねばならぬ。

扱て、今日は愈よあこがれの埃及見物だ。會から豫め注意があつてこの見物は少しく時間が無理だから健康に自信ある人に限るとのこと、相原母娘・西山老や毎日俺と食卓を同うする遠藤氏外三四の人々は見合せ、總勢二十四人、岡本理事

を先導として不眠不休の強行軍、果して老若を問はずかなり身に應へた。

いつもより三十分許り早く夕食をすませ、八時半旅装を整へて甲板上に勢揃ひ、スエズ運河入口の模様と稍々南方に傾いた九日の月を眺めつつスエズ到着を待つ。豫定より二時間遅れて九時着船、いざとばかりに埠頭に降り立つ。税關・倉庫・停車場等には英文字の外に例の美術趣味たつぷりな埃及文字の見えるのも面白い。上陸の査證と臘膜自動車の撃退とで少し手間とれ、十時七臺の車に分乗して出發、これより二百哩の沙漠を横斷するのであるが、幸ひ道路は、埃及政府が觀光客吸收の目的で數百萬圓を投じたといふだけあつて幅十五米位の一直線のアスファルト舗道、これを夜間のこととして時速七八十哩といふ思ひ切つた速度で突つ走るのでから、痛快といへば痛快だが、困つたことには沙漠の常として深夜には異常な冷えが襲つて来る。まして夏向オープン車が西南風を眞向から受けて進むこととて、麻服一枚の我々一同忽ち慄え上り、唇は紫と化し、およそ顔色とはなかつた。それに我々の車の運轉手は埃及人にはあらで雜種かニグロか顔附い

かにも凄味あり、これも氣味悪さを加へる一つの原因であつた。(序にいふが、埃及人即ちアラビヤ人種は色も日本人より少し黒い程度、鼻下には美髯を貯へ、我々は昔からの文化的貴紳の間人だ。)といはぬばかりの堂々たる態度を持してゐる。

強風のために四五十圓もするパナマ帽を吹き飛ばされて沙漠の塵と化せしめた人が三人あり、俺と同車の朝鮮の金満家金漢奎氏もその一人、金氏くどくこと／＼!

ところどころにオアシスはあるが、大體は單調無比、西瓜の切身のやうな恰好の、巨大な、そして色のどろツとした一種神秘的な月が行手の地平線に沈まうとしてゐて、これを目標の如くに進んで来たが、それが見えなくなつてからは眞の闇、しかし途中の苦勞が多かつただけに忽然としてカイロの夜景が眼前に現はれた時は全くお伽噺の中の一情景を地で行つたやうな不可思議な美しさを覺えた。最初市の東北端のオアシスを通る。植物は南洋と同様、椰子・マンゴー・芭蕉・鳳凰樹・アカシヤ等の大樹。それから次第に市の中心部へ入つて来ると電飾大いに明るさを増し人通りも多い。多分埃及



(頭先)者著る跨に駝路色白

人は好んで晝寝する。この真夜中も、東
京の夏なら丁
度九時
十時頃
の日は
谷あた
りの夕
涼みの
群集と
いつた

やうな程度に賑かだ。家屋の構造はいづれもゆつたりと出来てゐる。人口の割合に市域は極めてだだつ廣い。
スエズ埠頭から三時間、十六日午前一時にカイロ一流のホテル、メトロポリタンへ着き、直ちに就寝。一室に二人で、俺は金漢奎氏と同室、金氏は未だにバナマ帽のことをいひ出すので、俺は「六十一の厄落し、以後必ず幸運ひらけ、あなたが朝鮮第一の金持になる前徴だ。」と慰めたら、やつと笑顔になつた。

ピラミッド・スフィンクス・カイロ

七月十六日。五時半起床、大急ぎでパンと牛乳の朝食をすませ、待機の自動車七臺に分乗して出發。岡本理事も始めての見物故、ガイドを一人備ふ。市中の重要街・中央停車場・ナイル河の大橋・植物園・カイロ大學等を横手に見、南郊約六七哩と思はれる郊外住宅地へ出づれば、遙か彼方に三角形薄茶褐色の大塊土見ゆ。ああ、あれがピラミッド!と異口同音に叫ぶ。大砂丘を登りかけたところが市内電車と自動車の行き止まりで、それから先きは駱駝九割・驢馬一割の世界、

扱て件の終點なる某大ホテルのレストランの前庭に約二百頭の駱駝と約五十頭の驢馬がそれぞれニグロ又は雜種の人夫と共に客を待つてゐる。我々はその中から自由に一頭を選択して打乗るわけであるが、俺はふと目に入る最も華麗な裝飾をつけた最も美しき白駱駝を選んだ。いはば白馬銀鞍といふべき趣味のものが、乗手は遺憾ながら紅顔の貴公子とはいへぬ。呵々。ところがこれが量らずも滑稽な話の種となつたことは後にいふ。

緩漫なスロープを一步々々辿ること四五十分にして第一のピラミッドに近づく。この方面には大小七十餘のピラミッドあり、内有名なもの三十餘あるが、近年歴史上・文化上の調査と美術品發掘のため崩したものが崩しつつあるものも相當數に達してゐる。我々の見たのは完全なもの二つと稍と不完全なもの二三とあとはスフィンクスである。大ピラミッドの地積は十三エーカー却ち一萬五六千坪、高さは四百餘呎といふ。遠く薄茶褐色に見えたのは人造石の堆積重疊、内部はいふまでもなく王侯の墳墓即ちミイラの藏匿所で、これに要する大箱には金色燦然たるものもあるといふ。

完全な二つのピラミッドを見巡つてから更に進めば少しく降つたところ
に例の
スフィンクス
が鼻の
缺けた
巨顔を
東方に

(者著央中列後)に景背をスクンイフス



向けて聳ゆるを見る。そこでこれを背景にして一同記念撮影をする段取りとなつたが、その時駱駝人夫の親分が彼の赤い土耳其帽を俺に冠せ、俺も面白半分そのまま寫眞に入つたが、曷ぞ知らん、これこそ白色駱駝に乗つた客へ捧げる最大の敬意で、その代り二人の人夫へ四分の一志(二十何錢)づつの酒手はすんでくれといふ。ところが生憎俺のポケットに小銭がなかつたので、一志づつを奮發したところその效能は觀面、俺を全く貴公子扱ひ、シャルンホルスト號船客内外人五六十人ばかりの中の一番偉い人間なるかのやうに祭り上げてしまつた。スフィンクスの謎も金次第である!

まだ朝七時半といふに、沙漠の沙石は太陽の直射を受けて火の如く灼け、到底長居は出来ないで、匆々に元の自動車屯所まで引上げ、再び車上の人となつて、今度はカイロ舊市街の稍々廢頽せる方面にあるマホメット教の大本山へ行く。同様の大寺院市内に三ヶ所あるが、いづれもマホメット一世以來の宗祖達の墳墓であつて、寺内には希臘・伊太利より將來した大理石彫刻や王侯富豪の善美を盡した棺蓋ひなどがある。かういふ寺とも墓ともつかぬ建物は、市内になほ相當多

數あり、中には廢墟になつたのもあるが、十數ヶ所は未だに完全に舊形を止めてゐるといふ。

終ひに立寄つたところは、カイロ北西部の小丘で、この上からは大カイロの全部のピラミッドが一眸の下に見渡された。南方郊外は無邊際沙漠で、埃及の棉花や小麦は一體どこで作られるのか、カイロ市民は抑々何によつて生活を立ててゐるのか、怪しきにはみられぬ程であるが、多分専らナイル河の中上流とスダン地方に存する肥沃な土地を頼りとしてゐるのであらう。しかしこの附近にあつてもナイル河の灌溉の便あるところは、たとひそれが砂地と雖も果物や棉花を作つてゐる。綿は正に開花の季節、綠蔭の隙に白花の點々たるも風情がある。

ナイル河の下流が古來數千回の洪水によつて土砂堆積し廣大なデルタをなしてゐることは何人も熟知せるところ、而してそのデルタを挟んでナイルの川筋は數十條に分岐するのであるが、カイロ市を環流するのちまたその一つに外ならぬ。しかし、カイロに於て見るナイル河は豫期に反してその河幅狭く、隅田川の五割増し即ち一キロ位のものである。

最後に、古代文化遺物の蒐集では世界的に有名なカイロ博物館を見る。市の西部少しく小高きところであり、今より四五十年前の工事に係る宏壯な建物、入口より天然石・花崗石・大理石の立體又は浮彫彫刻累々として並び、内部に入ればその陳列品は一として五六千年前の文化の進歩を語らざるなく、演説口調の埃及人の英語の説明に一同唯々驚嘆す。大體が大理石又は花崗石を材料としたものだが、花崗石は洛北鞍馬に産する鞍馬御蔭の如き赤き斑點ある優品である。王侯のミイラを収める寢棺、それを覆ふ四角の石箱、王侯の寢臺や寢室用度品や武器武器及び日常の手廻り什器、珠玉・寶石・陶器・塗物・繪畫等到底一々は述べ難し。陶器の中には支那の青磁にも優る何ともいへぬよき色——綠色又は綠紫色をしたものあり、珠玉の中には日本の曲玉や珠數に似たものあり、繪畫の中には往時の繪具のまま鮮明に残れるものや、水彩畫の如きしやれた味を出せるものあり、また、價の高きを以ていへば、ミイラの寢棺にて純金銀且つ寶石を鏤めた一箇數百萬圓といふ大したシロモノあり。ゆつくり觀れば二日や三日はかかるべきを八時五十分より十時四十分まで二時間足

らずで一巡、十一時カイロ驛發ポルトサイド行急行の二等車に乗り込む。カイロ驛は相當廣大なもので、ここからナイルの大デルタを貫いて東スエズ、西北アレクサンドリヤ、東北ポルトサイド行き三幹線外二三線を派するのである。

この邊の列車乗客中、一二等は絶えず觀光客と古代歴史・古代美術・古代地理地質等の學者・研究家を以て滿されてゐる。

カイロよりポルトサイドへ

カイロ・ポルトサイド間列車は日本同様の狭軌で、客室の狀態は日本のより劣り、便所・洗面所の不潔さは滿洲・支那のよりも更にひどい。この線はスエズ運河の眞中に位する樞要地たるイスマイリヤまで東北行し、それより南すればスエズへ北すればポルトサイドに達する。この間百數十哩、これを四時間半で走つて午後三時半ポルトサイドに着いた。カイロ・イスマイリヤ間は處々にオアシスのある外は大體に沙漠と耕地相半ばし、耕地は綿畑が多い。イスマイリヤ・ポルトサイド間は運河に沿ふ鐵路であるが、ここは見渡す限りの沙

漠で、即ち佛人レセツプスが全長百哩のスエズ運河を開鑿したのは全部沙漠の上の大工事・難工事だつたのである。(因にいふ、スエズ運河の開通は明治二年のことだ。)

四時前ポートサイド港着、自動車で市内を見物、伊太利旅行用の小切手にサインを求むべくトーマス・クック社出張所へ行き、隣家の南部商會へも立寄つて寫眞帖・繪葉書などを購め、五時歸船す。

埃及見物は實に有意義な一日ではあつたが、一方カイロ・ポートサイド兩市の乞食然たる押賣人の氣持悪さや熱砂の中を走る不潔極まる列車の苦しさもあり、船へ歸れば全く我が家へ戻つたやう、直ぐに湯殿へ入り温湯のシャワーを思ひざま浴びる爽快さは譬ふるに物なし。

カイロ行を断念した西山老もこの日は半日ポートサイド各所を見物、晝食にはマカロニと日本式饅頭に似たものを腹一杯に詰め込んで大いに氣をよくしたところ、日本なら五十錢位のものがあるがここでは三圓餘もとられ、彼我物價の差の大なるに一驚したなどと話し出し、お互ひ日本の暮しよさを感謝せねばならぬなどと語り合ふ。なほポートサイドには猥寫眞の

押賣あり、洋行土産のこの種のもものは大抵ここで賣附けられるらしい。大道で賣るのは手札型十二枚一組一志乃至二志位のものださうだが、専門店では立派なブックに仕立てた五弗・十弗のものもあるといふことだ。若い人達は皆相當に仕込みをしたらしい。

六時半ポートサイド出帆、甲板に出でて佐多博士と共に美しき日没を眺め、またレセツプスの銅像に對して、それが見えなくなるまで見守つて敬意を表す。

夕餐後、例のオーケストラも聴かず映畫も見ず、八時半就床、熟睡す。利かぬ氣の俺もさすがに今日は疲れた。

船は地中海の東南端に入り、これより西北ゼノアを指して進むのである。

理髮代彼我の比較

七月十七日。早起、一昨日來の疲勞全く恢復せるを感ず。日記及び繪葉書三十枚を書く。荷物を整理してこの船にて日本へ送り返すもの、倫敦へ先きに送りおくもの等に分類し、部屋附のボーイに託す。

正午頃、希臘の南方クリト島の南岸を通過し、北緯三十五度より四十度に向つて航走する。朝の中少し荒れたが、十一時頃よりすつかり風ぎ渡り、眞に青疊の上を渡るに等しい。

六月十八日高崎平田理髮店で刈つて以來一ヶ月ぶりに今日散髪す。昨夕申込んでおいたので工合よくやつて貰へたが、散髪二馬克・顏剃一馬克・外一切〇・九馬克、合計邦貨の五圓五十錢也は床屋ともいへぬものだ。一行三十一人中散髪の支拂は今日始めてかかつた俺が一番少く、中には既に三四回やつて十五六圓取られた贅澤屋もゐる。時間は一時間二十分を要し、仕事は叮嚀だといふものの、料金は東京の一流の五倍半、高崎の平田なら、店員一同の行くを條件で特別割引の二十八錢で済むのだから、正にその二十倍といふことになつた。(因にいふ、淺間丸あたりに比しても三倍の由。)

これによつて見ても、いかに日本が暮らしいかがわかると同時に、いかに日本が金廻り悪き貧乏國であるかといふこともわかるであらう。いかに高崎の如き人口六七萬の田舎町でも、刈込六十錢・顏剃三十五錢とらなくては生活の向上は計れぬ。依て、以上の話を書いた繪葉書を平田の親爺へ宛て

て出しておいたが、彼の感想やいかに?

船長スライン氏の晩餐招待

シャルンホルスト號では、航海中必ず一回船長が一等船客を晩餐に招待する慣例になつてゐるといふが、我々のゼノア上陸も目前に迫つたので、それを今晩催すとの觸れあり、七時半食堂にて特に念入りの馳走を快適な音楽を聴きながら飽食、八時半サロンに移り、コロポ出發以來の甲板十二種競技入賞者に賞品授與あり、我々一行中からは渡邊・平松・田村・岩尾の諸氏入選。また十三日夜の一等船客假裝競技會の入賞者にも同様賞品授與、この一等は前にいつた通り、俺の木魚を敵いた勝谷氏である。乗客總代として六尺七八寸といふ巨人で上海工科大学の教授といふ獨逸人某博士が祝詞を述べ、これに對して船長の挨拶あり、萬歳裡に十時半閉會、その後喫煙室で我々一行に勝沼・高田兩博士をも加へて記念撮影、極めて愉快な意義深き會合であつたが、殊に日獨親善の上に大いに役立つたやうな氣がする。

この日の温度、朝七十九度、晝八十二度、夜七十七度。夕

方希臘のモレヤ半島と覺しき陸影が見えた。

メツシナ海峡とストロンボリー火山島

七月十八日。朝暾暉々、鏡のやうな地中海の中心を更に西々北に向つて進む。

伊太利半島の長靴の爪先からシシリ島を望んで、往昔ローマとカルセーヂとが互ひに小つぽけな帆船を操り、刀剣を振りかざしながら戦つたことを思ひ出し、また英雄ハンニバルの最後の悪戦苦闘を偲んで榮枯盛衰宛然夢幻の如しと感じつつ、ゼノア上陸の準備にとりかかる。

シシリ島と相對する伊太利南端の地は山又山樹木さへ少き荒涼たる有様、シシリ島は、地味肥沃だといふことだが、船から眺めた印象ではさ程の土地とも見え、またメツシナはメツシナ海峡の要地を占める人口十萬の都會だが、これも船からでは大した港とは感じられなかつた。

メツシナ海峡を抜ければ、再び廣い廣いチレニヤ海で、日没まで陸影も島影も一向見え、

温度は今日も昨日同様に低い。北緯三十八九度としては少

し寒過ぎる位だ。

夜七時から七時半の間、メツシナ海峡の北四十哩のところ
で、「自然の燈臺」と稱せられるストロンボリー島の活火山を眺めた。これは海拔六千尺の山で西南方に噴火口あり、この夜も約一時間の間に三四回火焰の天に沖するを見た。溶岩は西北方の海岸へ流出してここに大なるスロープをなすこと恰も薩摩の櫻島の如くであるが、全體の山容は筑波に似て傾斜急である。我が國の汽船は危険を慮つてこの附近を航行せぬので邦人間には餘り有名でないが、この船は船客の眼を楽しませんとてか、勇敢にも同火山三四哩のところへ近づき、特にこれを半周したのであつた。

この日風あり、夕方温度七十四度下る。

遂にゼノアに近づく

七月十九日。遂にゼノア到着の日となつた。

午前七時ナポリ沖を通過したが、ヴェスビヤス火山の噴煙は見えず。九時ローマ沖を通過、十一時サルヂニヤ島及びコルシカ島を左方に、ナポレオン流放のエルバ島を右方に見つ

つ、次第にゼノアに近づく。神戸出航の際には、ゼノア着十日九日午後二時と發表されてゐたが、コロンボ邊で四時となり、アラビヤ海の大暴れで七時となり、今は幾分取返して六時といふことになつてゐるが、いづれ上陸は七時、税關の検査二時間、ホテル着は十時か十時半にもならう。ゼノアのホテルは、サヴォイ・アンド・マジエステイツクであるといふ。

十九日午後三時半擱筆。

一行中の井上貞治郎氏——氏は大阪の紳商で聯合紙器の社長、高崎板紙からここ十數年來毎年何十萬圓とボール紙を買ふ由——は、數日前船室かサロンかで四五百弗紛失、未だに不明、注意すべきことである。

伊太利・南佛・七十ノ篇

昭和十二年七月十九日より
七月二十八日まで

「第十信」ゼノアのホテル・サ ヴォイ・アンド・マジエステイ ツクにて及びヴェニス行車中 にて認む

歐洲上陸第一歩 ゼノア港の第一夜

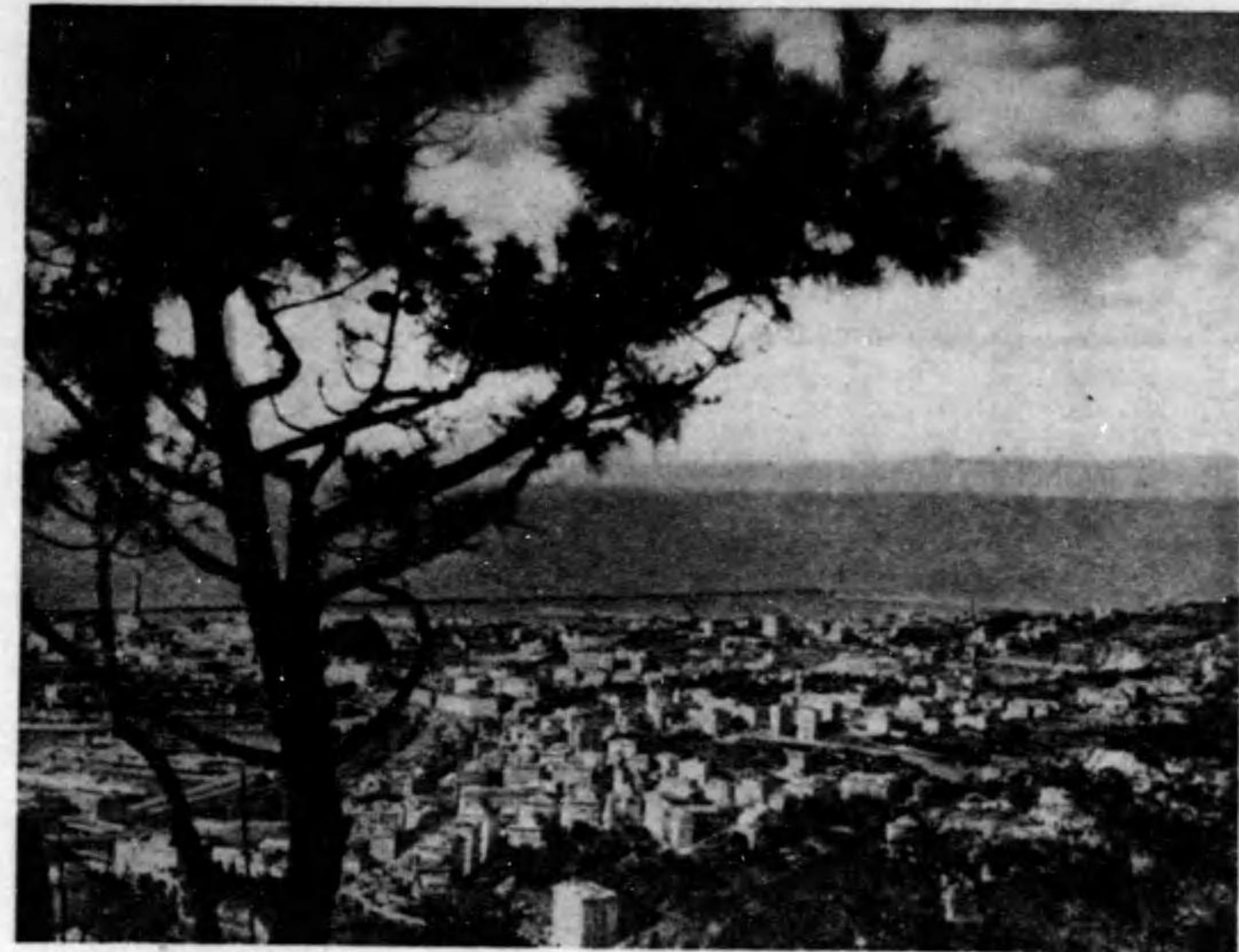
七月十九日夜七時ゼノア港着、二十九日間住み慣れたシャ
ルンホルスト號に惜しき別れを告げて上陸、税關の検査も簡
單にすみ、ここに始めて歐洲大陸に足跡を印したのである。

一體ゼノアといふところはヴェニスが地中海の貿易港とし
て覇を唱へてゐた十四五世紀の頃まではさ程發達しなかつた
港であるが、コロンブスの亞米利加發見やすつと後世のこと
ながらスエズ運河の開鑿の成功により、亞米利加・印度・東
洋各地への交通頻繁となるに及んで、俄然、地中海有數伊太
利第一の貿易港となり佛蘭西のマルセーユと併稱されるやう
になつたのである。ゼノアがその後方に背負ふロンバルチャ

平原は、謂はば關東平野か濃尾平野のやうなもので、伊太利
第一の資源なる農産品に富むばかりか、織物紡績工業や大理
石工業の盛んな土地であるが、ゼノアは即ちかかる形勝の位
置を占める物資の大吞吐港なのである。リグリア海に面する
ゼノアを以て伊太利の表玄関口とするならば、アドリヤ海に
面するヴェニスは例へば裏日本の新潟・敦賀といふやうなも
の、輸出入品の數量からいつても、ロンバルチャ平原の物産
のその七割はゼノアを経由するのである。

伊太利は古來大理石の原産地として名高く、その大部分は
建築に用ゐるだけあつて、ホテルでも百貨店でも普通の商家
でも、外面よりは寧ろ内部へ入る程立流で、今俺はサヴォイ
・ホテルの五階八號室のヴェランダより中央ステーション及
び驛前廣場を圍むホテルや運輸會社や廣場の中の大理石像を
眺めつつこれを書いてゐるが、その豪壯さは目を見張らしめ
るものがある。

ただゼノアにして惜しむべきは、神戸と同様海と山の間に
狭まれた港市であるだけに、所々に廣場の設けがある外は如
何にも道路が狭く、且つ八十萬の人口を容るるには山手へ向



景風港アノゼ

つて屋上屋を重ねねばならず、この急傾斜へ通ふ自動車・電車は圓きカーヴを七曲り八曲りしなくては頂點へ達することは出来ない。しかし、これも遠方殊に海上から望めば一種の美觀をなすものではあるが。

道路の完全なことは、まるで鐵の一枚板を敷いたやうで黒光りがしてゐる。廣場にはコロンブスとかシーザーとかガリバルディーとかいふ英雄の像が立ち、また大理石の噴水池がある。昨夜は恰も月明で、石造の噴水臺に漂ふ白銀光實に美事であつた。近くに數千呎の山があるので水量豊富、また水力電氣も發達して市内の燈光は十二分であるが、しかしいかなるわけか、銀座街・百貨店街は一切夜間營業をせず、八九時といふに最早寂寞としてゐた。夜までも働くのは日本だけのことか！

四百五十年前から残るコロンブスの生家・住宅・小庭、大理石五百米の大トンネル、山手中腹の高級住宅地、コロンブスの墓、モルガンお雪の墓、大理石の墓石揃ひでその美しさ歐洲第一等の稱ある墓地等を見、最後に往昔城のあつたといふ三百五十米の丘の頂上に登つて港内を俯瞰すれば、先程乗

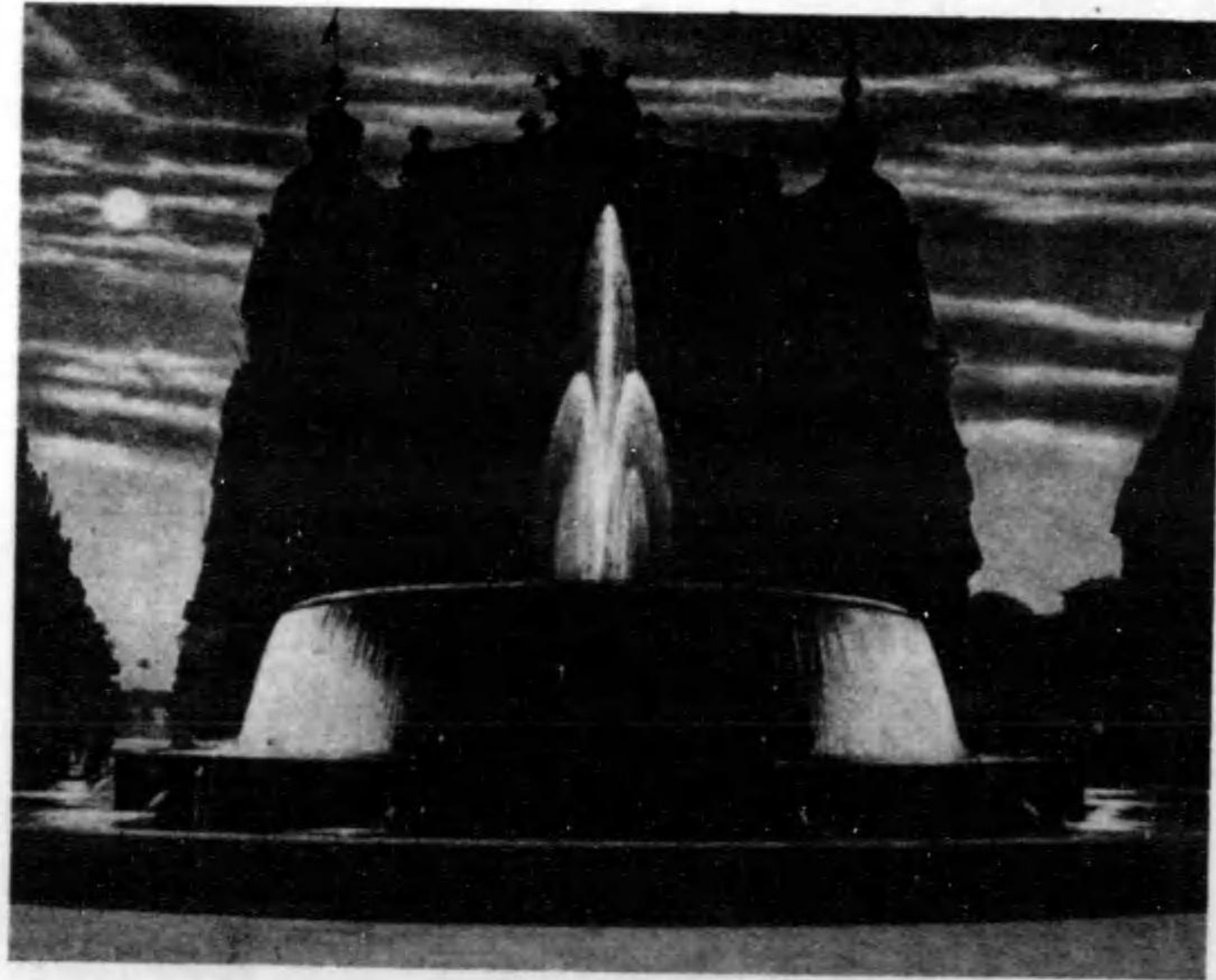
り捨てたシャルンホルスト號は直ぐ足の下に煌々と電燈を輝かしてゐる。折から十一日の月影も清く、見方によつては六甲山よりの神戸港やヴィクトリヤ山上よりの香港よりももつともつと美しいともいへる。かうして歐洲の第一印象地たるゼノアの夜景美を存分に味はつて歸路に就く。

十時過ぎ二三十分間、閉店後のゼノア銀座を歩きショッピングセンターを視察す。女性の裸體畫を應用した注意吸引力百パーセントの廣告あり、その手際よきに感服す。店の飾りつけといひショッピングの陳列技術といひ、日本のとは格段の相違である。屋内の大理石も商品を美しく見せるに非常に役立つてゐる。

ホテルへ戻つて床につく。ローマの日本館主人藤野といふガイドがゼノアへ着き、ローマ大使館宛の國元からの手紙を二通届けてくれた。この手紙は六月二十三日東京及び高崎發のもので、亞米利加經過二十七日間を要してゐる。何しろ外國にあつて始めて見る國の便りなので、心嬉しさを限りなく、繰り返し繰り返し熟讀した。

ゼノアの氣温は船中より五度高く、朝七十五度、最高八

塔水噴の夜月・アノゼ



十五度位、日本同様氣候のいいところらしい。

七月二十日。五時半起床。ホテル附近の街を歩き繪葉書などを買ふ。南洋・カイロ・ボートサイド等の半開地より物價安し。物によつては寧ろ日本より安し。これはリラの安いため、伊太利の金なら高く、日本の金なら安いといふことになる。(一リラは邦貨二十錢見當、これでも大分上つたのだ。)

午前九時十一分發のミラノ行き特急でゼノアを去る。ミラノでヴェニス行急行を待合せる一時間半を利用し、驛の大食堂で晝食をとる。この時、名物の葡萄酒を小瓶半分飲んだところ、久しく禁酒同然だつたせむかかなり酔つた。ミラノ驛の大圓屋根の鐵骨はムツソリーニが歐洲第一と傲語するもの、鐵の皆無な伊太利では愈々困難すればこれを彈丸に用ゐるのではないかと人が戲談にいふが、それ程立派なものであつた。

ミラノはロンバルチヤ平原の中心より稍々北西に位し、千歳の古都なると共に農工業の盛んなる同平原に於ける樞要の地、しかしこの見物はローマよりの歸路に譲り、午後一時半ミラノ發、途中、琵琶湖の半分位あるガルダ湖及び同名の遊

樂避暑觀光地ガルダや歐洲大戰當時獨逸軍のために蹂躪されたペロナやセント・アントニオ寺院のあるパドワ等を経て、ミラノ以後三時間半、午後五時ヴェニスに到着した。

「第十一信」ナポリのホテル・サ ンタルチヤにて認む

水の都ヴェニスの一夜

七月二十日の午後五時過ぎ、水の都ヴェニスに着いた。ヴェニスは米大陸發見以前十四五世紀の中古時代には歐洲第一の貿易港として既に人口三十萬と稱せられた程であつたが、その後漸次衰退し、今日では例のゴンドラを名物とする遊覽地としてのみその名を唱はれてゐる。しかし往時貿易や掠奪によつて蓄積された富豪の富及び商人階級から徵奪した諸侯貴族の財貨は、大寺院・大王宮・大享樂場の建築物やフロレンスよりも一時代先んじて希臘に影響されたもろもろの美術品を豊富に所藏する博物館等によつて識ることが出来る。現在のヴェニスの貿易は近東バルカン諸國や埃洪國に對す

る徴々たるものにし過ぎず、ゼノアやナポリの何分の一にも足らぬが、一面遊覽都市としての發展には益々努力を惜しまぬやうで、對岸リドの海水浴場を合せて夏期の避暑地、四季を通じての享樂境といへば、やはり歐洲でも名高い場所の一つである。

汽車は三千六百米といふ一見埋立地のやうな長い鐵橋を渡つてヴェニスに入つた。直ちにホテル・レジナに着き、夕食の後、發動機船に乗つて町を見物する。

いふまでもなくヴェニスは街路即ち水路で、大通りには富豪邸宅・料理店・ホテル・カフェー等あり、裏通りには小賣店軒を並べ、それらの玄關や入口は、すべて「水」に面してゐる。何しろヴェニスといふ町はヴェニス灣岸百二十の小島の上に組立てられた實に複雑入念な加工を経た町で、海賊の劫掠や半開國相手の暴利の蓄積によらねば、到底このやうに花崗石・大理石を土臺とする困難且つ贅澤な建物群は生れなかつたであらう。建物には四五百年前のもの多く、これに風化作用が加つて、古色蒼然、なかなか趣味深い。大水路には四五の架橋あり、小水路の小橋は無數である。行く行く、何々

橋・何々廣場・何々宮殿跡・何々富豪邸跡と教へられるが枚舉に暇なく記憶もしきれない。最後にサン・マルコ廣場へ上つて先づ高さ十五米の大花崗石塔に驚き、次いでサン・マルコ寺院を觀る。この寺は日本でいへば官幣・國幣の神社を造營するに多少似通つた信仰から建てられたもので、ルネッサンス式建築の模範としてその偉容を誇つてゐる。サン・マルコ廣場は、リド海水浴場と兩々相對する民衆の歡樂場で、約五六萬坪の地域には美しき大理石彫刻點在し、夜分はそこでオーケストラが演奏され、人々は百軒以上にも達する喫茶店・カフェー等に雲集して一夜を楽しむのである。この夜も九時・十時の頃既にかなりの人出を見たが、深夜に近づけば愈々雑沓を來すといふ。

十時半再び船に乗り、折柄南方へ廻つた十三夜の月を眺め、ゴンドラ船を操る船頭の船唄を聴きつつ、十一時ホテルへ戻つた。

美術の都フロレンスの二日間

七月二十一日。亡母の命日、冥福を祈る。朝八時半ヴェニ

ス發、西南方フロレンスに向ふ。アヂゼ河・ポー河を渡つて暫く進めばボロニヤあり。この町は工業地帯及び大學所在地として伊太利中部の樞要都市をなし、人口約二十萬といふ。それより南下してアペニン脊梁山脈のトンネル數十を抜けたが、この山脈は思つた程峻嶮ならず、高さも精々五六千呎に感じられた。午後一時半フロレンスに着き、グランド・ホテルに入る。この宿は 聖上陛下が皇太子殿下の御砌、歐洲を御歴遊遊ばされた折の御宿泊所たるの光榮に浴した家で、アルノ河に望んだ景勝の地を占め（ただアルノ河が清流と形容できないのが惜しい）、また建築も全部大理石造りの豪奢なものである。一體フロレンスの邊は大理石本場産地のこととて、單にホテルのみならず、停車場からアルノ河堤防の一部分までもが大理石造りなのは驚く。殊に停車場はフォーム・屋根・柱・樋等すべて純白づくめで、ミラノの鐵骨驛と共に停車場建築としては頗る異彩を放つてゐる。

今氏と共に一先づ百四十三號室に納つて少憩の後、一同大型バスを備つて夜八時まで四時間市中見物、八時から夕食、その後更に二時間單獨行動で見物を續けた。これに翌日更に

見聞したところを附加へ、そのノートを左に掲げておく。

(一)民衆廣場。例の如く大理石の彫刻とカフェーと奏樂。晝は割合寂しいが、夜は忽ち歡樂の巷となる。音樂好き・享樂好きの民族性は日本人には一寸想像の外である。

(二)貴族廣場。往昔の王宮殿に近い廣場、今はあまり人出なし。

(三)ドーモ。大理石の大寺院、間口六七十米、奥行百五十米、高さ四十米位の多角形の建物、土臺石から屋根まで全部大理石といふ贅澤さで大ききからいつても東本願寺や知恩院が二つも三つも入る位。伽藍の内部は五百年間の香煙にけぶり、蠟燭の明りが神秘的にゆらめいてゐる。

(四)ダンテの生家。狭い小路の中に、間口八九間、奥行四間ばかりの花崗石造りの古めかしき陋屋として残つてゐる。また附近の商店街にダンテの戀人の舊宅も今は一小銀行の出張所となつて跡を止めてゐる。

(五)諸名士の墓所。墓地といふから郊外の埋葬地かと思つたら、市内西方のサンタ・クロースといふ寺院のそれであつた。その廣場にはミケランジェロの作になる大理石巨像あ

り、そのためこれをミケランジェロ廣場ともいふ。宗教家・偉人・學者・發明家・天文學者・美術家の墳墓約三四十、地下には高僧のが二三十あり、何れも棺の上には大理石で裝飾が施されてある。この日も參詣者五六百人ゐたが、就中ダンテ・ダヴィンチ・ミケランジェロ・ラファエル等の墓には香華が絶えない。

(六)博物館。元フロレンス王侯の宮殿が博物館になつてゐる。フロレンス侯は羅馬帝國瓦解後の群雄割據時代から伊太利統一に到るまでの數百年間に大いに覇權を振つた大名の一人で、日本の封建時代に於ける前田とか島津とか尾張とかいふ百萬石大名と意味は同じだが、勢威は段違ひに上手だつたやうで、殊に代々美術工藝の保護者たる地位に立つて、大いに文化に貢獻するところがあつた。

館は間口三十米、長さ百五十米位の長方形の三階建が中庭を狭んで四棟連つてをり、その一角には百米位の高塔が立ち、これは市中何れのところからも望見することが出来る。館内各階の高さ十米位、内外觀共に堂々たるものだ。俺は二日間

に渡り、四時間の見物をしたが、とても見盡せるものではない。西紀千年以降十四五世紀まで特にルネッサンス時代のものが七八割までを占め、ただただ目を眩るの他なく、秃筆を呵しても説明すら至難だから、歸つてから土産の寫眞帖を見て貰ふことにする。

博物館はアルノ河畔にあるが、ここから對岸の別邸——今は廢墟と化した、往昔は大名の二號でも住んでゐたものか——へ幅五六間で大理石裝飾のついた花崗石の二重の橋が架つてゐる。上は王侯夫妻が通り、下は臣下が渡つたのだといふ。今は橋の兩側に二三十軒づつ淺草の仲見世様の土産物屋が立竝んでゐる。こんな狭いやつと二間半幅のところさへ道路が完全なので自由に自動車を通つてゐる。道路のよろしさは全く美望の外はない。アルノ河は隅田川の三分の二位の川幅で、ここに五つの橋がかかつてゐるが、すべて石橋で且つ兩端その他に大理石の彫刻が飾りつけてある。王宮の橋を除いた四橋には何れも電車が通つてゐる。

(七)モザイク工場。大理石の七寶象嵌細工ともいふべきモザイクを作る某名匠の工場を見る。大理石を臺石としその上へ何十色もあるといふ大理石の破片や金銀寶石を鑲める細

工で、無闇に手間を喰ふ仕事らしい。一行十リラより四千リラ(一リラは邦貨二十錢)の買物をする。但し俺は買はず。

(八)美術館。舊王侯の離宮が現在美術館となつてゐる。一行は外観だけ見たのだが、俺は翌日一人來つて朝九時から晝近くまで内部を巡覽した。建物は博物館に匹敵する雄大壯麗なもので、陳列品は博物館が十四五世紀のものを主とするに對し、これは十六七世紀から最近に至るまでの繪畫・彫刻・工藝品を以てしてゐる。年代が新しいだけ博物館よりも氣分明るく親しみ易い。俺は勿論美術などには疎い男だが、フロレンスの博物館・美術館を見て最も強く感じたのは、第一に四五百年乃至千年以前のものがよくもかくの如く丁寧にありの儘に保存されてゐるものだといふこと、第二に繪畫でも彫刻でも宗教的なものが大部分を占めてゐるが、畫家なり彫刻家なりが自分の名譽慾や物質慾を抑へ、眞剣一向な宗教心から生涯を賭して堪忍克己しつつ製作に従事した精神が、一作一作の上に自ら表はれてゐるといふことで、そこを實に尊いと思つた。それには王侯や富豪の庇護もあつたには違ひないが、美術家自身が崇高な人格を有ち、熱烈な信仰を抱か

ければ、かくまで観る者を感動させる筈はない。

博物館にしても美術館にしても二十臺の青年から五六十歳の老爺に及び中には女性も交つて十數人の名畫模寫をなす者があつた。皆貧しさうにぼろぼろの洋服などを着て畫架を並べ、傍目もふらずに筆を走らせてゐる。大物は何十日もかかるらしく、これは亞米利加あたりの成金などが註文するのであらう。小品は即賣もしてゐる。翌日汽車中でガイドの簾野氏から聞いたのだが、彼等模寫美術家は、大美術家の子弟で貧乏に苦しむ者とか、壯年時代相當美術界に功績のあつた者が家庭の不幸で老いて且つ生計に困難する者とか、さういふ特殊な事情にある人の中から嚴重な審査を経て許可されるわけで、館の方でも彼等を優遇し、繪の位置を變へたり光線の工合をみてやつたりして便宜を計つてゐるといふ。

とに角、フロレンスの博物館・美術館は、俺は俺なりに感銘深かつた。巴里へ行けばこれ以上のものがあるといふが、果してどんな風であらう。一體フロレンスは京都に似て歴史的品位と美術的香氣の融け合つた奥床しい古都であつて、現に民間の富豪に美術品蒐集家が多いなども京都と同じ感じ

である。

餘談に亘るが、伊太利の一二等列車には六人乗り一箱の中に、必ず名畫複製の額が何枚かつ掛つてある。北部から東北部へそれから南部へ二千哩十二回も乗つた汽車中二十面以上の額を見た。さすがは美術の國である。それから道路の立派さも日本の悪道路に惱む我々には感嘆せざることを得なかつた。物價は大體次のやうな調子である。(一リラは目下邦貨十八九錢)

- ビール一瓶 五リラ——七リラ
- サイダー一瓶 三リラ——五リラ
- オレンヂジュース一杯 一リラ——二リラ
- 汽車食堂一食 十リラ——十五リラ
- 自動車一時間 十五リラ——二十リラ
- 同一哩ばかり 四リラ——六リラ
- 馬車一哩ばかり 三リラ——四リラ
- ハンケチ一枚 二リラ——五リラ

餘談は扱ておき、二十一日の夕六時半大體の見物を終つてから、アルノ河對岸の小丘ミケランジェロ眺望臺に登り、フ

ローレンスを見下した。折柄十四日の月山の端を出でて我等を照し、俺はここでまた今日が命日の亡母のことを思つた。

七時半ホテルへ戻り食堂に入る。暑中休暇中のこととて北歐から來遊する者多く、數百の客室を有するこのホテルも超満員、さすがに廣き食堂もはみ出す盛況である。

食後運動がてら二時間市中の商店街を歩く。丁度廣島位の町だが、餘り賑やかでない。涼み場も大して混雑してゐない。十一時就眠。グランド・ホテルは、カイロ以來四軒のホテルの中では最も設備がいい。しかし宿料もこれまでの二倍だといふ。

橄欖の都ナポリに入る

七月二十二日。朝八十度、正午八十七度。東京・高崎と同溫度位か。亡父の命日。異郷にあつて冥福を祈り、且つ自分の健在に對する加護を感謝す。

朝、附近の寺院に參詣す。土地の信者のするやうに跪坐して、例の如く 天皇陛下・皇后陛下・皇太子殿下の萬歳と邦家の隆昌を祈願する。

午前八時食堂、その後三時間自由行動、この間前記の如く美術館を見また博物館を再訪した。正午食堂、午後一時三十分フーレンス發の急行列車で南方ローマに向ふ。午後五時半ローマにてナポリ行き列車に乗換へ、夜九時半ナポリに着く。途中周圍二三十哩の風景絶佳なる一小湖や、山上に残る五六の舊址や、神風號が往復共に歓迎を受けたローマ郊外の民間飛行場や古代ローマの崩壊した城壁などを見た。土地はローマ郊外はあまりよくないがフーレンス附近やナポリに近き邊は山地はあつても田園は相當耕作され、恰も大分縣・宮崎縣のそれに酷似してゐる。しかし大體に於て日本の良質の地味に比すればかなり劣るらしい。樹木の中には夾竹桃やブラタナスや我々の目に親しいものがある。殊にナポリに近づくと、橄欖の繁茂した中に赤・桃・白の夾竹桃の花が咲き盛つて見える。このあたりは亞熱帯に屬するの、夾竹桃の花瓣大きく、また九州青島あたりに見る植物も交つてゐる。

十五夜の月明にヴェスヴィヤス火山の噴煙を望み、身今や憧れのナポリにあるを思ふ。自動車でホテル・サンタルチャに着き、直ちに食事、食後一頭立三人乗馬車を備ひ同志と共に

に市中見物に出る。ナポリの夜景は實に美しい。股賑街の建造物は昔から高さに制限があつて三階・四階位に止め、一階位違つても高さは大體同じに造つてあるので、まことによく整頓された感じを受ける。

アパートがかなり多く、日本のやうに一階・二階の小住宅は全く見當らない。中流階級以下は皆アパートに住むらしい。歐洲の各都市ではアパートの建築に補助金を與へ、以て小住宅や無産者街の整理策としてゐるのだ。

見物市中巡邏のファツショ兵士が突如馬車へ飛附き、日本萬歳を唱へたのは痛快であつた。

ホテルへ歸つて松田氏と共に四十七號室に宿る。午前一時就寝、疲れてよく眠つた。

「第十二信」羅馬のグラント・ホテルにて認む

ナポリ見物とボンベイ及びヴェスヴィヤス巡りの印象

七月二十三日。八十五度。

昨夜夏季としては珍しく冴えた十五夜満月の光を浴びつ一時間半ばかり市中を見物したのと、今日ローマへ出立する前二時間ばかり自動車を走らせた印象とを綜合してナポリを概観すれば次の通りである。

- (一) ホテル三階のバルコニーからナポリ港の一部を見る。左手にヴェスヴィヤス、山容、現活火山たる右方の圓錐型は淺間に似てゐるし、左方の尖つたところは筑波を思はせる。登山電車の道筋までつきり見える。噴火口は絶頂の一段下にあるらしく、常時噴煙を吐くこと淺間と同様だが、少しも壯大な感じはない。況んや外輪山の雄渾さは阿蘇に較べれば遙かに劣る。妙な比喩のやうだが、日本の火山と伊太利のヴェスヴィヤスを並べて見れば、兩國の國力・國勢の差違と比例のとれてゐることがわかるやうな氣がする。
- (二) 舊王宮現離宮。二三世紀前の煉瓦造りの大建築、目下伊太利皇太子殿下御滞在中とのことで、盛裝した軍人が立番してゐた。
- (三) 舊王宮現博物館。ボンベイ廢墟の發掘品、即ち紀元前

約千年より紀元一世紀に至る約千年間の美術品を陳列、彫刻や工藝品が多く、繪畫は少い。ナポリが希臘に隸屬してゐた時代のものが多く、要するに希臘文化を知る上に必要な博物館である。

(四) ナポリ綜合大學と中央郵便局。共に大理石と硝子を以て成つた明朗な建築物で、その氣分のよろしさは特筆に値する。大理石の豊富とガラス工業の進歩とを俟つて始めてかういふ建築は可能なのであるから、日本では到底望めない。否、郵便局の方は歐洲各都市でさへ類例のない立派なものだといはれてゐる。

(五) オペラ座。古ぼけた外觀、あまり感服しない。伊太利第三位の小屋だといふ。三浦環ここで三四回公演したとか。

(六) ナポリ銀座。大百貨店は見當らぬ。東京なら銀座の三越程度の相當充實した店が多い。陳列窓や陳列方法は日本よりも寧ろ拙い。ただ大理石應用の店内裝飾は非常に美しい。約十四五丁の間人出餘り多からず、大體夜間は市民皆海濱の歡樂場に集つて享樂する習慣で、日本人のやうに夜まで營業し買物するといふことはやらぬ。朝も開店はかなりゆつくり

してゐるやうだ。要するに卸小賣共に利潤を多くし、一方働く時間を少くし、無駄骨を折らずに一生涯愉快に暮らさうといふ建前で、日本流とは大分様子が違ふ。

(七)大停車場の廣場には二三乃至十數の銅像・石像あり。伊太利中興の皇帝とかガリバルジー以下伊太利維新の三傑とか、いろいろある。

(八)有名な水族館や數ヶ所の展望臺は、時間がないので行けず。

(九)市の東北端からヴェスヴィヤス方面の自動車専門道路あり、車一臺・客一人につき幾許と通行税を取つて修繕費と償却費に宛ててゐる。その代り思ひ切つて一直線にした黒光りする程完全堅緻な道路である。これが二十五哩先のボンベイ、更にその先まで四五哩も續いてゐる。我々は三十人乗りの大型バスでボンベイへ向つたが、日本の道路なら一時間半を要すべきものがここでは五十分しかかからぬ。

(十)ボンベイの廢墟は世人周知のことだから詳しくは書かぬ。ボンベイの町は紀元前六七世紀の頃から起つたと傳へられるカンパニヤの大都會であつたが、紀元前六十三年一部震

害を受け、その時は復興したが、紀元七十九年再度大震災に遭ひ、且つヴェスヴィヤスの大噴火を伴つたので當日集會を催してゐた二千餘の市民は一人残らず一瞬にして熔岩の下に埋没した。それが十七世紀に至つて偶然發見され、十八世紀以來今日に至るまで學術的發掘が續けられてゐるが、これは極めて難工事で經費も相當にかかるため觀光客の落す金だけでは賄ひきれぬやうだ。二百年の間に六分通り發掘したが、残りは伊太利の國家事業として經費の許す限り小規模にばつばつ掘出してゐる。

(十一)ヴェスヴィヤス登攀は豫期に反した單調さで、阿蘇・三原・淺間・那須等の登山に慣れた日本人には、第一眺望の變化が乏しくてさつぱり趣味が感じられぬ。しかしかかるヴェスヴィヤスでさへ歐米人には珍しいと見え、折柄の暑中休暇を利用した遊覽者多く、ボンベイ某レストラン前の廣場などには今日も五六十臺の自動車が並んでゐた。

ボンベイ・ヴェスヴィヤス廻りで往復六時間を要し、午後三時半ホテル・サンタルチャに歸る。

羅馬への車中丸紅商店の一行と語る

夕六時四十分ナポリ發でローマに向ふ。ナポリで偶然丸紅商店の外遊員四人と邂逅した。伊藤氏・松本氏・中西氏・栗本氏等皆舊知の間柄である。丸紅の一行は四月一日神戸出帆、亞米利加二ヶ月、英吉利一ヶ月、南佛より伊太利に入り、これから瑞西を経て獨逸に入り、歸路はシベリヤを通つて九月末歸國の豫定だといふ。丸紅が毎年三四人づつ歐米視察員を派遣すること既に五年に及ぶはさすがに偉なりといふべし。

扱て伊藤氏以下四人と同車してローマへ向ふ車中、久しぶりに商賣談をなす。聞けば七月十日過ぎに横濱生絲清算九百圓臺あり、最近は八百六七十圓即ち四五分方の反動安、この分なら高崎店始め初秋斥候戦も豫想以上の賣行きがあるかもしれぬ。人絹も八十圓臺、綿絲は比較的伸力なしとのこと。列車内の食堂で夕飯を食ひ、ビールを少し飲む。食事は邦價の三圓四十錢、日本の二三倍である。

この夜の月皓々たり。
夜十時過ぎローマへ着き、驛前廣場突當りのところにある

グラランド・ホテルに投宿す。このホテルはフロレンスのホテルと同名だが、建築・構造・設備等も雙方負けず劣らずで、殊にローマの方は食堂・社交室の壁畫や裝飾電燈の工合がまことに氣持よい。しかしフロレンスのは同市一流であつたが、ローマは町の格式が彼より遙かに上だからこのグラランド・ホテルは一流の下か二流の上なのかと思ふ。これまでの宿ではナポリのサンタルチャが最も劣つてゐた。

「第十三信」ニースのテルミナ ス・ホテルにて認む

羅馬見物の二日間

七月廿四日。朝七時起床、驛の附近なるサンタ・マリヤ・マジオーレ寺院を觀る。この寺は西曆五世紀頃の創立にかかり、ミケランジェロの壁畫を以て名高い。大部分は修理が加へられてゐるが、別に建立當初の姿そのままを傳へた建物あり、風化作用を受けた大理石は今花崗石の如くに見えるが、それでも尙崩壊はしてゐない。ある部屋の高さ百尺許りの天

井の一隅から太陽の光線を探り、これを外部の寺院の地盤たる大理石の鋪道の上に畫いた線や圖形や數字の上へ導いて日時計の仕掛としたものなどがある。またこの寺には王侯・軍人・名士・富豪の墓も多く、宰相ムツソリーニも折々花環を提げたりして祈禱にやつて來るといふ。先程から紳士然たる一人の男が莫迦に町寧事細かに説明してくれると思つたら、これが頼みもせぬのに終ひには永々と英語演説を始め、結局我々五人で五リラ(八十五錢)を要求された。

九時半一同勢揃ひ、それより午後二時まで五人乗小型自動車六臺によつて息もつかずにローマの名所舊蹟を見物する。

(一)陸軍省及びゼネラル某の大理石像。像は馬上の姿だ。
(二)四泉街の四つ辻。古代ローマの中心地たる十字街の四隅に立派な彫刻を刻み、そこから清き泉が噴出してゐる。伊達政宗は仙臺に芭蕉の辻を作つたが、殊によると支倉六右衛門ローマ歸りの智慧ぢやないかなどと空想する。但し事實は知らぬ。

(三)高等法院・司法省・法王廳・現皇帝の宮殿。いづれもきらびやかに着飾つた好男子の衛兵がぶらんぶらん歩いてゐる。

る。この邊はローマ七丘の一たるヴィミナーレ丘の續きにあつて小高いところだ。

(四)ムツソリーニのバルコニー。これはよく映畫に出て來るやうに、前面民衆廣場の大群集に向つてムツソリーニが例の獅子吼をやるところだ。しかし近來は頭を使ひすぎて多少弱つたせゐか以前のやうに屢々は演説しないさうだ。鋼鐵の如き意志を有つムツソリーニも齡には勝てぬのか、それとも活動が度に過ぎるのか、頭髮既に五百本を殘すのみとのことだが、果して誰が數へたものか。

(五)伊太利統一の記念塔とヴィクトル・エマヌエル二世帝の像。塔は大理石の高塔、像は巨大な金被せの銅像で帝の馬上姿を現してゐる。伊太利統一の業は今から七十六年前の西曆千八百六十一年ガリバルジー・マジニー・カヴール等の三傑がエマヌエル二世帝を伊太利國王と宣言するに及んでその中央集權的立憲君主國たるの實を得たもので、二世帝の父君ウムベルト一世帝は元サルヂニヤ大侯國の國主であつたが、機に乗じて統一の大業を企て、それが二世帝の治世に於て完成されたのである。三傑の中でも特にガリバルジーは我が西

郷南洲翁にも譬へつべき大人物であつたことは知らぬ人もあるまい。高塔と巨像の屹立する廣場に對し、彼方のパラチノ丘の方角にはルネッサンス式尖塔林立の寺院あり、ここに伊太利統一の將士及び無名戰士の墓がある。これは我が九段の靖國神社や各都市の英靈殿と同じ意味のものである。

ローマにて(著者)



(六)パンテオン。紀元前二十七年の建造物、日本でいへば八百萬の神々の神殿ともいふべきもので、歐洲最古の神の宮居である。ローマ帝國最盛時代に無賃銀の奴隸や罪人を使役し且つ多くの屬國からあらゆる材料を寄集めただけあつて、二千年の風雨に堪へて今尙壯麗無比、七八十尺も上方の天井が漆喰式の壁にはあらで盡くこれ巨量の大理石なるには驚くの外はない。

内部には伊太利皇室の墓、殊に英主ウムベルト一世帝及びエマヌエル二世帝の御墓があるが、三十七歳を以て夭折したかのラファエルの墓もここにあるのは、いかに美術家・藝術家を重んずる國柄であるかがわかる。高さ五米、幅二米半、その上に彫刻が施されしかも少しの狂ひもなき入口の大銅扉を入れれば、數十本の大理石巨柱は百尺の屋蓋を支へ、鋪石はモザイクの大理石、天井の徑十二米の大穴から採る光線は千五百坪の殿堂内に普く溢れ、隅々まで新聞が讀める位の明るさを與へてゐる。雨天の時は雨水が鋪石を洗ひ清め一方へ流れ去るやうな勾配がついてゐる。この大殿堂の

基礎工事がいかによろしかつたかは紀元一世紀のローマ大地震に際してびくともしなかつたことで證明されたといふ。恰も我が善光寺地震の時、人々皆善光寺本堂へ逃げ込んだやうなものである。

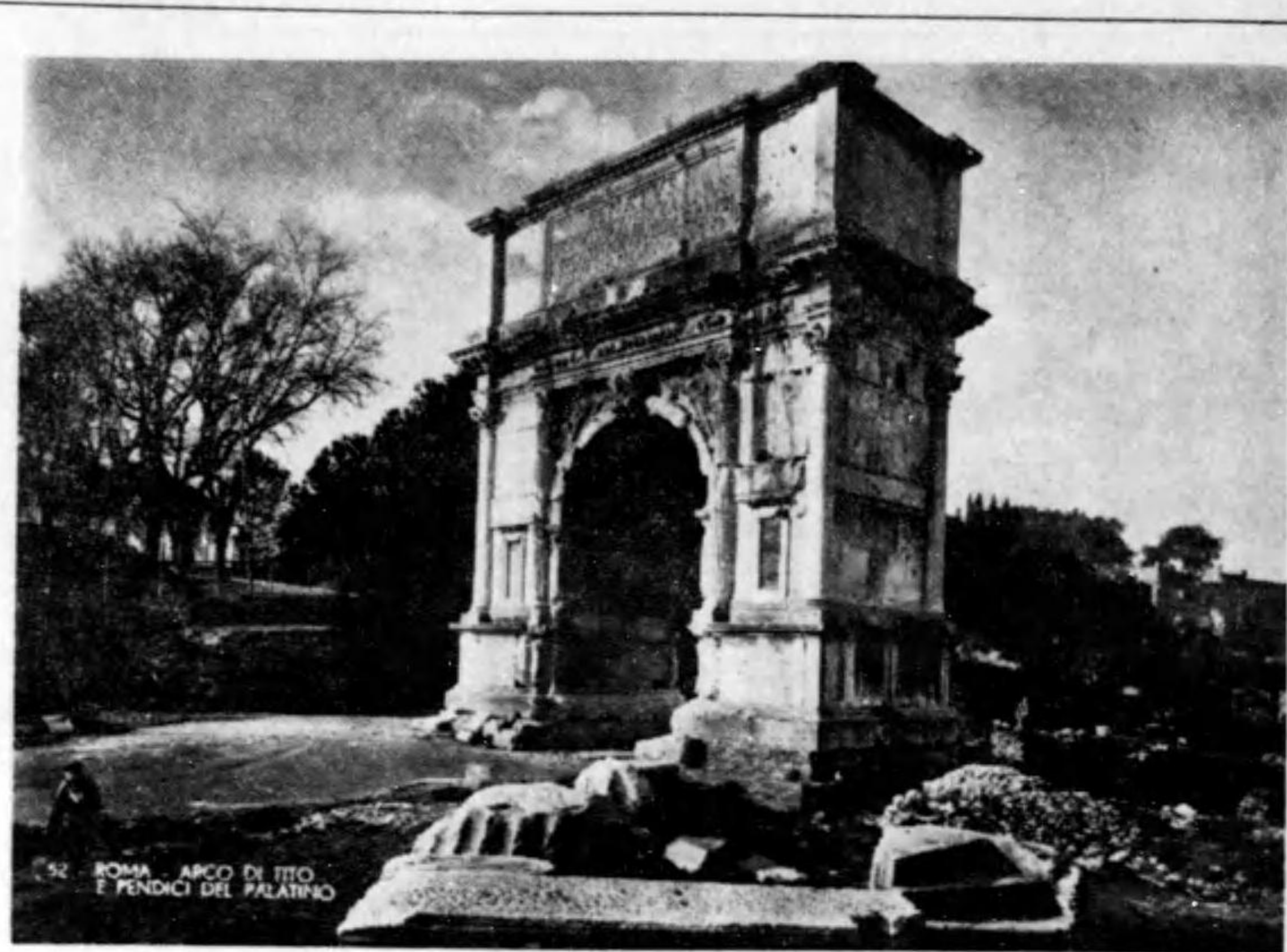
(七) 次の廣場にシーザー塔及び戦勝記念塔あり。

(八) サン・ピエトロ寺院。ローマン・カトリック教の大本山で世界に於ける最大最美の宗教的建築物。十六世紀初頭法王ユリウス二世起工し、爾來百二十六年間の歲月と一億の經費を費して竣工したもので、ブラマンテ・ミケランジェロ・ラファエル等皆これが裝飾に全努力を傾倒したのである。ピエトロ寺に向つて右側の建物はヴァチカン宮殿で、一千以上の廣間・禮拜堂・私室等に加ふるに二十の廷室があり、ここに納められた珍品寶玉の類は想像を絶してゐる。中でも著名なのはミケランジェロの天井畫とラファエル室である。宮殿の西側には博物館あり、繪畫・彫刻・古物を陳列し、ラオコーン像を始めギリシャ彫刻の精粹が集められ、またダ・ヴィンチやラファエルの傑作が多数見られるが、中でも法王の通路に當つて掲げられた一面約二平方米數十面の宗教畫は、ラ

ファエルが法王の囑を受け一命を賭し渾身の力を致して成就したもので、俗にこれを「ラファエルの廊下」と呼んでゐる。ミケランジェロが八十六歳の長壽を保つたに對し、ラファエルが僅か三十七歳で世を終り、しかも二人共文藝復興期の二大天才として稱へられたのは一奇とすべきである。

ここにはまた伊達政宗が支倉六右衛門に托してローマ法王に呈した信書が出てゐる。これは幅一尺二三寸、長さ三四尺の紙に書かれたもので、保存よく墨色亦鮮かで、しかも内容は政宗の豪快な性質や態度を極めて明瞭に出してゐる。書後に慶長十八年九月四日とあるを以て見れば、今から三百二十五年以前のものだといふことが判る。

進んで法王の參拜所に至れば、ここにもミケランジェロやラファエルの壁畫多數あり。すべて宗教畫で、聖母やクリストやギリシヤ・ローマ・エジプト等の神話を題材にしてゐる。ミケランジェロでもラファエルでも餘り餘裕なき家に生れたが、苦心慘澹専門の藝能を錬磨する以外にも哲學・宗教・生理・醫學・天文・地理等あらゆる學藝に通達してゐたと聞くが、彼等の傑作をまのあたり見つつ美術家の事業亦偉な



跡遺の門旋凱マ-ロ古

る哉と感嘆した。特にミケランジェロは繪畫・彫刻のみならず建築・設計等にも長ずる一種の美術技師であつて、九十年に近い生涯を間斷なく仕事に没頭して文化に貢獻した點、實に偉人傑士といふべきである。

一行中美術などの判る人は二三人しかなく、これらの世界的珍寶をてんでろくに見ようもしないのは猫に小判といふものか。俺などもまあその方の口ではあるが、しかしミケランジェロやラファエルの名前位は秀雄から聽いてゐたのでとに角目を皿のやうにして見て歩いたわけだ。美術好きの秀雄にかういふ傑作を一目見せたいものだと思つた次第である。

次に古昔ローマの廢墟を巡ることにする。

(九) 大泉市場の跡。市場といつても商取引ではなく、人民の集合場所である。紀元前五六世紀の頃、カラカラ帝の父王に當る人の建立にかかるといふ。シーザーがブルタスに刺され死の刹那後事をアントニオに託して斃れた場所が即ちここで、その位置もはつきりと標識され、シーザーの遺骸を茶毘に附したところも埋骨したところもある。俺の若い頃アン

トニオがシーザーの屍を抱きつつ名演説をやつた話を聞いたことのあるのを想ひ出して懐しかった。

(十)ローモル寺院。紀元三世紀コンスタンチヌス帝の時代に始めてクリスト教の信仰を許可しその申渡しを宣告したのがこの寺である。ここにもミケランジェロの大壁畫あり。

(十一)コンスタンチヌス帝の凱旋門。

(十二)コロシウム大劇場。紀元一世紀の末ティウス帝によつて建てられた凱旋門の遙か彼方に巨大なる圓形廢墟あり。これ即ちコロシウムの跡である。これはヴェスパシヤン帝によつて建てられ紀元八十年ティウス帝によつて開館式を擧げられたもので、九年間十五萬人の奴隸や罪人を酷使して建造したといふだけあつて一時に五萬人を收容できるといふ莫迦でつかいしろものである。中央に演技場あり、これを圍んで約五十米の高さを五階に分けて觀覽席が作られ、皇族や大官の貴賓席は中央正面の二階に設けられてゐる。回向院國技館のやうな工合で、あれの十倍位の大きさと思へばいい。尤も青天井である點は國技館とは違ふが。柱も欄干も座席も皆煉瓦の上へ大理石を貼り附けたもので、大きな大理石の柱は大

城廢の外郊マ - ロ



39 - ROMA - LA VIA APPIA NUOVA E ROVINE DEGLI ACQUEDOTTI DI CLAUDIO

體舊態を止めてゐる。俺の直覺では、約一萬平方米即ち七八萬坪はあらうかと思はれる。ここで古ローマの暴君は雨天の目を除き連日時は晝夜打通して芝居をやつたり、また裸女や罪人を猛獸に食はせたり、猛獸同志を闘はせたり、所謂グラジャトルの流血試合といふ變態的殘虐行爲をやつて娛樂としたのである。またキリスト教徒の迫害もここで行はれたのである。

(十三)古代ローマの南門。往昔のローマ城門の中、北門は國外へ通じ、そしてこの南門はローマ國內へ通じたので、廢墟となつた門を中心に幅約三間、長さ約四百間ばかりの二千年以前の石疊が残存してゐる。ローマの王者が「世界の道といふ道盡くローマに通ず。」と豪語したのは即ちこの道のことである。

(十四)カタコムベ。地下のクリスト教墓地である。クリスト没後弟子や信者が萬一の事を慮り且つ永遠に保存出来るやうにと地下二十米のところへ二百米四方の大穴を穿ち、大理石・花崗石又は漆喰で五階造りとし、これへ奉拜所・寄合所・祈禱所等を設け、横穴を掘つて大小の墓所としたもので、

すつかり歩けば二三哩にも及ぶといふ位複雑な道がついてゐる。今なら防空壕としてもこの位のは忽ち出来るだらうが、往時としては蓋し大工事であつたらう。我々は坊主の興へる蠟燭の光をたよりに二十分間ばかり歩いてみたが、穴の中の溫度は地上より二十二度も低く量らずもよい避暑をやつた。元來伊太利は日本のやうに濕氣なく、それに最近は天氣續きで乾燥しきつてゐるせゐるか、少しも土臭や微臭なく、非常に氣持がいい。構造が巧妙なせゐるかもしれない。

(十五)セイント・ジョン寺院。規模は比較的小さいが、コンスタンチヌス帝が始めてクリスト教信仰の自由を許可した直後、即ちサン・ピエトロ寺院より二三十年前に出来た寺として名高い。六七十段の階段四つあり、階段及び側面は精巧なるモザイク、天井は壁畫、ここにもミケランジェロの壁畫と彫刻あり。長さ三十六米、幅一米半の大理石巨柱八本は往昔エヂプトより將來したものといふ。折から日曜日のこととて數百人の信者が階段に跪き時に唇をつけて祈禱に専念してゐる。四つの階段の中二つが今修理中なので餘計に混雜してゐる。この階段と彫刻の一部は元來パレスチナにあつたのだ

が、荒廢を恐れてローマに移したのだといふ。彫刻の中にはクリストがピラトに正しき裁判を乞ふところやクリストの十字架を負ふところなどがあつた。

コンスタンチヌス帝の墓所や帝が始めて洗禮を受けた場所もこの寺の中にある。(この帝王の弟コンスタンチヌスは土耳古國王となり東羅馬帝國を統治してコンスタンチノーブルに都した人である。)

この寺はサン・ピエトロ寺院に較べたら四分の一位の小さなものだが、内部裝飾の壁畫や傍らの階段及び側面のモザイクの工合など實に美麗で、その點蓋しローマ第一であらう。帝室・貴族・富豪の信者の寄附によつてかうした贅澤な建造物が生れたわけである。

以上の外、男女混浴の大浴場跡とか東北方部の諸宮殿・諸官廳とか或ひは商店街の景況とか實に多くのものを見たが、三日目の今日これを書きながら考へてみても、既に印象紛然としてとても纏りがつかぬ位である。市中は恰も日曜で、カフェー・煙草店・菓子店・果物店以外は問屋も小賣業者も皆休業してゐたため明確には判断し難いが、大體ローマの市勢

といふものは、それが政治都市・觀光都市であるだけに、貿易港たるナポリに比して特に活氣ありとは感じられず、百貨店・専門店等も二市略々同格で、日本でいへば銀座の三越や松坂屋位の店が最も大きい方である。人口でいへば、ローマの百二十萬に對し、ナポリとミラノが各々九十餘萬といはれてゐるが、この中ナポリは對亞弗利加・亞米利加・南亞米利加貿易と伊太利の一特色たる盛大な移民事業とで顯れ、ミラノは大工業地・農蠶業中心地として勝れてゐるのに比し、ローマは政治と觀光の消費都市だといふべきであらう。(伊太利の大都會には右三市の外に貿易のゼノア、工業のトリノ・ボロニヤ等がある。)

元來ローマの名所舊蹟から商店街までの見物を一日や二日で駆け廻つてやつてのけるなどは甚だ無理なことで、従つてその見聞記の雜駁になつたのも止むを得ない。それでも俺は一行の誰彼にひやかされる位一所懸命に筆を走らせてゐるのである。

二十五日夕、三時間半の餘裕を得たので、同志九人と共に往復百五十キロばかりをドライブして郊外の名所を探つた。

(一)ローマの南東テイポリの町なるヴィラ・デエステ。これは古ローマ皇帝の離宮であるが、その庭園は二千米平方もあらうと思はれる廣大なもので、しかも水の利用に於ては歐洲第一といはれる名苑である。その近くに榛名湖大の池あり、ここから五百米の落差によつて存分に水が引いてあるが、その水流の豊富さは一萬キロ位の水力電氣なら平氣で起せさうな有様である。水流、懸崖絶壁にかかつて瀧となればそこには大理石の彫刻に飾られた瀧口や噴水塔あり、しかもこの種のもの二三百にも達するといふ豪勢さ、その間、日本松・ヒマラヤ杉・檜・檜葉・アカシヤ・夾竹桃等の老樹鬱蒼と茂りあひ、天然の美と人口の妙の相映發するの狀到底筆舌に盡し難く、殊に夏日灼熱の際とて潺湲たる水の音の快さ、なかなか去るに忍び得ざらしめたのであつた。宮殿そのものはさ程の結構ではないが、そこからの眺望は尾張犬山城から濃尾平野を見下すに似て、それよりも更に雄大寛濶なるものがあつた。

(二)水源地の湖水。周圍三哩ばかりの楕圓形の池。丁度前橋から赤城へ登つて、一杯清水の峠の上から大沼を眺めるや

うな氣持だが、周圍樹木多からず、幽邃な感じには乏しい。

(三)更に十五哩進むと今いつたのより少し大きい湖水がある。風景は平凡だが、十年ばかり前、ムツソリーニの命令一湖底に沈んでゐた二千年前の木造戰艦二艘を二年がかりで引上げ、それを歴史・考古學・觀光客引寄せ等の資料として原型のまま大倉庫内に保存してあるのが珍しい。それは一人十リラの入場料を取つて見せるが、二艘共堅緻の木材で作られた同型式のもので、幅最廣部八米位、長さ二十五米位、今の汽船の噸數でいへば百數十噸程度のものかと思ふ。錨その他の船具や食事用の器具などすべて發掘の上陳列されてゐるが、その道具立から見ても、湖水の遊覽船などであつた筈はなく、二千年前には、この湖水が何倍もの大きさで何かの必要からこれを警備するに用ゐたものか、さもなければ、この湖水が三四十哩先の海まで續いてゐて敵と交戦の末往時の一港灣たるこの場所に沈没したものか、いづれかであらう。何しろ面白いもので、俺はこれを見ながら、源實朝が宋に押渡らんと陳和卿に命じて由比ヶ濱に巨船を造らしめたが遂に進水に至らずして砂上に朽ちた話や、栗山大膳が黒田家の禁を

犯して大船を設けた話などを思ひ出した。

この郊外巡りの費用、自動車・案内料・観覧料・飲食代合計七百リラ、一人宛て七十七リラ、邦貨十四五圓であつた。

この日の夜食は、ローマの日本人ガイド藤野氏の宅で日本食を食つた。細君は瑞西人で四十前の年恰好、食事中大いに愛嬌を振撒いてゐた。何しろ東京出發の翌日即ち六月二十日京店で朝晝日本の飯を食つて以來、船中や馬來半島で米の焚き方のなつてゐないライスカレーを食つた外は三十五日間絶えて食はなかつた日本食にこの夜ありつけたわけだから、鯨の鹽焼・海苔・胡瓜もみ・味噌汁・五目めし・握り飯等のうまさといつたらなく、一同徹底的に飽食した。同行のミス相原などが先廻りして大いに手傳つたらしいが、ともあれ異郷にゐて第一に食器それも京都式の粹なのがよくもこれだけ揃つたものと感心した。藤野氏に二十人の御馳走のお禮として五百リラ餘り拂つた由だが、まことに値打百パーセントであつた。藤野氏は洋妻との中に十二三歳のとても可愛らしい男の子あり、それにひかされて日本へ歸る氣起らず、一生涯をローマに終る決心だといふ。ローマ在住の邦人は大使館員二

十人許りの外に約二十人位しかゐない寂しさだが、藤野氏はここに踏み止つて日本館といふ小旅館を經營する一方、邦人來遊者のガイド中最も信用厚き名ガイドとして働き、遠くバルカン半島までその繩張りにしてゐるとのことだ。

羅馬より北進して南佛に向ふ

七月二十六日。晴。列車にて北に進むに連れて幾分涼氣を加へたが、それでもなほ八十三度位。

午前七時四十五分巴里行國際特急列車に乗込んでローマ驛を出發。十一時フーレンスに着き再び例の大理石造りの明朗なるプラツトフォームを見、その食堂で二十リラの晝食を攝る。一時、車窓より世界七不思議の一たるピサの斜塔を眺む。遠望で確とは判らぬが、約二百尺許りの塔が成程相當の角度に傾いてゐる。一時半カララの東方に大理石本場産地の連山を望む。丁度松本邊から、穂高・槍の諸峰を仰ぎ見るやうな氣持で相當峻嶒な感じあり、これらが全山大理石を以て成り、三千年の昔から間斷なく掘出して尙且山の姿に何の變化も來さぬといふから大したもの、實に無盡藏の寶庫とい

ふべきだ。そのあたりからゼノアの三四驛手前までは、越後の米山越えや小田原・熱海間のやうに一方は絶壁他方は大海といふ隘路へ鐵道が敷設されてゐて、風光明媚の地だ。この沿線の海岸は遠淺でないため海水浴には適せぬらしいが、入江などに舟遊する和やかな風景は折々目についた。

三時半ゼノア通過。ここへ船が着いたのはつい五六日前のことなのに、最早一ヶ月も経つたやうな心地のする位、次から次と見物に忙殺されてゐるわけだ。港灣・山容をなつかしく見渡す。ゼノアには驛が三つある。ローマもナポリも一つしかないのここに三つもあるのは一寸信ぜられぬが、事實なのだ。ゼノアから始めて通る線路になる。これから國境を越え南佛ニースに二泊して伊佛國境やモナコを巡り、更に二十八日早朝ゼノアを通過し再びミラノを見る豫定。この度の旅行中伊太利が最も立寄る場所が多く、日數もミラノの一日を加へると滿九日間となる。會の費用の外に小遣と買物で約千リラを費したが、これは邦價の約百八十圓に當る。伊太利は歐米諸國中比較的邦貨の使ひのある國だが、それでも日本に較べて値の高い品もあり、例へば次の如くだ。

- 日本のバット程度の煙草 二十六錢
- 日本のホープ程度の煙草 六十錢
- ビール一瓶(分量日本の大瓶と同じ) 八十錢
- ビールを食堂で飲むと税金やサーヴィス料が加つて一瓶 一圓五錢
- 汽車食堂の簡単な食事 二圓より三圓
- ホテル二食附一泊 甲廿七八圓・乙十七八圓・丙十圓

日伊諸事情の比較

まだミラノだけは見残してゐるが、大體伊太利の全貌として俺が直觀したところを日本と比較して次に指數に現しておく。(すべて日本を100とす。)

土地の肥瘦	七〇
氣 候	一三〇
國民の活動振り	八〇
教 育	七〇
人 間 味	一二〇
人間の裏面	七〇

交際	一五〇	建物の美観	三〇〇
愛嬌	一五〇	同公共建造物	二〇〇
兵隊さんの見かけ	一五〇	飲食店の装飾	一二〇
同内容と實力	五〇	商店のウキンド	一〇〇
國民の強さ	三〇	店内の飾り附	一〇〇
飛行機工業	三〇〇	廣告宣傳の巧拙	二〇〇
自動車工業	三〇〇	驛の建物とフォーム	一五〇
大都會の道路	二〇〇	驛前廣場	八〇
田舎の道路	三〇〇	驛附近の見つき	二〇〇
ホテル	二〇〇	電車	一〇〇
汽車	一二〇	自動車	一五〇
男子の見かけ	一五〇	國民の身長體格	一一〇
同中味の力	五〇	産業	七〇
女子の美しさ	三〇〇	貿易	七〇
統制規律	二五〇	人口	六〇
公德心	三〇〇	國力	六〇
汽車二等の便所	一〇〇	國勢	五〇
ホテルの便所	一五〇		

以上雜然と書き並べたが、以て概略の觀念を得ることが出

來よう。

伊佛國境を越えてニースへ

サボナ驛から西南方ゼノア灣に沿うて伊佛國境に近づきゆけば、大アルプス山脈の餘波は厳しくこの海に迫つて幾多の岬角や狹灣を作り、風景は殆ど一驛毎に佳絶を加へる。國境を中心として、東は伊太利のサンレモ乃至サボナあたりまで、西南はニース・カンヌ・ツィロンよりマルセイユ邊までの海岸は、夏によく冬に適ひ、特に北歐・中歐人士の避寒地・保養地として名高い。北には屏風の如きアルプスの連山を背負ひ、前面南方には波蒼く風靜かなる地中海を控へ、ここに温帯・亞熱帶の樹木が繁茂してゐるのだから、空氣清爽・氣候順和、世界の樂園たるの資格は十二分といふべきだ。

國境で旅券の査證を受けたが、これは頗る簡單にすんだ。伊領では一等に乗つてゐたが、餘り樂すぎるので佛領に入つてから二等に乗り移る。國境には小トンネル數多あり、トンネルを出ては眺める景色の美しさ譬へようもない。ただこの日曇り勝ちでアルプスの遠望のきかなかつたのが遺憾であつ

た。佛領最初の驛がメントン、次がモナコ國の有名な賭博場のあるモンテ・カルロ、かくしてニースに着き、テルミナス・ホテルに投宿す。部屋割によつて豊橋の管醫學士と同宿。十一時就眠。

ニース・ナポレオン街道・佛伊國境巡り

七月二十七日。晴。最高氣温八十八度。日本を出發以來、日數では既に全行程の三分の一に近い旅行を終つたわけだが、幸なことに、南京で二度驟雨に遭つた以外は三十九日間連日好晴に恵まれた。そして今日もまた快晴である。

午前九時一同勢揃ひし、九時半流線型最新式の二十八人乗り大バスに乗つて出發、途中ツィリスト・ビュローロー出張所でドル貨をフラン貨に替へる。一ドル二十六フランの割で十ドル兩替。

ニース市街を東へ東へと進めば總て市内を離れて山道にさしかかる。この山道こそ百三十年前英雄ナポレオンが五萬の大軍を率ゐて伊太利を征伐した際軍を進めながら始めて開拓

した道路、即ち峻路克服を成就せる彼をして「不可能といふ語は愚人の辭書に在り。」といはしめた所謂ナポレオン街道である。ニースから一時間半を疾走すれば、ここは早くも佛伊國境まで五十哩といふ地點であるが、この間俺は専らナポレオンが三十歳の若さを以てしてあの偉業を成し遂げた奇蹟と、異常の行軍難に打克つた勇猛果敢な精神力を偲びつつ飽かず窓外に眺め入つたのであつた。

このあたりの有様を一一、箇條書にしておく。

(一)ナポレオン街道からニース全市を俯瞰する風景は、北陸の杉津驛から敦賀港を、また熱海の最高所からその温泉町を見下す氣持に譬へられるが、街道の通ずる山の高さは前者の三四倍、後者の五六倍もあり、同時にその美しさも到底比較にはならぬ。ニースは人口十五萬、戸數二萬位に見受けられるが、冬の避寒期には人口二十數萬に達するといふ。

(二)山道が次第に峻阻になる頃、ビルフランスといふ半島が見える。鶴の舞ふ姿に似て海中に突出してゐる。突端の巖窟のあたりにはホテル・レストラン・貴族富豪の別荘らしいものがある。いかにも面白い半島である。

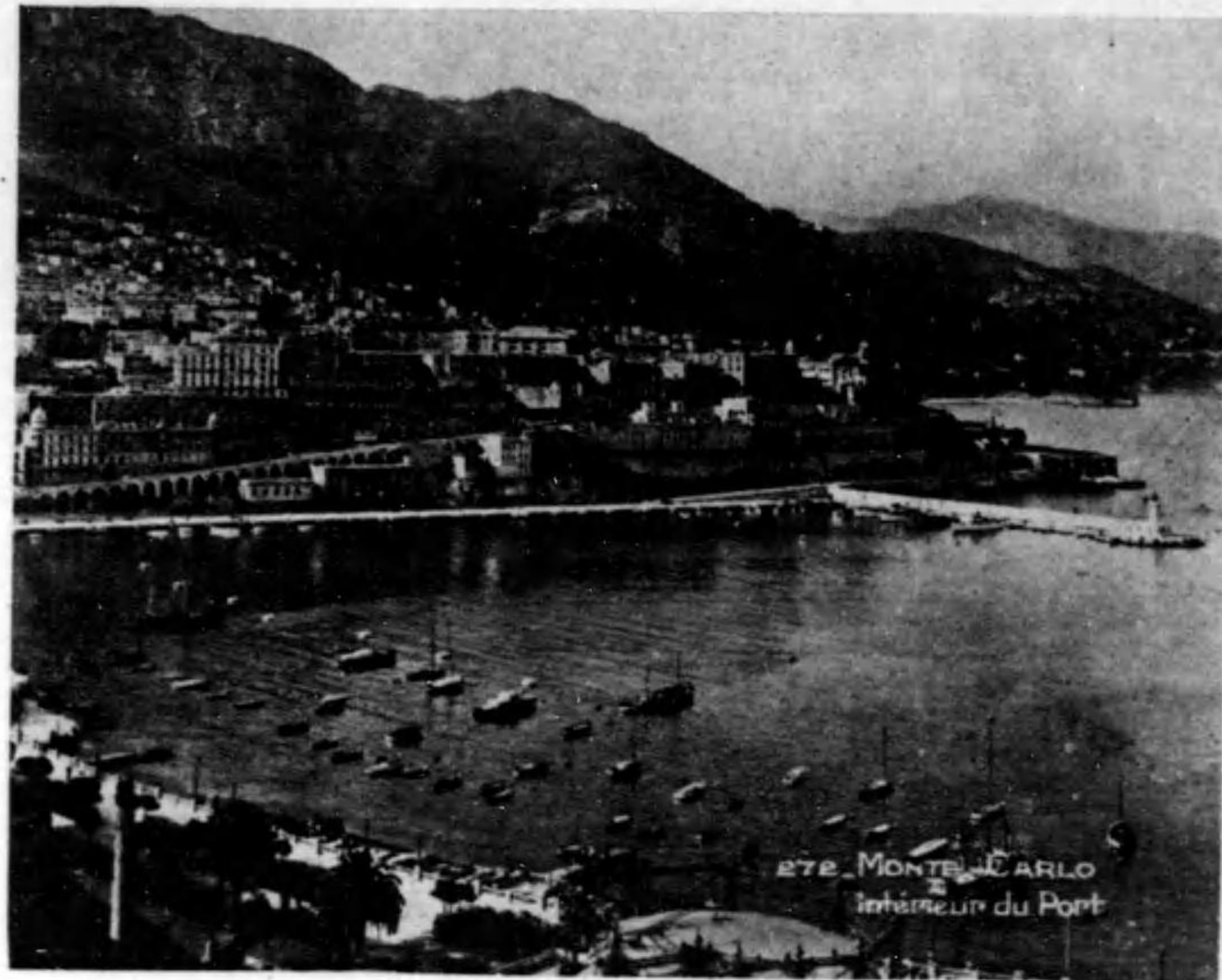
(三)遠く見ると犬の頭に似た形の半島があり、その山の上に堡壘がある。佛語で「犬の首砲臺」といつてゐるところだ。モナコ國は後廻しにして、先づ佛伊國境に至る。アルプス山系が南方地中海に落ちんとする天然の要害が即ちおのづから境界をなしてゐる。國境を通過するには兩國いづれからするも旅券を提示し査證を受けねばならぬし、そこには五ひに物いかめしく軍隊が派遣されてゐる。しかし、佛伊外交關係の風雲を告げる昨今でも、この峠では役人も兵隊も極めて親交厚く大の仲好しであるのは面白い。

このあたりは日本松に似た松樹や橄欖樹がよく茂り、これに椰子や仙人掌が交り、また紅・白・薄桃等の夾竹桃が花盛りであるのもいたく旅情を慰めてくれた。

國境見物のため我々と前後して來た自動車數十臺と共に我々の自動車もここから逆行し、道は海岸に出でてモナコ國モンテ・カルロの町に着いた。

モンテ・カルロとその賭博場

モンテ・カルロの町の北方には約三千尺位の山が岬々と聳



景風岸海のロルカ・テンモ

えて、一寸妙義山中の金洞山のやうな按配だが、その山肌は白紫色を呈し實に美しい。多分大理石か花崗石で出來たものであらう。この山をバックにして前には波靜かな地中海が展げる。何しろ夏涼冬暖、日本的形容なら白砂青松の最たるもの、ホテル・レストラン軒を並べ、海水浴の諸設備も豪華を極め、鎌倉や逗子など素より足許にも及ばぬ。それに道路は完備してゐるし、濱邊は無類の清潔さで、紙屑一つ落ちてゐない。かういふ點にかけて外人の公德的習性には全く敬服の外はない。

この二流レストラン某で晝食を攝る。料理二皿・ビール一本・菓子・アイスクリーム等で四十七法、邦價約六圓。日本なら二圓前後の食事だから彼此物價の相違はかなり大きい。

モナコ國の王宮は相當壯麗ではあるが、何といつても豆粒のやうな小國のものとて格別感興もなかつたが、例の世界一の公開大賭博場はやはり珍しく感じられた。俺は残念ながら袁玄道には縁のない男だが、故郷上州の國定忠治あたりが一行に加はつてゐたらどんなに喜んだことだらう。



モナコ・カールの全景

數番の後には大體負け分を取返したのみか、野上氏などは二千七百フランも儲けた。これが僅か四五十分間のことなのだ。

それから附近の山道や海岸を見歩き夕傾ニースのホテルに歸つた。今日も相變らず暑く、晝は八十七度、夕方は八十一二度で、一時は流汗淋漓たる有様だったが、夜に入つてはさすがに涼風湧き來つて息をついた。

夜二時間ばかり散歩、その際怪しげな映畫を見た。五六人一組で百フランと外にチップ十フランとられた。何事も金さへあればの世の中、南無阿彌陀佛々々々々々！ 午後十時就寝す。

「第十四信」 ミラノのプリンチ
ペ・サヴォイヤ・ホテルにて認む

ニースより引返してミラノに至る

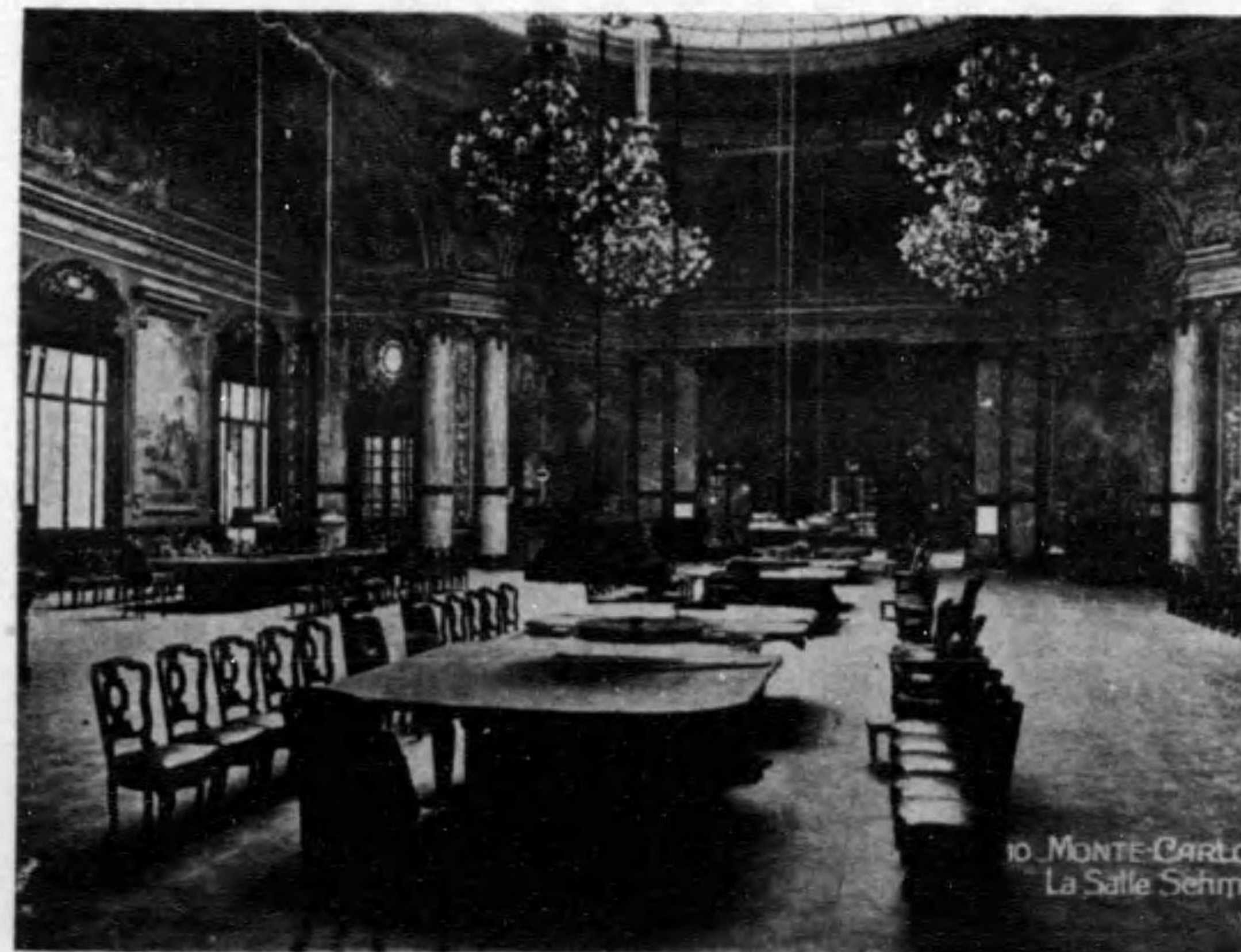
七月二十八日。快晴。

日本ももう土用の入りで暑からうが、ここも八十六七度

扱てこの賭博場といふのは、平坪二千坪もあらうと思はれる二階建の建物で、その豪華なことは王宮にも劣らぬ。前面の廣大な庭園はなだらかな傾斜をなし、所々に華壇の設けがある。モナコの役人や軍人が美装して立つてゐる入口を入つて荷物や帽子を預け、それから愈々賭博室を見る。この賭博はルーレットといふ玉ころがし式のやり方によつて勝負を決するわけで、その玉臺を挟んで大きな卓子が左右に置かれ、一卓には十人分位の椅子が並んでゐる。これを一組として、あつちこつちに幾組もの玉臺と卓子があることは寫眞によつて見られたい。丁半の賽振りに當る人間はフロック・コートを着て、いかにも賭博は紳士道必須の條件だといふやうな顔附きをしてゐる。客が玉を買入れて自分の好む番號へ賭け終ると、フロック・コート氏が玉を玉臺の上で廻し、それが結局ある番號の穴へ落ち込むと、その瞬間に何千フラン・何萬フランの勝負が片附いてしまふ。玉臺はインチキのないやうに毎日三十人の役人が出張して検査するといふ。

我々一行の中、九州直方町の商工會議所會頭野上氏外三四の人々がこれを試みた。最初日本人の旗色は甚だ悪かつたが、

モナコ・カールの賭博場



10. MONTE CARLO
La Salle de Monte Carlo

で相當暑い。今日は高崎成田不動様の祭り日なので旅中の無事を遙かに祈願す。

午前七時半、一同食堂にて勢揃ひ、八時半、佛伊聯絡鐵道で出發、ゼノアを廻つてミラノに向ふ。ゼノアへ廻つたのはそのグラント・ホテルに預けた荷物を受取るためであつた。獨逸の船はナポリに寄航せず、いきなりゼノアまで行くため、今日で三度ゼノアを通るやうな道順になつたわけだ。

車中我々のボツクスヘスコットランドあたりの産らしい北歐美人が四五人乗り込んだ。どれも二三百ポンドもしさうな毛皮をこのむせ返るやうな暑さの中に持ち歩いてゐる。いかに裝飾とはいへ流行とはいへ、またいかに歐米では毛皮を防寒具とするのを恥ぢる趣味があるとはいへ、全く御苦勞千萬な話ではある。それらの婦人達と片言交りて話す。半分は勘で判るから調法なものだ。我々はまた昨夜の怪映畫について大いに語り合ふ。北歐美人には何のことか通じないから無事泰平だが、一行中にも婦人が二人ゐるのに、構はずやつつける。聞けば若い人の中には昨夜三ヶ所もあさつて見歩いた豪傑がゐるといふ。

伊太利對日本の國勢と文化の比較探點表を城内・渡邊・森その他の諸氏へ繪葉書に書く。要するに國勢に於ては、日本の百に對しては伊太利は現に半分位のもの、將來は四十位になつてしまふかもしれない。しかし文化については日本を百とすれば伊太利は百三十位にはいつてゐる。殊に協力心や公德心は彼の方が我よりも勝れてゐるかと思ふ。

十時半國境通過、伊太利側の國境驛ヴェンチミグリアにて旅券の査證に三十分を要し、十一時出發ゼノアを経てミラノに向ふ。正午過ぎ氣温九十度に迫り、加ふるに雨氣を含んだ蒸し暑さで甚だ氣分悪し。

持金の整理をし、佛貨五十五フランをしまひ、伊貨の使ひ残り八十三リラ三フェニーを取出す。國境を越える度に別種の貨幣を用意せねばならぬのは海外旅行者の一と苦勞である。

二時過ぎゼノア着。二十日伊太利見物の往路に預けた大トランクを同地のグラント・ホテルより受取り、待合時間中列車に積込む。

ゼノア・ミラノ間の沿線のこととは前に書いた通りだ。約三百軒の間急行で二時間半を要す。途中、アルプス山脈より分

岐して伊太利全半島蜿蜒々二千軒の脊梁をなすアペナイン山脈最高部の山麓を横斷すること故、全く山嶽展望列車の如き感がある。

このあたりの水力電氣事業は、アルプス山中のそれに亞ぐものあり、従つて重工業・輕工業共によく發達してゐる。即ちミラノ・トリノ・ゼノアを結ぶ三角形地帯は伊太利でも最も工業の盛大なところであつて、ロンバルチヤ平原の農作業と共に、伊太利産業の中心地をなしてゐる。それ故大體が山岳重疊、平地は至つて少いが、人口は割合稠密で、且つ高峻な連山の上に往昔ゼノアやミラノがそれぞれ獨立の侯國をなしてゐた時の防禦として築いた萬里の長城式の城壁があちこちに見受けられるのも興味深い。

アペナイン山脈を過ぎてロンバルチヤ平原に入れば、今度は一吋した丘陵の外には小山一つ見えないといふ全くの平野のままにミラノに達する。ロンバルチヤ平原の廣さは關東平野の一倍半以上凡そ二倍に近い。見渡す限りよく耕作され、米・夏麥・麻・桑・果樹等が栽培されてゐて、この平原の異名なる伊太利の穀倉といふ言葉のいかにも適切なことを肯か

骨鐵大の場車停央中・ノラミ



せる。

四時半ミラノ着。驛前のプリンチペ・サヴォイア・ホテルに投ず。このホテルは人口百萬の都市ミラノとしては二流所かもしれぬが、マネージャーの愛嬌たつぷりな行届いた待遇はゼノア上陸以來七ヶ市のホテル中第一で、この印象深いサーヴィスと位置の良好のために相當繁昌してゐるらしいのは、千坪もあらうかと思える十階建を隣接地に増築中であることでも察しがつく。我々の泊つたのは七階建の方であるが、マネージャー曰く、「今度皆さんの御息方の來られる時にはあの十階建の方もちゃんと出來上つてをりますから、是非また御最良に。」と。萬事がこんな調子で巧みに旅客の心を捕へる伎倆は大したものだ。なほ驛の附近のホテルに、「宮殿」とか「王侯」とか「帝王」とかいふやうな名稱をつけたホテルのやたらにあるのは奇妙な感じがする。

ミラノ見物

夕方五時、一同大型バスに乗つて七時半の黄昏時まで名所舊蹟を巡る。

(一)ミラノ公園。東洋風な閑寂味のある極めて上品な奥床しい公園である。一口にいへば、名園といつた感じ、西洋にまかういふ類の林泉があるかと思ふ。

(二)百貨店。相當な店二三を見る。ナポリやローマで見たのと大差なく、服飾品・雜貨の物價はナポリ・ローマより幾分安いやうに感じられる。蓋し獨逸・佛蘭西・瑞西等の歐洲の中心部に近く、旅客や商人の去來繁きためであらう。

(三)スカラ座。歐洲演劇界一流の俳優の出演する名高い劇場だが、生憎夏期休業中で芝居見られず、一行中の劇通某君や婦人達は失望。外觀は東京・大阪の大劇場よりも貧弱だが、内部は相當豪華なものだといふ。

(四)ドーモ大寺。イタリアの繪葉書によく見受ける通り、五六十本のルネッサンス式尖塔の天に冲するあの建物だ。高さ最高は中央部の三百尺、低いところでも二百尺乃至二百五十尺、壯麗無比で且つ均勢が素晴しくよろしい。間口二百尺、奥行五百五十尺、一萬人の參詣人は樂に入れる。かくして十四五世紀以來その建築美を世界に誇つてゐるわけだ。寺の廣場には大理石造りの大噴水あり、伊太利維新の英主エマヌエ

ル二世帝の馬上大理石像もある。いかにも英氣颯爽たる姿である。

(五)鐵骨造りの仲見世。この寺の近くに、横六十間、縦百二十間位の巨大な鐵骨製三階建の建物がある。下はすべて淺草仲見世式の小賣商店で、横は四間一店で十五軒、縦は四間一店の三十軒が目白押しに竝んで、それぞれウインドなどを美しく飾り立ててゐる。上部はアパートか事務所であるらしい。俄雨でも降つた際にはドーモ大寺の參詣人が一度にこの鐵骨仲見世の雨覆ひを目指して逃げ込むので大賑ひを呈するといふ。

これは市營の建物で家賃収入も相當擧る由。我が東京・大阪あたりの盛り場にもこんな建物を經營したら屹度成功するだらうと思ふ。

この邊がミラノ殷賑街の中心地らしい。

(六)舊城址。ここにある宮殿は六百年前のものだが、別に記すべきこともない。

(七)チミテール墓地。有名な墓地だ。なぜ有名かといふと、一體ミラノ市民は傳統的に墓を無闇に立派に築く趣味を

有ち、人間一生涯を懸命に働く一半の目的は死後立派な墓を立てて永遠の富を墓によつて表現しようとする思想があり、この墓地にはミラノの富豪や名士の墓が巨費を投じた大理石造彫刻物としてまるで野外美術展覽會の如く累々として見渡されるからだ。墓の立派さを一つの名譽と心得るこの習慣は、或ひは却て大理石といふ材料の存在と彫刻技術の發達といふ特長によつて誘致されたものかもしれないが、とに角大した墓地である。中には生前自ら石材や製作者を吟味して作つたものもあるし、佛蘭西あたりの世界的彫刻家の物した傑作も少くない。

しかしこんななまでに墓のことを氣にかけるのはどういふものか。俺にはせれば墓なんて何だつて平氣だといふことになるが、そこは見解の相違で止むを得ない。

(八)チエナコロ・ヴィンチャナ寺。この寺は午後四時が門限なのでこの日は見られず翌二十九日のミラノ出發前の短時間を利用して見た。何故わざわざこの寺を見に来たかといふと、それは、この寺の内にサンタ・マリヤ・デル・グラヂエといふ寺があり、その寺の食堂の中に文藝復興期の伊太利藝



(分部中央)「餐晩の後最」のチンイヴ・ダ

術界の巨人レオナルド・ダ・ヴィンチの壁畫「最後の晩餐」があるからだ。美術に就ては門外漢の俺はこの壁畫についても何とも批判のしてみようがないが、中央にはキリストがゐる、左右には使徒たちが居並ぶ、そしてキリストがユダの陰謀を見破つて、「この中に自分を賣らんとして者がゐる。」と告げた瞬間の劇的場面を現はしたもので、キリスト・使徒・ユダ等の各々の表情がいかにもよく現はされ眞に迫つてゐることは、俺にもはつきり判つて感心させられた。ただ遺憾なのは、壁畫であるせゐるか保存法の行届かぬせゐるか、畫面に相當のいたみあり且つ色彩が明瞭を缺いてゐる點である。五十リラ(邦貨八圓五十錢)を投じて右の壁畫の複製を買ひ、名畫の印象を胸底に疊んで寺を出た。

「最後の晩餐」

ミラノのサンタ・マリヤ・デル・グラチエ寺の食堂に残る世界の寶、日本でならさしづめ法隆寺金堂の壁畫といつた格式のものであらう。この畫がいつ作られたかについては、ダ・ヴィンチ學者の間にも確説はないらしいが、ある研究家は

西紀一四九七年中に完成されたと考證してゐる。大體十五世紀末に描かれたと考へておけばよからう。

寫眞が鮮明を缺くのは原物がいたんでゐるからで、美術史家は既に十六世紀の中葉にこの畫の損傷してゐたことを報じてゐる。そしてそれは油繪具が壁面を密蔽して濕氣の逃げ場がなくなつたのが原因だといはれてゐる。

畫面は滄越の食卓に就いたキリストがユダの變心を知り、「誠に我爾曹らに告げん、我と俱に物食ふ爾曹らのうち一人我を賣すべし。」と儼然といひ放つた一瞬の劇的場面を取扱つたものだ。

ここに出したのは中央の部分で、全體の三分の一弱、キリストの傍の鬚面がユダである。

瑞

西

篇

昭和十二年七月廿九日より
七月三十一日まで

「第十五信」インテルラーケンの ホテル・メトロポールにて及 び瑞獨間列車中にて認む

ミラノより瑞西に入る

七月二十九日。晴。朝のうち餘裕を作つて例のダ・ヴンチの壁畫「最後の晚餐」を見に行き（この時のことは第十四信に書いた）、午前十時半の列車によつてミラノを出發、伊太利最北部の山峽には二三の湖水が湛へられ風景絶佳の別荘地帯をなしてゐるが、そこを過ぎるとやがて瑞西への國境にかかる。伊太利側・瑞西側雙方の國境驛で旅券の査證を受け、かくて瑞西に入れば先づ長さ五里といふ世界有数のシンブロン峠が横はりこれを通過するに二十八分間を要した。シンブロンといへば既にアルプス山系中に含まれた難所であるから、その後の二三分間といふもの、列車は最高峰地帯を縫つて進み、峻嶺の巒や谷間には霞々たる白雪が輝き、また所々に

歴然として氷河の跡が見られた。またこのあたりにはスキー場も多數あり、木造のヒュツテは殆ど無數に建てられてゐる。俺の想像ではユングフラウあたりが最も高いのかと思つてゐたが、事實はシンブロン峠に近いベナイン・アルプス方面にもつと高い山があり、西北へ進むに従つて標高は稍々下つてゐるから不思議なものである。

シンブロン峠とインテルラーケンの間は、最初はどういふ加減か雪山も見えず、窓外の景色は伊太利北部の山峽にも劣るので一時は失望したが、それはほんの暫くの間で、追々アルプス獨特の雪の秀峰はこぞつて英姿を現し來り、その清々しさは譬ふるに物なく、加ふるに明澄無比の湖水あり、水量豊かな溪流あり、かかる大自然に配する趣味よろしきホテルや田舎風旅籠屋や山小屋を以てするのであるから、さすがは山水の國瑞西なることを納得するに足りた次第である。

山都インテルラーケン

伊瑞の國境から四時間餘りでインテルラーケンに到着、メトロポールといふホテルに投ず。インテルラーケンは、ブリ

ンツ湖・ツン湖の二つの横に細長い湖水の中間に位し、避暑地・登山口・スキー場として名高い。避暑は二千尺の高地だから勿論好適、登山は専らユングフラウを目指すもので、これは西南方のモンブランと共にアルプスの二大名峰と稱されてゐること周知の如くだ。スキーは殆ど一年中間断なく可能で、現に下界では酷熱をかこつべきこの日にも途中スキーを携へた幾十組の男女を目撃したことであつた。

インテルラーケンには大小數十軒のホテルあり、中には室敷四五百を有する大ホテルもある。東はプリンツ湖側に、西はツン湖側にそれぞれ停車場あり、兩驛をつなぐ三哩の間、美しき溪流に沿うて市街が形成されてゐる。商店街・ホテル街・カフェー街等を主とし、戸數約四五千、丁度熱海位の町に過ぎぬが、しかし小賣店街は相當立派で、中でも名物の時計店には大きな商人がゐるらしい。俺も時計を二つ買ひ込んだ。今度の旅行には還曆記念に子供や婿から贈られた金時計を提げて来たが、ゼノア上陸の際龍頭を壊し、今日まで十七日間不便を忍んでゐたのをこつと湯を醫したわけである。時計は割合に安く、俺の買つたのは二つで七十數フラ

ンであつた。(瑞西のフランは金本位制のフランだから佛蘭西のフランより遙かに高く、一フランが邦價約八十錢に當る。)同行者中にもここで時計を買つた人多く、中には數千フランの買物をした者もあつた。六月廿一日神戸出帆以來全旅程の三分の一即ち四十二日間になるが、この間一行二十九名の小遣費や土産品買込代を窺ふに、最濫費組は既に三四千圓も使ひ、これに反して節約組はその半分乃至三分の一しか使はない。前者の多くは一行中の青年者である。俺などは正に節約組の一人で最節約者から逆に數へた方が早いわけだ。また一行中には金品の遺失者・盜難被害者も少からずあるが、俺などは注意深いので、自動車のガラスを壊して賠償金十二圓とられた外には別に不慮の損害はない。

話が變な方面へ飛んだが、また元へ返らう。インテルラーケンは天下の避暑地であり且つ相當贅澤な街であるが、瑞西人は深い考があると見えて土産品など決して暴利を貪らず、この點伊太利や南佛とは全く趣を異にし、旅行者として非常に氣持がいい。

夕食後一時間ばかり市中を散歩したが、恰も暑中休暇中の

こととて、歐米各國の登山・觀光・避暑客で大賑ひを呈してゐた。氣温は黄昏時に七十度、夜六十五度、さればこの夜はぐつすり安眠出来た。

ホテル・メトロポールは二流どころの宿だが、小ぢんまりした感じのよい家、またマネージャーやボーイの愛嬌たつぷりのサーヴィスも満點である。一體に外國のホテルのサーヴィス振りを見ると、日本には果してサーヴィスといふものがあつたつけかしらと考へさせられてしまふ位だ。なほこのホテルの庭の美しい花園や入口廣場の亭々たる杉・檜・樅等の大樹もいたく俺の神經を休ませてくれた。

ユングフラウ山へ登る

七月三十日。快晴、夕方雷鳴と共に小夕立あり、氣温降る。午前八時一同勢揃ひ、自動車で東驛に至り、そこから登山電車によつて一萬三千數百尺のユングフラウの山嶺を征服すべく出發する。青壯年の連中今日は殊に喜び勇んでゐる。電車は最初四車連結で、その中洋人が三車に乗り、邦人の我々一行が一車を占めてゐたが、途中で別方面の山を志す洋人の

一車が切離されて三車となり、乗客は合計五十人ばかりとなつた。インテルラーケン發車後三時間餘、最後に長さ六哩のトンネルを通過して終點に着いた。時速十哩として三十哩の距離となるわけだが、實際には紆餘曲折極まりなき有様で進行するのだから、この道程を直徑に見積つたら十數哩位のものであらう。

終點に近い急勾配六哩のトンネルは皆掘りつ放しで、出入口がコンクリート製の煉瓦で疊んであるだけだが、このあたりの青黒い地色に白の斑點又は縞のある石は頗る堅牢だとのことで、決して崩壞の心配はないのだといふ。俺はその石の破片をアルプス記念として拾つて来た。トンネルの三分の一より上はアプト式齒車を以て迂りをとめてあること碓氷峠のトンネルと同様の仕掛である。

とに角、海拔二千尺のインテルラーケンから一萬尺以上の位置にあるユングフラウの展望臺たるホテルの傍まで、颯々として登り行く高山鐵道、そして絶對安全の設備の完成されてゐる事實には俺も深く感動させられた。しかもこれが一八九八年に起工され一九一四年歐洲大戰の起つた年に出来上つ



ウラフグンヌ・スブルア

たと聞いてはひとしほ感嘆させられるのである。この登山電車は定めて國有であらうが巨費と歳月と努力を惜しまず採算の見通しをつけるといふところは瑞西人の一特長といふべきものであらう。この幹線の外に二十哩の支線があるから合計五十哩、一哩五十萬圓を要するとせば工費二千五百萬圓、一哩百萬圓とせば五千萬圓といふ莫大な數字となるが、今から四十年前に、將來アルピニストの大地に増加することを豫見してかかる計畫を立てたことは、實に偉なりとして賞讃せねばならぬことではあるまいか。

一萬二千尺上の展望ホテルから直前のユングフラフ連峰に相對する眺望は勿論世界的の大偉觀であるが、かのトンネルの中間に二ヶ所ばかり開いてゐた横穴より遠く東西南アルプスの連峰や下界を望んだ痛快さもまた何と比喩してみようもないものであつた。

なほ今少しこのあたりのことを書いておかう。

電車の窓から見える沿線の樹木には松・偃松・檜・樅・檜葉の類が多く、また躑躅・アルプスローズ（躑躅に似て濃きローズ色の花）・桔梗・釣鐘草・岩苔・落などが目についた。

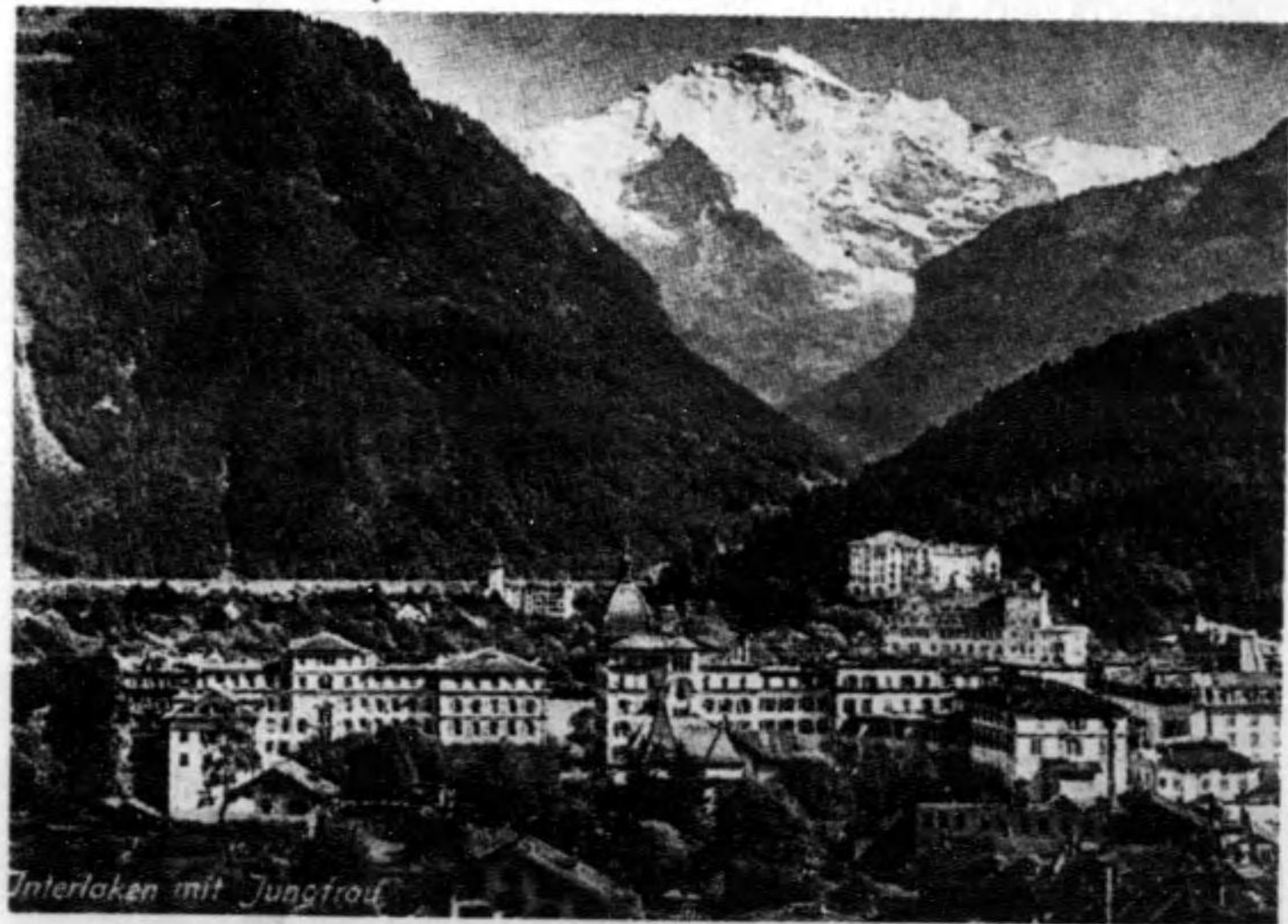
高山植物は無数にあるが、代表的なものは紫色のゼンチヤンと赤と白のエドワイユといふ花ださうだ。

瀧も少くない。雪溪から流れ出る水が三十丈・五十丈と落下する。さまざまの形の瀧が十幾つ數へられたが、中でも美しかつたのは我々が戯れに素麵瀧と名づけたものであつた。

溪流の水は幾分青濁りしてゐる。雪解水のせみか或ひは岩や砂土が溶解されるせみでもあらうか。その急流には岩魚を釣る釣人がいかにも清閑を楽しむが如くに見られる。この岩魚は前の晩ホテルの料理として満喫したが、日本の岩魚や山女といふより鮎に近い味でなかなか美味であつた。形は寧ろ紅鱒に似、色は青黒くそしてそれが凄程澄んでゐる。香氣のないのは惜しいが、横巾の廣い感じは九月上旬の富山縣神通川の鮎を思ひ出させるものがある。

アルプス連峰のそれぞれの山容は千差萬別で、或ひはピラミッドの如く尖り、或ひは櫛の齒の如く平らに凹凸が刻まれ、或ひは一大怪物の如く豪然とわだかまり、いづれも萬古の雪を負うて獨特の偉觀を發揮してゐるが、なほ山上のホテルからの景觀について少し書いておかう。

ウラフグンヌとンケーラルテンイ



Interlaken mit Jungfrau



てにウラフグンユ

展望臺から見ると、赭黒い岩の間に残雪が積つてゐる。岩が三分の二なら雪は三分の一位の割合だ。雪も美しいが岩はもつと美しい。といふのは、この岩は水成岩で赭黒い面に青白い斑點があり、それが強烈な七月の太陽の紫外線に映發する工合が何とも表現できたわけのものではないからだ。展望臺のバルコニーの直下の溪谷は何十丈といふ積雪だが、無論これは萬年雪で、全く奥底の知れない大自然の力量を思はせるものだ。

後方を願れば、ここまで登り來つた道筋の凡そ三分の一が望まれ、また望遠鏡を使へばアルピニストやスキーヤーが豆粒のやうに點在し、しかも男女共に異様なその服装までつぶさに見てとることが出来る。

山上の娯樂は犬楯で、楯を小牛のやうな犬に引かせて斜面を登り、そしてこれを迂り降りる様はいかにも楽しさうだ。犬の役を人間の強力が務めてゐるのもある。

俺は一行の人々が楯やスキーに興じてゐる間に繪葉書を買つて故都への便りを認め、ペンを持つ手を休めては眼前の異様な風景を凝視したのであつたが、その印象の急所をいふ

と、所謂「神々しさ」には缺けてゐるが、さすがに高山だけあつて、山靈の氣は一種神祕的に身に沁み入るを覺えたのであつた。

ホテルの食堂は百人位の客を一度に收容出来る設備となつてゐるが、食事は場所柄だけあつて相當高く、八フラン(スキス・フラン)即ち六圓四五十錢とられ、その外にワインは一本八フラン乃至十二フラン位の相場であつた。

午後二時半、再び登山電車に乗つて歸路に就く。トンネルを出てから往路とは別の線となり、往路より三十分早くインテラレーケン^{Interlaken}の元の東驛に到着した。

途中雷鳴數回の後、一天掻き曇つて沛然たる急雨のあつたのも山岳地帯らしい景物であつた。六時半、ホテル着、その頃は雨も最早小降りになつてゐた。

夜疲れを押して市内漫步、アルプスの寫眞帖などを買ふ。管醫學士と同室で十時半ベッドに入る。

ベルン・バーゼルを経て獨逸に向ふ

七月三十一日。雨後晴。

(山諸のウラフグンユ・ヒンメ・ーガイア)道鐵山登スブルア



午前八時半の列車でインテルラーケンを出發、ツン湖の北岸を行き盡してツンに至り、それよりアール河に沿うて北上、十時半ベルンに着いた。

ベルンは瑞西共和國の首都で人口十二萬、近くはアールの流れに臨み、遠くはアルプス連峰を望む風光明媚な首都である。ここには萬國聯合郵便事務局や日本公使館もあり、またこの町は、スキス北部なるチューリヒの如き大工業地ではないが、時計製造業その他の精密機械工業及び電気機械工業の盛んな土地であり、そして瑞西の中央に近い故を以て政治の中心になつたのであらう。ベルンには下車せず、且つ生憎雨天のため町の大要を見渡すことさへ出来なかつたが、市街は相當立派だといふことだ。

獨・佛・瑞三國の國境にバーゼルといふ町があるが、こゝへ近づくに従つて、耕地や農家がだんだん引き緊つた感じになり、工場・停車場・町家の建物は次第に活氣を帯びて來ることに氣がつく。商家やアパートの建物が三四階位の高さに大體整頓されてゐるのも獨逸流の遣方の影響で氣持がいい。嘗てバーゼルを視察したことのあるといふ同行井上氏の話に

よると、同市は獨瑞兩國に跨り、人口併せて二十萬もあるとのことだが、果して如何。ただいづれにしてもこの町が工業都市として相當なものであることだけは事實である。

午後零時半バーゼンを發して愈々獨逸に入る。獨逸に入ると、すべてが俄然獨逸型と化す。學生でも兵隊でも驛夫でも皆きびきび張りきつてゐるところ、正に獨逸魂の現れで、洵に氣分がいい。それに日獨協定に對する好感情から、獨逸側國境では荷物は勿論旅券の検査さへなく、頗る明朗なものであつた。

列車は本線から離れ、午後四時過ぎ豫定より四十分遅れてバーデンバーデン温泉驛へ着いた。

獨逸・チエツコ
 奧地利・洪牙利篇

昭和十二年七月卅一日より
八月十日まで

「第十六信」伯林のカイザー・ホーフにて認む

バーデンバーデン温泉郷

バーデンバーデンは、獨逸西南部のバーデン州にある有名な鹽類温泉の療養地で、かのチエツコスロバキヤのラヂウム温泉湧出地カルルスバードと共に歐洲二大温泉場と稱されてゐる。一體、獨逸のみならず歐洲には温泉が極めて多く、且つ日常の習性の上からいつても、歐洲人は日本人のやうに入湯を好まぬが、しかし温泉の效能そのものに就いては彼等としても勿論十二分に認識してゐるところであるから、そこで歐洲の温泉場とても虚弱者や病後者のための保養地・痲疾治療地としてなかなか繁昌を見せてゐるのである。

七月三十一日夕四時半、バーデンバーデン驛に下車し、オイロペーシエル・ホーフといふ宿に投じて少憩の後直ちに見物に出掛けたが、その印象は概略左の如くだ。

バーデンバーデンの温泉療養所は州立か市立か知らぬが、

その設備は宏大なもので、且つ浴後の病人に適當な運動を與へる科學的の機械器具などもかなりよく整つてゐる。入浴はホテルのバス式に一人一人入つて一々湯を流してしまふやうな方ではなく、日本風に大きな浴槽に大勢一度に入れるやうになつてゐる。伊豫の道後温泉のやうに下が砂や小石になつてゐる湯もあれば、上州四萬温泉に以前あつたやうな蒸風呂もあるが、殊にその蒸風呂は上へ行く程熱くなるといふ四階段式のもので、病人の容態により適當な熱さのところへ適當な時間を限つて入れる仕組になつてゐるなどなかなか科學的に考案されてゐる。それからリユーマチス治療の湯瀧は縦横、表裏、前後、左右、あらゆる方向に湯を噴出させていかなる局所へも吹きかけられるやうになつてゐるし、その他土耳其風呂式の蒸風呂や浴び湯もあり、なほ醫務室・研究室・休憩室・娛樂室等の設備は全く申分なく出來上つてゐる。

ホテルに一番近い療養所へ入つて一同浴泉を楽しんだが、日本でいへば番臺の番頭兼三助といったやうな役の巨大漢が現れて萬事世話を焼いてくれる。腰巻に鍵をぶらさけて入浴するの所變れば品變るだ。浴後三十分ばかり内部各室を廻

り歩いて説明を聞いたが、その大要は前にいつた通りだ。

一旦宿へ歸つて夕食を攝つた後、公園の音楽堂で音楽を聴き、次にカジノの賭博を見る。賭博はこの土地だけで許されてゐるもので、北部獨逸では一切禁じられてゐるといふ。一行中の袁玄道病者はここで深更まで丁か半かに耽つたらしく、翌朝八時半の出發に、朝飯も食ふ暇なき寢呆け眼でやつと間に合つた者も數人ゐたらしい。

バーデンバーデンは別府や熱海同様の純温泉郷で、人口僅か七萬の小都市ではあるが、街衢といひ建物といひ公園といひ、日本の七八萬位の都會のそれとは比較にならぬ位立派である。そして、ここへ泊つたのは土曜の晩だつたせゐもあるが、浴客頗る多く町は夜更くるまで賑つてゐた。

この日夕食の時、山崎醫學士の主唱で八人の同志を募り、明日フランクフルトへ行く一行と別れて自動車を備つてハイデルベルヒの古城や廢墟を訪ひ、そして一行とフランクフルトで落合ふといふ計畫を立て、木下支配人の諒解を得た。俺も無論賛成者の一人である。

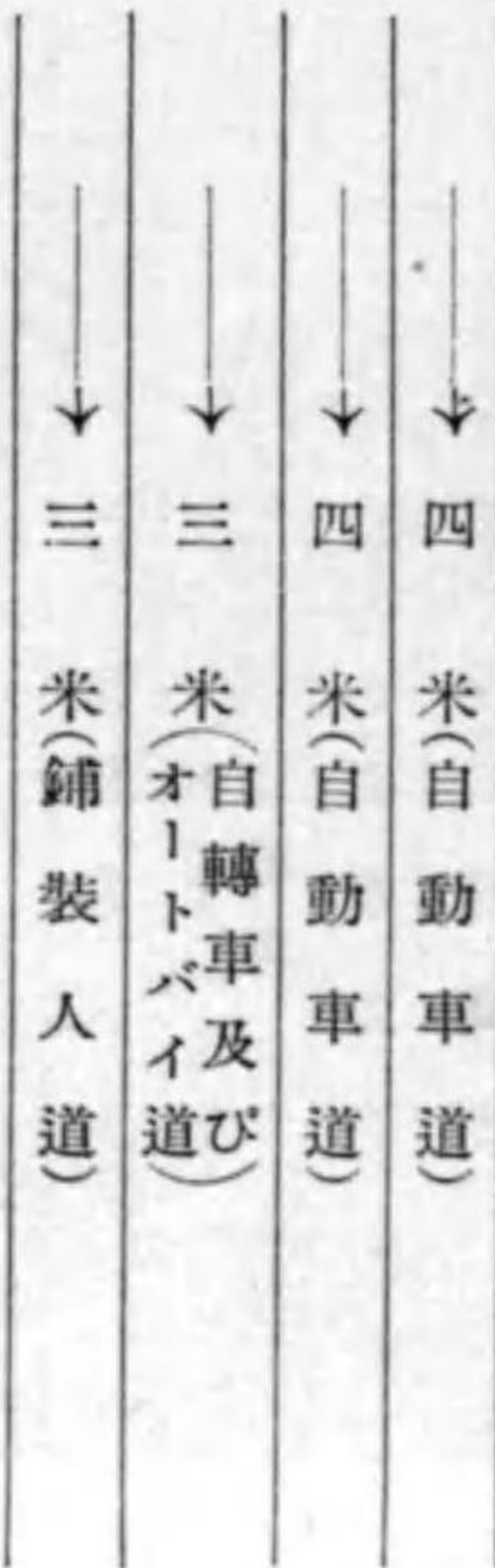
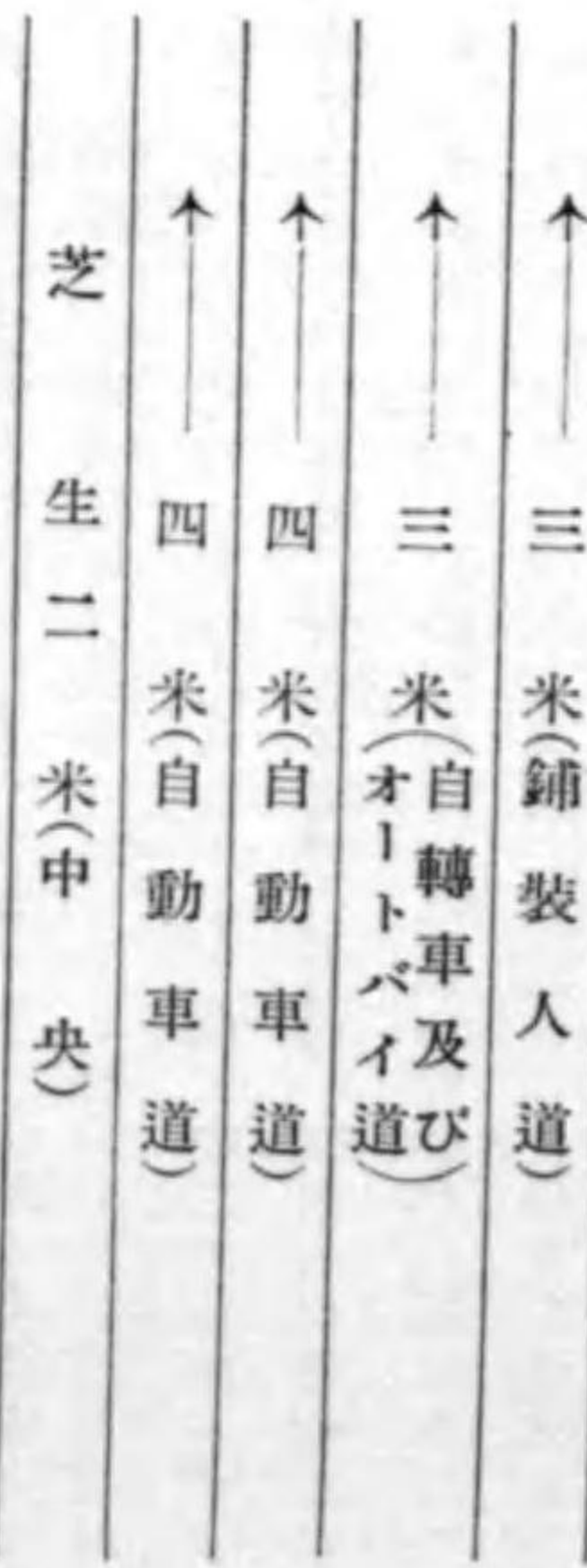
ヒットラー道路

八月一日。晴。

フランクフルトへ向ふべき一行より一時間早く、午前七時四十分、我々八名は優秀堅牢な獨逸製バスに乗つてバーデンバーデンを出發。山崎醫學士が發起人兼團長といふ格だ。

我々の疾驅して行くのは、坦々砥の如き帝國自動車専用道路といふ道路で、即ち世人の特にヒットラー道路と呼んでゐるところのものがこれだ。ところでこの道路は一體どんな工合に建造されてゐるか、これを次に示しておかう。

幅員約三十米。それが中央の芝生を境界として左右二道に左圖の如く分たれてゐる。(矢の印は交通の方向を示す。)



中央の芝生は左右を區別する目印とするもので、また自動車道・車道・人道等の境には黒い太線が劃然と引かれてゐる。自動車道が左右各二筋づつあるのは、一つは他の自動車を追越す急行車用とされ、また他方の道路に故障があつて修繕を要する時などにも用ゐられるのである。

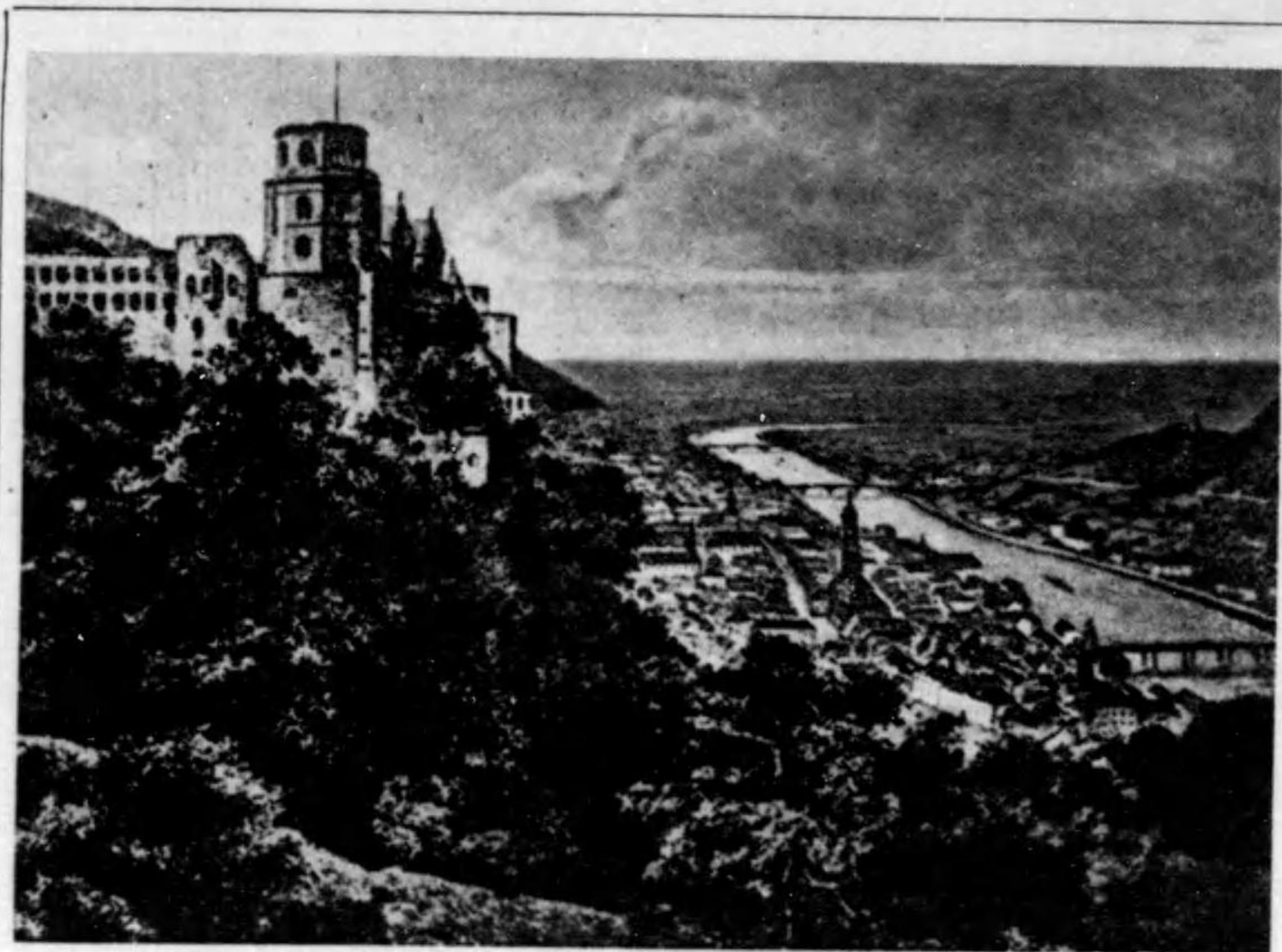
道路は思ひ切つた一直線を以て貫かれ、重要都市であらうが何であらうが、直線からはづればどしどし分岐道委せにされてしまふ。しかし分岐道と雖も、歩道がないのと幅の狭いのが幹道に劣るだけで、立派なことは随分立派だから、別に不便はないのだ。

二キロ乃至四キロ毎に縦の道路を横に突つ切る自動車道及び歩道がついてゐるし、歩行専用道路は半キロ乃至一キロ毎に跨橋によつても通じてゐる。

道路の兩側共、ここは起點から何キロの距離にあるかといふことを現す里程標が、實に一キロの十分の一毎に立つてゐる。それからまた、ガソリン販賣所や横斷道や分岐道を豫知せしめる大標識が、大體その一キロも二キロも先きに極めて判り易く示されてゐるのは、日本のそれが實體の直前にしかも不完全にしか掲出されてゐないのに較べると非常な相違である。尤もこの道路を走る自動車のスピードは日本での二倍以上だから、一キロも二キロも先きに標識の出でゐるのが當り前で、さもないとつかり通り過して役に立たぬことにならぬとも限らぬのだ。

ガソリン販賣所は自動販賣式で賣手はゐなくても買へるやうになつてゐる。

かういふ種類の道路は伊太利に二三ヶ所あつたし、南佛にもないではなかつたが、しかし獨逸のこの道路程徹底したものはないのだから、これこそは道路として正に世界的の大物といへよう。スピードは少くも時速五六十キロ、先づ七八十キロが普通だ。運轉手の話によると、獨逸の自動車なら百キロは樂に出るが旅客用車のスピードは八十キロと制限



光風のヒルベルデイハ

されてゐるので、七八十キロで我慢してゐるのだといふから鼻息が荒い。

途中は、四百米位のなだらかな丘陵がしばらく右手に見渡された外は大體が變化乏しき風景で、なほ、人口四五萬の小都會を二三度通過したかと覺えてゐる。

古都學都ハイデルベルヒ

午前十一時目的のハイデルベルヒに到着。同市はネツカール河畔に位する人口八萬に過ぎぬ小都會ではあるが、十四世紀に創立されたハイデルベルヒ大學を以て名高くまた十二世紀の頃當時の大侯國の大名によつてこの丘陵に築かれ、要害を利して數回の戦ひにも陥落しなかつたといはれる名城の古跡などもある。總じていへば歴史の町・想ひ出の町・詩の町であり、周圍の自然もこれに相應する典雅な趣きを見せてゐる。

丘の上には博物館があつて、獨逸古來の武器が數々陳列されてゐる。またその地下室には有名な「ハイデルベルヒの大樽」がある。これは四萬九千ガロン入りのビーヤ樽で、昔の

大名が臣下に振舞ふ麥酒をこの中へ貯藏しておいたのだといふ。この種の大樽はなほ大小數個轉がつてゐた。

ハイデルベルヒ大學の校内へも入つて見たが、折柄暑中休暇中とて授業は休みで學生の姿もなく、ただ物寂しくがらんとしてゐた。

再び城址のある小丘に登り、とあるレストランへ立寄つて小憩したが、つくづくと見渡せば、古都・學都ハイデルベルヒの静けさは、我々旅人の腸に沁み入るのであつた。

午後四時この町の見物を終り、再びバスで北方へ向つて出發、夕六時フランクフルトに到着し、ホテル・カールトンに入つてバーデンバーデンから直行の一行と相會した。

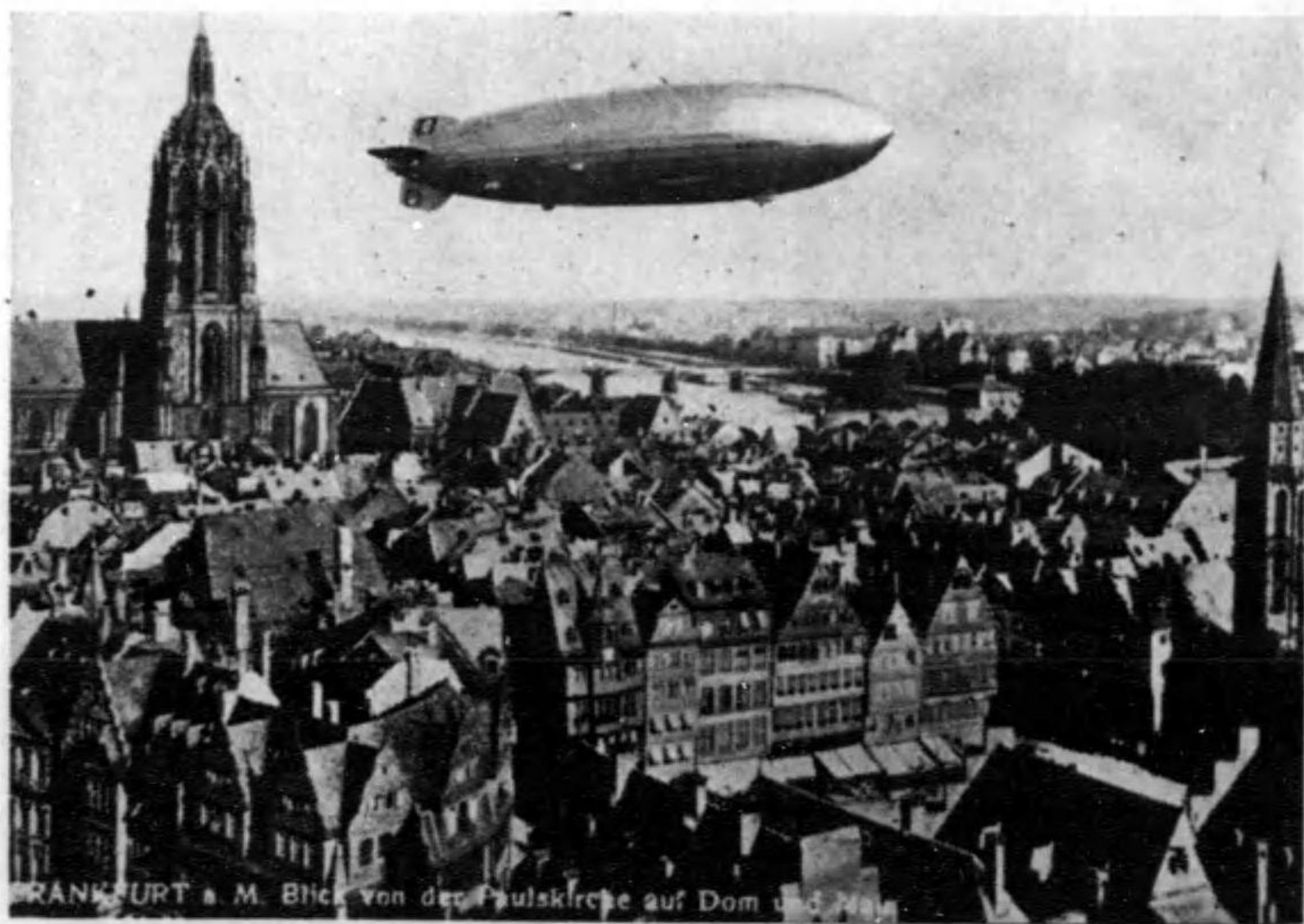
フランクフルト見物とライン河岸巡り

八月二日。晴。

午前九時、三十二人乗りの大バスに乗つてフランクフルト見物に出掛ける。

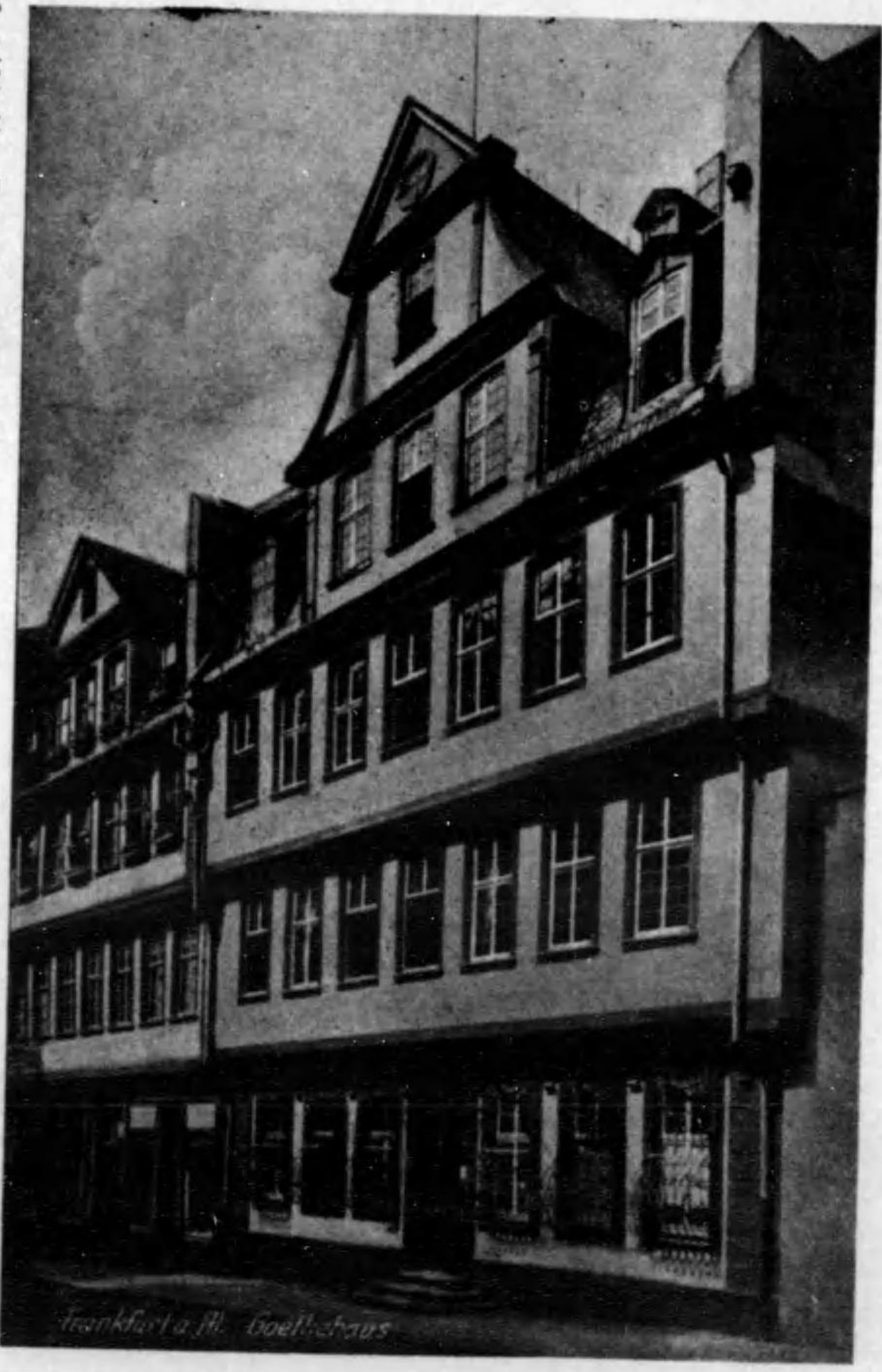
この町はライン河の支流マイン河に跨り、人口五十六萬を有す。古來學藝・文學・美術の都市として名高かつたが、十

望展のトルフクンラフ



九世紀以降重工業を始めとして各種の工業大いに勃興し、最近では優雅な古都としてよりは寧ろ西部獨逸の工業都市として相當の地位を占めるに至つたのである。

ホテル・カールトンはマイン河畔屈竟の位置に立ち、そのあたりにアカシヤや鈴懸の美しき並木あり、河は濁流ながらそれを越えて對岸の高臺を眺める風景亦凡ならざるものがある。一體フランクフルトは日本でいへば京都に比すべき匂ひのする都市であるが、殊に町中に、樹木といふよりは寧ろ森林の多いことが、何ともいへぬ和やかな空氣と落着いた美觀を添へてゐるのだ。



フランクフルトのゲーテの家

最初見たのはフランクフルト大學・博物館・植物園・公園

等であるが、この中植物園の一部に宏大な温室があつてあらゆる熱帯植物を栽培してゐたのが印象に深い。

世界的に有名なフランクフルトの染料會社の事務所は、間口百間、奥行六十間もある八階建の大ビルディングをそつくり使つてゐるが、その延坪三四萬坪もあらう。工場は市の郊外にある由で、これは見なかつた。

それからオペラ座や小賣小店街などを見たが、その邊の裏通りに獨逸の國民詩人ゲーテの家がある。彼は一七四九年八月二十八日、今では古色蒼然たるこの煉瓦に巻かれた三階木造建の家に誕生して人となつたのである。ゲーテの家から四五丁離れた商店街の中に、ゲーテを戀慕した町娘の家もそのまま保存されてゐるが、これは俺のやうな文藝趣味に乏しい男にとつても一寸ほほ笑ましいことでもある。

市中の見物を終つてからバスは郊外へ出て、四五萬坪もある軍用飛行場や、獨逸産業の中心地たるライン河の右岸を約三時間ドライブした。このあたりには小麥と砂糖大根の畑が多い。ドライブの途次、人口十五萬を有するマンハイム商工都市などをも通過した。

この邊のライン河は、下流とは違つてあまり大きくなく、河幅は隅田川の二倍乃至三倍位だが、水流は急だし水量も亦多いので、二三千噸位の汽船はほとんど漕上する。ラインの對岸たる左側には四五百尺位のなだらかな山丘が連り、その頂には所々に古城址が望まれる。右側はすうつと平原をなしてゐる。ライン河の河中には小さな島や巨岩があり、そのために眺望の細かく豊かに變化するところが面白い。

河畔にあるクロネといふレストランで古い葡萄酒を飲ませるといふので行つてみたが、メニューに書きつけられた一樽の値段は次のやうな調子であつた。(一マークは邦價一圓四十三錢。古いのが最も高いと極つたものではなく、古くて出来のいいのが最も高いといふことになる。だから比較的新しいのにも高いのがある。)

- 一八六八年製 一八マーク
- 一八二五年製 二五マーク
- 一九二一年製 四〇マーク
- 一八九三年製 六五マーク

なほこの家では望みによつては五百年以上経た葡萄酒さへ

飲ませるさうだが、五百年前はおろかなこと、十九世紀代のものでも我々には手が届かぬので、俺は僅かに十年前の醸造にかかる七マーク(それでも邦價十圓)のものを一本飲んでやつと話の種としたが、實は格別美味だとも思へなかつた。毛唐の香平が葡萄酒の古さを無闇にかたじけなくなるのは、我々が灘の生一本に移つた酒樽の木の香の魅力を云々するやうなものであるらしい。

歸路は北廻りして、バーデンバーデンに次ぐ獨逸の温泉場ウイスバーデンの繁華な市街を瞥見した。

今日のライン河岸の視察は、まだ到底十分とはいへぬもので、我々の見たあたりから更に一二百哩下流にこそケルン・エツセン・マインツ等人口六七十萬乃至百萬内外の眞の重工業・理化學工業地帯が展けるのだ。獨逸は歐洲大戰の結果アルサス・ロレーンの二州を佛蘭西に割讓して、その地方から出る鐵と石炭を失つたが、しかし今いつた獨逸領工業地帯にはまだ豊富に鐵・炭があるし、不足の分はルクセンブルグや白耳義や西班牙等から輸入して大いに重工業の再建設に努めたが、殊に數年前佛蘭西軍隊がライン河岸より撤退する

や、重工業は素より理化學工業亦急激に復興し、殊に染料・藥品などの製造工業は歐洲戰前に決して遜色なき程度に到達してゐると聞いてゐる。日程の都合で、この新興獨逸の心臓部へ廻り得なかつたのは何より遺憾であつた。一行中の井上氏や西山老等の工業家は、伯林から一行とは別行動をとつて右の工業地帯をゆつくり視察するといつてゐる。

二日午後フランクフルトから列車で伯林に向ひ、午後十時伯林着、カイザー・ホーフといふ宿に落ちついた。

「第十七信」伯林のカイザー・ホーフにて認む

伯林 見物 A

八月三日。伯林日中最高の氣温八十二度。

前夜伯林に入つて投宿したカイザー・ホーフは、この市一流の大ホテルで、且つ全伯林の中心街たるウンテルデンリンデンに程近く、従つて附近にはヒットラー總統の官邸を始め諸官衙・諸銀行等の建物の櫛比するといふ好位置に恵まれて

る。

この日午前十時、四十人乗りの大型バスによつて市中見物に出發。先づウンテルデンリンデン街の外務省・司法省・大藏省等を始め多くの官廳・銀行や英國大使館等を巡覽したが、由來この大通りは、東の方獨逸先帝カイゼルの宮殿から西の方普佛戰爭の勝利を記念する凱旋門に至る延長二哩餘に及ぶ大街道であるから、見るべきものも甚だ多い。凱旋門の彼方には帝國議事堂の高層建築の天空に聳ゆるあり、庭前には普佛戰爭の立役者ビスマルクの銅像が例の雄偉な相貌を以て通行人を見下してゐる。この附近一帯は快適な大廣場をなし、普佛戰爭記念塔やモルトケの銅像や噴水などがあるが、記念塔といふのは伯林第一の高塔で、内部の三百の階段を登りつめれば、以て全伯林を俯瞰することができる。伯林の人口は舊東京より約百萬多いが、その地域の廣大さに於ては、舊東京の二倍もあらうかと直覺された。四圍の郊外は大工業地帯で大小の煙突の林立するを望見したが、就中西方には大工場が多いらしい。塔の直下にはティーヤ・ガルテンといふ公園が横つてゐる。幅一哩餘、長さ三哩に達する樹木鬱蒼た

る大公園である。

記念塔を降つてから、今いつたティーヤ・ガルテンをドライヴしたが、カイゼルの建設にかかるといふプロシヤ時代からの獨逸の國王・皇帝・文武功臣の銅像がづらりと實に七八十も竝んでゐたのは最も印象的であつた。銅像は十字型の通路の兩側に半町に一個宛位の割で建てられ、且つ整然と時代別にされてゐる。蓋しカイゼルは八百年間の獨逸の大人物をこのところに網羅して國民の眼に觸れしめ、英雄崇拜の觀念と獨逸魂の涵養に勉めたのである。文武の功臣には、肥大漢もあれば骨と皮ばかりのもゐるが、いづれも精限り根限り國家のために盡瘁した人々のみである點は、我々通りすがりの旅行者をしてさへ、襟を正さしめるものがある。

大使館のお茶の會

午後一旦宿へ歸つて服を改めて後、總領事館を訪問して挨拶を述べ、次で四時半、かねてから招待を受けてゐた大使館官邸の武者小路大使主催のお茶の會へ出席する。來會者は我々一團の外に大使館・領事館の館員や日本人會の代表者や正

金・三井・三菱・大倉商事等の各支店長や英國の戴冠式・佛蘭西の博覽會を見物に來た序に伯林を訪うた官吏・實業家をも加へて合計六十名、中には毛色の變つた久米正雄氏の顔も見えた。

名刺交換の後、武者小路大使は立つて、獨逸最近の政治經濟狀態と歐洲戰爭以來の外交の變遷を述べたが、その要旨は次の如くであつた。

「ヒットラー政権の國內統一力は實に確固不拔で、あらゆる方面に着々民族發展の旺盛なる意氣を示してゐる。元來獨逸は物資の乏しい國柄だが、政府も國民も協力一致涙ぐましいばかり困苦に耐へつつ最善の努力を傾注した結果、漸く最近の復興狀態にまで達し得たのであつて、この堅忍持久の精神に鑑みれば前途の雄飛もおのづから豫斷するに難からず、他日歐洲に於て英國と覇權を争ひこれを屈服させる日の來らんことも單なる空論とはいへぬものがある。この點佛蘭西とは國民の覺悟が根本から違つてゐる。獨逸の存在は佛蘭西にとつては絶えざる一大脅威である。」云々。

なほ大使館・領事館々員や日本人會代表者から商工業・貿

易等について専門的な説明があり、最後に我々旅行團の木下支配人外二三の者の謝辭があつて會を終り、別室で武者小路大使夫人の配慮による日本食の饗應を受けた。刺身・天婦羅・すし・五目等に日本酒まで現はれ、一同の喜びやうは一通りではなかつた。かくて、深く厚意を感謝しつつ夜七時散會した。

ホテルの附近で二時間ばかり映畫を見たが、俺の得意の六感神經を以てしても話の筋が呑み込めず、結局邦貨約一圓の入場料を棒にふつて、十時ホテルに歸つた。

シーメンス電機工場を観る

八月四日。晴後小雨。

伯林總領事と日本人會の幹旋で、一般には參觀不能となつてゐるシーメンス電機工場を視察することになり、例の四十人乗りバスによつてホテルを出發、午前十時から午後四時まで同工場に在つて、つぶさにこれを見學した。

シーメンス電機工場は伯林の西南部工業地帯の中心地であり、敷地約六平方哩、五階以上七八階の工場多數あり、總延

坪五千坪乃至一萬坪といふ工場も少くない。我々は各部門の工場全部を巡覽したが、技術的な智識のない俺には残念ながら具體的にその製造工程を理解することは出来なかつた。ただ、獨逸の有つ科學の力が存分にここに發揮されてゐることを感じ、その點門外漢の俺と雖も一種嚴肅な氣持を味はつた。最後に製品の陳列場があつたが、いづれの機械も電氣應用の精密なもので、火災報知機・泥棒報知機・最新式の電話・最新式の電氣時計、その他新發明品・新特許品が山の如くに並べられてあつた。

シーメンスの初代は今を距る九十年前の一八四七年、伯林の西郊外へ小さな工場を建てたが、創業當時の職工は驚く勿れたつた三人、それが二年後には二十五人となり、以來、破竹の勢ひを以て擴張に擴張を重ね、現在では伯林工場だけでも七萬一千人の従業員あり、歐米各地の支店や分工場のそれを合計すれば實に十四萬八千人の大世帯を有する大會社となつた。工場の中には記念館があつて、會社の沿革などが一目瞭然と判るやうになつてゐる。また記念館の前には容貌魁偉しかも溫情の横溢を覺えしめるシーメンスの銅像がある。

工場敷地内には電車や鐵道が敷設されてまるでそれ自體一都市をなすの觀があり、また従業員の幸福増進施設としては樹木の多い公園や堂々たる運動競技場があり、特に彼等の住宅は近代式明朗なる大アパート十數棟を以てこれに當て、その周圍には美しき花壇その他の綠地々帯あり、娛樂機關も遺憾なく具備されてゐる。

最後に、場内の一隅には歐洲大戰に従軍して戦死した三千の従業員の共同墓地のあつたことを記しておく。

伯林見物 B

シーメンス工場を出ると、間近くにオリンピック大會場跡があるので序に見物したが、スタヂヤムは鐵筋コンクリートの巨大な建造物で、約七八十尺の入口の門には數本のナチスの大旗が風に靡き、その上にオリンピックの表徴たる五輪の塔が聳えてゐた。一行中の年若き人々は我が日東選手の活躍したのはこのところであつたかといふやうな面持で感じ入つてゐるが、俺はスポーツには一向趣味を有たぬので、ただその豫想以上の大規模な點に驚いたのみであつた。ここは今で

は、スポーツ大會や國家的大會の會場として使用してゐるさうである。(オリンピックの會場としては、歸路にロサンゼルスのもも見たが、構造ではロサンゼルスの方勝り、廣さでは伯林の方幾分上位にあるやうに思つた。)

伯林へ戻る道すがらの右手に、労働者のための新住宅地があるのを注意深く見た。これはヒットラーの社會政策の一つの現はれで、労働者の家計と健康を保護するためここに瀟洒たるアパートを建造して、出来るだけ安い家賃で貸してゐるのである。一室のもの、二室・三室のもの等種々あるが、風呂付き二室続きで一ヶ月三十五マーク、同三室で五十マーク位の賃貸料で、一般に比し半額以下の安さだといふ。(三十五マークは邦貨約五十圓、五十マークは約七十圓)日本の家賃に較べれば安くはないが、高物價の獨逸に於てはこれでも非常に安いのである。またこの官立アパートの傍には特に婦人と子供のための公園もあり、ヒットラーの社會政策がいかに健全なものであるかを頷かしめるに足りた。

伯林飛行場

伯林最大の民間飛行場たる伯林飛行場を見る。この飛行場は現在四平方杆の廣さを有つてゐるが、目下更にこれを二倍の八平方杆に擴大すべく大工事を急ぎつつあるといふ。飛行機發着場の二階は一大展望室をなしてゐるが、これは航空思想普及のために設けられたもので、中にはスマートなレストランがあり、獨逸人はここでビールを飲みながら飛行機の離着陸の際に拍手したり、廣潤な風光に目を遊ばせたりして數時間の清遊を試みるといふ寸法なのである。

飛行機の中、國內用は八人又は十二人乗だが、英・佛・土耳古・バルカン諸國行きの國外用は十八人から二十四人或ひは三十人から三十二人乗りの大型なものを有つてゐる。また伯林から一二百哩の近距離都市への飛行には特に二人乗り・四人乗り・六人乗りの豆飛行機を以てしてゐる。展望室から眺めると、これらの各種の飛行機が、その赤・青・黄・紫・褐等それぞれの色彩に塗られた兩翼を亂舞させて飛び來るもの、飛び去るもの、引きも切らぬ有様である。

展望室には、各方面へ向ふ飛行機の出發時間表が出てゐるが、これによると、朝六時半から七時半までは五分間乃至十



場行飛央中林伯

分間に一臺、それ以後は三十分間に一臺位づつ出發、着陸もこれに準じてゐるから、なかなか出入が多い。
この日は丁度日曜だつたためか、四五百人もの獨逸人がこの展望室のレストランでビールの滿を引きつつ笑ひさざめき、旅客の中に日本人や伊太利人の姿を見かければ直ちに手を舉げて萬歳を唱へたりしてゐた。(この飛行場を見物したために、遊意大いに動き、翌日俺を加へて四人の有志が遠くウ・キーン・ブダベストへ飛行旅行を試みることになつたが、それについては後に記すこととする。)

百貨店カールスタフ

飛行場からの歸路、伯林南部の職工・労働者住宅街の中心にあるカールスタフといふ伯林第一の百貨店を視察。この店は十二階建總延坪一萬坪といふ大きな店だが、建築材料は粗末であり、商品も土地柄か低級なものが多い。しかし店内は相當の繁昌を見せてゐた。

カールスタフが十二階建であるのは伯林としては稀有で、帝政時代高層建築の認可されなかつたために、中央の股賑街

でも四階乃至六階の高さに統一され、洵に整然たる美觀を呈してゐる。高層建築はすべて近來のものなのである。

伯林の百貨店は一流四五軒、二流數十軒あるが、大部分がユダヤ人又はユダヤ系の者の經營なので、ヒットラーのユダヤ人排斥主義に壓迫されて特別の重税を課せられつつあり、従つて商品も勢ひ高く賣らねばならぬので、いづれもかなりの經營難に陥つてゐるらしい。ヒットラーのユダヤ人追放は徹底的な厳しさのもので、それによつて獨逸全人口の百分の一を減じたといはれる位であるが、それでも未だ尙、伯林だけでその人口の一割五分以上に當る六十萬人のユダヤ人若くはユダヤ系の者が残存し、獨逸全體としては實に六百萬のそれが居るといふことである。

伯林見物 C

新聞社街を通る。獨逸の新聞はナチスに統制されて盡く政府黨の新聞となり、ヒットラー主義に對する批判は一切禁止されてゐるのみか、ヒットラー及びその一黨の禮讃記事の滿載に終始し、藝術方面の批判さへ自由を失つてゐるといふ狀

ツープラフ・ルメダツボ・林伯



Berlin Potsdamer Platz

態なので、どの新聞も似たりよつたりの感じのものとなり、チャーナリズムの興味などはまるで失はれてしまつてゐるといふ。しかし、この位統制を強化しなければ國策の斷乎たる遂行は不可能なのだから、これも亦止むことを得ない成行きといふものであらう。

獨逸國立銀行。これは帝政時代に建てられた立派な建物だ。市會議事堂・裁判所・警視廳・アレキサンダー驛。アレキサンダー驛は丁度新宿驛のやうな位置にあり、地下鐵と鐵道の數線交叉の雜沓を見せてゐた。附近のヘルティール百貨店。これもユダヤ人の經營、カールスタフに比してかなり高級なものまで取扱つてゐる。評判によると、この店も漸衰に傾いてゐるといふ。更にこの附近に十四世紀頃の建立にかかる宮殿あり、民家とびつたり接觸して立つてゐる。内部には、皇帝が外國使臣を引見する室、すべての裝飾調度が純白な室、使臣の待合室、位階勳等を授與する室、フリードリッヒ大帝八方睨みの騎馬像のある室、王冠を飾る室、その他食堂・音樂室などあり。また大廊下の向うにはカイゼルが民衆に對して宣戰の布告を發表したといふバルコニーが見え、歐洲大戰

勃發當時のカイゼル華やかなりし時代が偲ばれた。さういへば、獨逸舊皇室一族の肖像畫や露西亞皇帝からの獻上品たる寶石燦然たる二つの大時計や近衛兵の立派な控所などを見るにつけても往時の全盛の程がつくづく回顧されて、いたく興味をそそられたのであつた。八月四日の見物はこれで終了。

復興獨逸最近の政治經濟狀勢

(一) 内政上の情勢と對外的態度

フリードリッヒ大帝の建設した獨逸を第一帝國とすれば、カイゼル・ビスマルクの偉業によつて統一された獨逸は第二帝國であり、歐洲大戰後暫くの間共和國であつたものが一九三三年ヒットラーの天下となつて以後の現在の獨逸は、即ち第三帝國といふべきであるが、この第三帝國は抑ゝいかにして成つたのであらうか？

獨逸は歐洲戰爭の結果帝國領土の一部と植民地の全部をヴェルサイユ條約によつて失つた外、莫大なる賠償金を戰勝列國へ支拂ふ約束をしたが、爾來十五ヶ年間に獨逸の支拂つた金品の數字は實に六百億金貨マークに達し、この金額はまた

經濟學者の見方によつては千億マークに及ぶとも云ひ得る位であつたのだから、いかに獨逸が貨幣及び物資即ち國富を根こそぎ持つてゆかれたかが判るであらう。かくて戦前の一等國は俄然三等國否四五等國に陥落した。一九三二年・三年は不景氣の最も甚しき頃であつたが、當時は六百萬人の失業者とこれと同數の共產主義者が國內に氾濫し、また失業者も勢ひ赤化する傾向あり、ストライキは頻發して伯林市内の水道や電燈の止まることも一再ならず、流血の騒動もまた少からず、黄昏時以後の婦人の外出は危険を感ずるやうなことから屢々生じたが、偶々この時救世主の如く出現したのがヒットラーであつた！

ヒットラーは失業者から赤色分子に轉向した者共を拳骨でなぐり倒してナチス政權を確立し、勞働者に職を與へパンを與へつつ、次第に彼等の信望を把握していつた。

遂に國民舉つてヒットラーの精神を自らの精神とする日が來た。彼等の前途に光明を望むが故に、現在のいかなる困苦缺乏にも堪へようと決意した。そして營々として勤勞し、また孜々として貯蓄した。かくて復興獨逸は、面目を一新して

出現するに至つたのである。

ヒットラーは塊地利の生れで、今年やつと四十六七といふ一青年に過ぎぬが、その意氣の旺んること、その魅力たつぶりなること、勿論天才と稱するに足る人物である。

由來獨逸人は勤勉で生眞面目で、時計の振子の如く規則正しく行動するを特色とする人種だが、一面、その日常の私生活や社交生活までも餘りに理窟攻め・信念攻めにしたがるといふ缺點を有してゐないこともない。然るに塊地利人は些か獨逸人と異り、柔かな人間味を以つてその長所としてゐる。ところでヒットラーその人は、即ち生國塊地利の義理も人情も辨へた柔か味ある心情の上に、獨逸人特有の鐵の如き意志を合せ有つところの大英傑なのである。

ヒットラーは、かくの如き性格の持主であるのだから、正に鬼に金棒といふものである。ヒットラーに對する國民の信望は物凄く、全くビスマルク以來の大政治家として尊敬し、伯林市民がヒットラーの姿を見かける時には、直ちに脱帽して、しかも衷心より親愛の情を籠めた眼眸を投じつつ、「ハイル・ヒットラー！」を叫ぶのである。

ヒットラーの三大政策は、

- (一) 列國の國際的權利の平等化
- (二) 反共產外交即ち日・獨・伊團結外交の確立
- (三) 絶對平和尊重

にあり、國際聯盟と平和とは不可分の關係にありといふ英外相イーデンなどの主張に對し、ヒットラーは兩者を斷然可分なりとする點に於て特色を發揮してゐる。

(二) 獨逸の財政狀態

獨逸の國家豫算は絶對に公表せず、従つて如何なる歳入・歳出が行はれてゐるのか一切不明であるが、臆測するところによれば、半ヶ年の收入五十五億マーク、一ヶ年百十億マーク、即ち日本の數倍(勿論事變前の標準)に達するらしく、一九三三年が七十三億マーク、爾來毎年十億マーク位づつ増加して今日に至つてゐるといふ。しかも或る學者の見方によれば、以上の外に相當の收入がある筈だから一年百四五十億マークにも達しはせぬかといはれてゐる。歳出は勿論如上の歳入に伴ふのであつて、就中軍事關係費は歳入の三分の一乃至四割に當る五六十億マークを占めてゐる由である。

財源は九分通り直接税によるもので、公債は金融市場を調節する程度に時々發行するが、その額は大したことはない。

國民の富力は相當のもので、一ヶ年の所得六百億マークと稱され、而してその二割が税金として徴收されるといふ寸法である。

とに角ナチス政權が國民の大多數から厚く信頼されてゐる間は、獨逸の財政は決して破綻せず、健全なる財政狀態を持續することが出来るであらう。

(三) ナチスの新政策

人口政策・失業救済から道路・航海・軍需工業等の改善促進扱ては結婚の奨励に至るまで、ナチスはあらゆる新規の政策を科學的・合理的方法を以て行ひつつあるが、我々が獨逸に實際見聞したところによつても、道路の實に美事な改修ぶり・建設ぶりなど特に著しき一例であらう。又伯林の西南部工業地帯に工場勞働者専門の宏大なアパート多數を政府が直營し、二間風呂付きを一月僅か三四十マークより五十マーク(普通家賃の約半分)で貸し與へて彼等の生活の安定化を計り、この種のを尙頻りに増築中であることなども刮目

して見るべき施設であらう。

(四) 獨逸の貿易

日本の貿易が最高額に達した昭和初年の頃獨逸の貿易も亦最高額を示し、その金高二億二億マークに及んだこともあつたが、現在は百億マーク位に下降してゐる。しかし相手國に對して嚴重に物々交換制度を強行し、輸出・輸入の額を相互に決定するといふ統制法に於ては頗る特色を發揮してゐる。現に日本に對しては輸出五に對する輸入一とか四に對する一とかいふ工合であり、滿洲國に對しては輸入五に對する輸出一とか五に對する二とかいふ風であり、相手國の有する商品の種類により割合を定めるといふ徹底的態度を堅持してゐる。

この點に於て日本は獨逸の欲する工業用必需原料がない故に勢ひ貿易は偏頗とならざるを得ず、日本の獨逸への輸出は輸入の四五分の一に止まり、即ち輸入は一億圓に近いのに輸出は二千萬圓にしか過ぎない。

(五) 獨逸の工業

工業方面も優秀な技師・學者があつて次から次ぎへと驚くべき發明を完成しつつあるが、大體が秘密主義を立前とし、

殊に重工業・軍需工業等に於ける新發明品等は絶対に窺視することを得ない。

重要必需品の自給自足主義は、追々その目的を達しつつあり、即ち人造石油・人造羊毛の如きは最早完全に成功し、その他人造家畜飼料や、屈折自在の柔軟性硝子(電線の絶縁などに使ふ)や、人造の鶏卵白味(黄味は人造不可能)や、日本の最近のものよりも更に精巧なる特殊鋼等の發明もなし遂げられたといふ噂がある。

(六) 航空と新兵器

歐洲大戰の屈辱講和の後暫くの間軍事的航空施設は列國より禁ぜられてゐたが、しかし民間の航空事業は他の歐米諸國に劣らず相當の進歩を見せ、その後軍部の航空熱俄然勃發するに及び、近來は大馬力を掛けて優秀なる航空機の製作に熱中しつつあり、將來は數量に於て英・佛・米に劣らず、意氣に於てこれらに勝る充實せる空軍を有するに至るであらう。

兵器なども如何なる程度に發達してゐるか不明であるが、最近西班牙動亂で試験したライプツヒ號の水聴音機のやうに航海中敵の動靜の微音だも餘さず聞き取り得ることの可

能性を立證した實例などもあり、他の一般兵器も秘密裡にかなりの進歩を遂げてゐるものと推測される。何れにしても獨逸の技術家の創造力の豊富さは、公平に見て、例へば日本のそれなどよりもずつと高度だから、將來恐るべき大發明があるかもしれない。

以上の如き情勢を以て政府・國民を擧げて復興の意氣實に旺盛であり、一時六十萬人を數へた失業者も最近では七萬人に減じ、所謂統制經濟による幾多の方策は大略成功に近いものと評されてゐる。

なほ獨逸人が大戰中は素より戦後の難局を打開するため採つた極度の儉約は、民族團結力の非凡さを物語るものとして、何人も異口同音に稱揚するところである。

「第十八信」伯林のカイザーホーフにて認む

伯林からポツダムへ

八月五日。天氣晴朗。時に薄雲出づ。大體日本の九月末位の氣分。

朝、レジスター・マークの現金交換やら寫眞機買入れのブローカー中管氏の來訪やらで一時間ばかり手間どれ、十時、例の三十人乗り大型バスによつて出發す。この日の一行は二十六七人、あとの四五人は私用のため別行動をとつたのである。

今日は伯林西南の街衢を横切り、伯林附近の名所の隨一たる舊王宮ポツダム宮殿を訪ねようといふのだ。伯林は見るべきところ多く、これを詳密に書き記すことは到底不可能だが、殊に車中に同乗する獨逸人ガイドの喋るのを在伯林邦人の瀧田氏が一々通譯するのだから、話を聴くだけでもかなり骨が折れるといはねばならぬ。

テイーヤ・ガルテン(この公園のことは前に書いた)内の道路や重要な街路に特殊の電氣裝飾が施されてゐるのを何の爲かと訊くに、これは今月催される伯林開市七百年祭のためだといふ。この七百年といふ數字に少しく感興を催した。七百年といへば、京都・大阪の成立よりは遙かに新しく、東京よ

りは二倍古いといふことになる。

逕信省・航空省・大藏省等のある役所町。伯林有数の百貨店ベルトハイ。伯林の最高建築たる十二階建てのコロンブス・ハウス。日本大使館・英國大使館。クルツブ會社の事務所。在留邦人の溜り場の日本人俱樂部。獨逸で異常の發達を見せ、てゐる各種保險會社の建物の集中せる一區劃。——これらを車上から眺めて、郊外へ出る。

郊外中流家庭の住宅地・別莊地帯。アカシヤ・ブラタナス・アイヘ(柵)等の美事な並木道。先頃フローレンスとハイデルベルヒの間で見たやうなヒットラー街道即ち官設自動車専用道路を横斷する。この種の道路既に五千軒完成、更に一萬軒の完成間近し。重要都市間を連絡する平時の經濟的意味の外にいざといふ時は軍事上の重大交通網と化す。又これが建設は一面失業救済事業たることいふまでもなし。懸て綠樹の間に湖水の如きもの見ゆ。これぞハーフェル河の膨らみによつて生じた所謂河湖といふものである。そこにはボートや遊覽船數多浮びをり。周圍の鬱蒼たる大森林に對して水飽迄も清らかに、洵に落付きある奥ゆかしき遊覽地をなしてゐる。

河湖のめぐり、所々にカフェー・レストラン・ダンスホール・ホテル等あり。大體が小意氣に出來てゐて自然との調和大いによろし。

ワンゼイと稱する別莊地帯。楓・アカシヤ・アイへの並木、それに日本と同様の細長い眞直ぐの赤松の並木混る。

十一時二十分、ボツダム着。

このボツダムとはどういふ町かといふと、伯林の中央を距る西南三十二軒、今は人口七萬の小都市だが、カイゼル華やかなりし頃は人口もすつと多く繁昌の空氣もおのづから違つてゐたらしい。何しろ歴代の皇帝お氣に入りの地で、どの皇帝も大抵は一年の中四分の三をこの宮殿に過され、あとの四分の一を伯林の宮殿に赴かれるのが常であつたといふ。そんな次第だから、ボツダムは素々上品な優美な消費都市、商工業等には一切縁なくして發達した富豪・貴族の別莊地、そして今では伯林遊覽客の必ず車を驅つて一日を遊ぶべき名所古蹟である。

ボツダム見物

ボツダムの市街へ入ると、先づ市役所と議事堂の古風な建物が見え、宏壯な寺院の塔なども望まれる。やがて舊王宮俗にいふボツダム離宮に達した。

右手の壯麗且つ雄大な建物は一八三〇年ウキルヘルム一世の建立したもの、最近のカイゼルに至るまで數代の間いづれの皇帝もその生涯の七分通りをこの宮殿に住まはれたところといふ。左手向ひ側の建物は侍従・文官の控所たり。前者も後者も屋上及び側面に大理石の彫刻が施されてゐる。

王宮内部の部屋を見る。

各國使臣の集合する儀式の間。クリスマスの祝祭にも用ゐる。王室用硝子製造所の製造による特殊の高級硝子と世界各國の珍奇な貝殻と金銀寶石とを素材にして裝飾されてゐる。天井の壁畫も、伊太利の古畫を見慣れた眼には問題にはならぬが、しかしとに角頗る立派だ。多くの柱の中に、特に紫色で、長さ一尺五寸幅一尺位の楕圓形の巨大な寶石を鑲めた一本の太き柱あり。この寶石は露西亞のツアーの贈り物、これ一つで現在百五十萬マークの價値ありといふ。夜は電燈や蠟燭の光に反射し格別の美光を放つといふ。

次ぎの廣間は、皇帝が各國の帝王等と外交關係について密談したり、各國の使臣からクリスマスの祝禮や音物を受けたところ。ぎらぎら光らずに重々しく出來てゐる。繪畫や彫刻は無數に並べられてある。

次ぎは鏡の間。これも美しいが、その次の陶器の間といふのが更に豪華なものだ。この陶器は伯林のマイゼンといふ王立製陶所特製の高級陶器で贅を盡してゐる。周圍を陶器で飾つた精巧な時計があるが、これもまた當時百五十萬マークを要したといふ。

次ぎは臣下の宰相や將軍接見の間。ウキルヘルム一世の音樂を奏せし間。歴代皇帝の書齋。この書齋には「明治天皇」と題する獨逸語もて書かれた大部の著述や日本人研究の書物も多數を藏すといふ。

次ぎは土耳其王より贈られた草花模様を刺繡せる大壁掛のある部屋。ここには皇族の肖像油繪が澤山掲げてある。

書庫・圖書閱覽室の大廣間は、壁・天井・床張りすべて羅馬式の大理石モザイクで飾られ、あらゆる色彩の大理石が萬花模様を現出してゐる。

三階に登るとオペラを演じたり宮中樂人の奏樂したりする舞臺がある。皇帝・皇后・皇太子の誕生日を期して年三回祝福の歌舞が催されたのだといふ。

外に、各皇族の部屋。玉突の間。(カイゼルはこの玉突臺を和蘭の閑居へまで運んだ位愛好されてゐたといふ。)ダンスの間。二階には各國使臣謁見の間。皇帝・皇后の私室。カイゼルが戦敗の擧句伯林やポツダムを明け渡すまでをられたといふ最後の部屋。皇后の談話室。白銀の間。朝食の間。晝食・夜食の間。數に限りなく、善美を盡さざるなし。

ポツダム離宮から更にサンスーシー(無憂殿)の方へ進めば、その途中に一つの世界的名園がある。即ち右手には今を盛りと大輪の花咲き狂ふ薔薇の園が展げ、左手には主として熱帯植物の蒐集された所謂シシリーの園が望まれる。サンスーシーの建物も庭園も一七四五年フリードリッヒ大帝自らの趣味によつて設計されたものといはれ、園中には大帝の像が建つてゐる。宮殿から見ると庭園は數十米の低きところに見下され、種々な幾何學模様を描いた大花園が、陳腐な形容かもしれぬが、全く絨氈の如くに織り出されてゐる。その美し

さ到底地上のものとは思はれぬばかりだ。宮殿中央の階段を降りてゆく兩側の左右には、各々百米許りの長さの大温室あり、二百年も昔にかういふものを合理的・科學的に眞南の太陽光を受けられるやうに工夫設計し、一方噴井や泉で十分に清水を取り、ポツダムの如く北緯五十二三度のところで結構熱帯の果樹や草花を栽培して來たといふことは容易ならぬ事實ではあるまいか。どうもフリードリッヒ大帝といふ人は獨逸舊皇室でもさすが卓然として偉大な人物であつたやうだ。園中には埃及あたりから持つて來た塔や彫刻が多數配されてゐる。いろいろな紛争をきっかけに無理強ひに運び來つたものも少くないらしい。

サンスーシーを含んでのポツダム離宮は、前にもいつた通り、代々の獨逸皇帝が一年の七八分までここに過されたところで、それは單に居住の地なるばかりでなくまた政務を執り行ふ地でもあつたのである。そして伯林宮殿へは特に大問題でも生じて伯林市民へ向つて告示又は激勵の演説でも試みるやうな時にだけ行つたのである。それであるからポツダム離宮は、離宮とはいつても新舊四五の大建物の部屋數合計實に

千を數ふること、その豪華依て以て想ふべきである。なほポツダム博物館には歴代の皇帝・皇后の衣服・裝身具が飾られて、おのづから在りし昔の夢を物語つてゐる。

右に述べた庭園の中を、伯林を發した大道路が貫いてゐる。そしてここから西南に向ひライン河畔の諸都市を経て佛蘭西巴里まで五六百哩の間一路平坦であるが故に、カイゼルが對佛開戦の宣言を宮殿のバルコニーよりポツダム市民に告知した時、一方は二十哩離れた伯林の方角を顧み、一方は西南數百哩彼方の巴里の空を睨みつけつつ「この道は巴里に通ず。」と前置きして以て一擧に巴重を蹂躪して英國の鼻を明かさうとの高らかな意氣を示したのであつたさうだ。

ポツダムの町へ出て、二三百年来の落ち着いた街道筋を見る。半ばはポツダム離宮のため、半ばは住宅消費地として出來上つた町だけに、勿論工場などは皆無で一向活氣とはないが、その代りハーフェル川の河湖に臨んだところなどは實に景勝の地で、高級住宅や高級別荘が美々しく並んでゐる。今ポツダムの人口は七萬位だといふ。

ポツダムで有名なアインジードラー(隱士・仙人の義)とい

ふ家で晝飯を食ふ。一人約四マーク半、邦貨の六圓である。(但しレジスター・マークなら四圓弱。)

ポツダムからの東廻りの歸路

伯林・ポツダム間は、東北から西南へ長々と横はるハーフェルの河湖を中心として、東廻り・西廻りの二つの道が通じてゐる。そして河湖に臨む部分は東も西も贅澤な住宅地たるワンゼイトと稱する區域をなしてゐる。往路は西廻りの道を選んだので歸路は東廻りにする。アイヘ・楢・アカシャ等の立派な並木のあるのは兩方共同だが、歸路の方が河湖の姿態に變化多く、眺望も一層佳絶であつた。湖面に浮ぶ他奇のないヨットやボートも綠濃やかな密林を背景にすれば、その色彩は世にも美しいものとなる。伯林市民が土曜から日曜へかけての行樂地として、どんなにこの地を愛してゐるかは想像に難くない。

ヘルペ河の話

ハーフェルの河湖の水は北上すれば結局スプレー河に合流

する。しかし、我々の眼にはハーフエルがスプレーになるところまでは見えず、ハーフエルはただ湖としてのみ感じられた。スプレーはエルベ河の支流で伯林の市中を貫流してゐる河だ。そして、エルベは、いふまでもなく、その本流の源をチエツコスロバキヤに發し、スプレーその他の支流を合せ、獨逸平原を北々西に向つて流れ、ハンブルグに於て、北海に注ぐ大河である。

スプレーをも併せて、エルベは實にいい河だ。世界でも名高い河だが、實地を見ると成程名高いのも故ありと思はせられる。エルベよりも長く且つ有名な河は世界にいくらかもある。例へば、ナイルやミスツビーやセントローレンスやダニユールや揚子江や數へればきりがない。しかし謂はば二流の五六百哩以下の河として、エルベのやうに、上流も中流も下流もすつかり残りなく利用されてゐる河は世界中でも澤山はあるまい。倫敦のテムズ、巴里のセーヌ、そしてこのエルベなどはかういふ意味に於て世界有数の河であり、一面からいへば、テムズ・セーヌ・エルベ等それぞれの有つ力が倫敦・巴里・伯林等の大都會を成育したといつてもよいのである。

エルベの上流は獨逸の南部及び東南部の比較的豊穡なる土地を十二分に灌漑し、中流はまた落差少き平野のせみか或ひは湖沼の地下水の豊かに湧き出づるゆゑか、エルベの水量を非常に多からしめ、そして下流のハンブルグの邊に於ては驚くべき大河としてあらゆる便益を齎してゐる。俺はこの日より約二週間の後再度の獨逸入りの時、ハンブルグの町を一日半見物、港内を隈なく巡つたが、エルベの長さは日本の信濃川の三四倍位に過ぎぬであらうのに、最下流の廣さと水量においてはその數十倍あり、宛然狭く曲折ある一種の海灣の如き體裁をなしてゐるのである。人は或ひはこれを以て海の入江ではないかと疑ふかもしれないが、北海からハンブルグまではなほ六十哩もあるのだから潮汐の満干のあらう筈なく、これはやはりエルベそのものの實力の然らしめるものと解する外はなかつた。エルベ河が何故に千哩も千五百哩もある大河と同等の水量を有するかは、俺には明確には斷じ難い疑問であるが、強ひて想像すれば、その流域の膨脹箇所即ち河湖といふものが大なる水量を提供するに與つて力あるのではなからうか。

歸路觸目の風物

それはとに角として話を本筋に戻せば、ハーフエル河湖の東方を伯林に向ふ街道の途中には、大なる練兵場と共に四五師團も入れさうな巨大なる兵營あり、聞けば以前のカイゼルの近衛兵の兵舎で、獨逸軍中でも最強の自信を有してゐた師團であるといふ。

川岸の眺めのよきところにカフエーやダンス・ホールの華麗な建物あるのは往路と同様だが、この道のネーリング・ベイと稱する入江の眺望こそ往路・歸路を通じての最も忘れ難いものであつた。

ハーフエルから離れて、伯林の郊外間近になると、鬱然たる森林の間にアスパラガスを栽培する大農場があつたり、甜菜(砂糖大根)の青々とした畑が連つたりしてゐる。愈々伯林の街へ入ると、そこには市内電車の西端終點があり、それからスプレー河に架した案外大きからぬ橋を渡り、右にオリンピック會場の建物を眺め、左に大工場地帯の煙突を望み、かくて四時半カイザー・ホーフへ戻つた。

「第十九信」ウキーンのグラン
ド・ホテルにて認む

飛行機上から見た獨・チ・埃・洪

八月七日。晴。

午前六時、カイザー・ホーフをタクシーによつて出發、伯林の南部なる伯林飛行場に向ひ、六時二十分到着。今日はこれより伯林・ウキーン・ブダベスト間往復の飛行旅行の途に就かうといふのである。この擧は貿易振興會の團體行動とは離れた個人的・私的なもので、一行中の佐多・若松・今の三氏と俺との氣の合つた四人連れである。

先づ飛行のコースをいふと、國の數なら獨逸・チエツコスロバキヤ・埃地利・洪牙利の四ヶ國に跨り、これを着陸地といふと、伯林からチエツコスロバキヤの西部ブラーグの近くを通り、埃地利に入つてウキーンで降り、ウキーンから更に洪牙利へ飛んでブダベストを終點として引き返すわけだ。距離は伯林・ウキーン間が五百三十料、ウキーン・ブダベスト

間が二百三十軒、合計七百六十軒。所要時間は、伯林・ウキーン間が二時間二十分、ウキーン・ブダベスト間が一時間、合計三時間二十分。伯林を發する國際飛行ルートは遠く希臘にまで及んでゐるが、ウキーンには往復共着陸することになつてゐる。ただウキーン・ブダベスト間は傍系のルートで別の飛行會社の經營に拘る故、ブダベストへ行くにはウキーンで乗り換へねばならぬ。

乗機券は前夜買求めておいたが、往復が一割引で百九十マルク、邦貨二百七十五圓、これにウキーンでの一泊の宿料や土産品・寫眞帖・繪葉書の末まで入れると、二日間に四百圓は消えてなくなるので、一寸贅澤なやうでないこともないが、折角歐洲まで来てゐて、音に聞く塊洪二國の首都を訪問せぬのは生涯の遺憾であるし、それに獨逸政府が外國人の獨逸旅行者吸引策として特別安いレートで(但し金額を限つて)賣り出すレジスター・マーク(普通なら一マルク邦貨一圓四十五錢のものが、レジスター・マークだと一マルク邦貨八十五錢で買ふことが出来る)が、寫眞機などを買つてまだ餘りがあったからこの飛行旅行を決行する氣になつたのである。それ

だから、四百圓を要する旅費なら三百圓で澤山といふわけになるのである。

伯林飛行場については八月三日の記事に書いたが、ここは元陸軍の大練兵場だつたのを民間飛行場としたもので面積約六七十萬坪、しかも尙この二倍大のものを向つて左側に擴張工事中であるといふ。伯林の中央に位するカイザー・ホーフからは、早朝の人出少き街路を急速度で走つたとはいへ僅か廿分足らずでこの飛行場に到達したことから見れば、その距離はいづれ六七哩しかなるべく、實に便利の上もない。そして、かかる驚異的大飛行場の出現したのも、伯林市民が歐洲で一番飛行機利用熱に燃えてゐるがためである。

この飛行場では、朝六時半から獨逸國內向け十本、國外向け五六本、合計十五六本の航空路に對して、實に五分間隔を以てどしどし飛行機が出發する。我等四人の塔乗するのは正七時だが、それは、六時五十五分發のフラクフルト行きに次いで既に七番目の出發機なのである。

何しろ國外へ出るのだから、旅行券・手荷物等全部検査される。寫眞機と眼鏡は機上では絶対に使用を禁じられてゐ

るので、所持者は目的地へ着くまで保管者に預け渡さねばならない。

所持金は信用狀・爲替・外國貨幣等ならいくらでも差支ないが、獨逸の貨幣は爲替管理のため十マルク以上は嚴重に持出し禁止となつてゐる。抑々獨逸へ入國する時にも所持金の調査があるが、これはその旅行者が獨逸國內でどれだけ金を落したかを知るためで、若し出國の際の所持金が入國の際のそれよりも多いやうなことになるとうるさい問題になるらしい。この貨幣検査は他國では見られぬ制度なので甚だ印象深かつた。それも前後三四回もぶつかり、一々署名を要求されたのである。

待合所には八九十人の旅行者が各々出發時間を待ち合せてゐる。またそのあたりには二十人ばかりの所員が立働いてゐる。構内には食堂や菓子・果物・繪葉書・新聞雜誌等の賣店があり、階上はバルコニー式の展望臺になつてゐて、そこにレストランなどがある。

我々は待合時間を利用して急いで簡単な朝食をしたため、正七時、飛行機に乗り込んだ。

機内は十六人分の椅子のある一室と、外に六人分の座席を有する喫煙室がある。今日は男子十三人・女子三人、外に乳

幼児二人で満員である。兩側の窓は彈性硝子で出来てゐて勿論展望は自由、椅子の廻りには紙製小便袋や酸素吸入器等を置き、又豫め渡されたものには、航空路種別表・時間表・地圖の外に胸へ附ける記念章や耳へつめる綿等があり、且つ塔乗すると二十四五歳の潑刺たるエア・ガールが一人一人を皮バンドを以て座席へ縛りつけてくれるが、この日は晴天無風絶好の飛行日和とて、皮バンドはやがて解いたし、耳の綿も必要ない程爆音は少なかつた。

滑走一分にして美事に離陸、(日本での俺の飛行経験よりは残念ながらこつちの方がどうも調子が鮮かである。)百五十乃至二百米の高度を保ちつつ伯林の市街に別る。窓の装置は防音にも防氣にも完全に近く、大聲を發せずとも會話は自由だし、寒暖計の水銀も二十一二度のところにある。

機上から見た獨逸・チエツコスロバキヤ・塊地利・洪牙利の印象は、山河といひ耕地の色彩といひ大體同じもので、獨逸・チエツコ間に二三百米の小山脈があり、チエツコ國內に

も若干山地はあるが、大體は坦々たる平原で、綠・茶・榎紅・黄・褐・青等の色とりどりの畑と藍がかつた森林と、そしてその中へ、獨逸では所謂帝國自動車道路（別名ヒットラー道路）が白い帯の如くに目立ち、獨逸南部や、チェッコのエルベ河上流地方や、奥洪のダニューヴ河流域等の豊穡の土地では、河面の外に人工貯水池がところどころにぎらりと光つて見える。中でもチェッコは、道路こそ劣るやうだが、地味は最も肥沃だと直覺された。なほ餘談だが、畑の形が四角・長方形・斜形・圓形等いろいろあつて、色彩の複雑極まることは日本とは全然様子が違つてゐて面白い。

七時四十分、右方遙かにドレスデン市街を指呼し、八時十分、獨逸・チェッコの國境通過。首都ブラーグは遠すぎて見えぬ。九時、チェッコ・奥地利の國境通過、チェッコの縦斷には物の一時間とからぬのだから、機上からでも、東西に細長く獨逸と奥洪との間へ楔のやうに食ひ入つてゐることが了解される。チェッコの農業は大したもの、地味が南方獨逸同様良質であるのみならず土地の利用法は南獨以上に集約的で徹底してゐるらしい。九時十分、ダニューヴ河上を通過、

ウキーンの近きを知る。僅か六七十米の低空へ下り、ダニューヴ河に沿うて進むこと十五分間、九時二十五分、ウキーン飛行場に着陸。天候に恵まれたせもあるが、伯林・ウキーン間五百三十軒の距離を一分も遅れずに丁度定時に到着したことを特記しておく。ここで旅券・有金・切符の検査あり、二十分間待合室で休憩する。ウキーン飛行場は約三四十萬坪で伯林飛行場の約半分、建物も彼に劣る。

ここでウキーン・ブダベスト間の往復飛行を専らとする別個の飛行會社の稍々小型の旅客機に乗換へ、九時四十五分ウキーン飛行場を出發す。ウキーン・ブダベスト間は二百三十軒の距離で所要時間は正に一時間、これも豫定通り十時四十五分ブダベスト飛行場に着陸した。この飛行場の廣さは凡そウキーンのそれ位、しかし設備はウキーンのより更に劣るから、伯林飛行場とは大分懸隔がある。しかし、これは伯林飛行場が途方もなく大規模で且つ設備完全なるがために他が見劣りするわけで、個々別々に觀察すれば何れも驚くべきものである點には變りがない。ここでも旅券や所持品の検査があつた。

ブダベストの一瞥

一同大型バスに乗せられ、ダニューヴ大江の長橋や舊王宮の下のトンネルを通つて、ブダベスト市の中心街なる飛行會社事務所に至り、そこで市の情勢など聞く。それから少し時間は早いと都合で晝飯を食ひ、我々四人だけ別にタクシーを頼み、三時間に亘つて市中を見物する。

洪牙利は、誰も知る通り歐洲大戰以前は奥地利の一部であつたが、住民にスラブ系人種多きため例のウキルソンの民族自決主義に則つて奥より分離せしめられて獨立國を形成したもので、昔からダニューヴ流域の大平原の農業を以て聞えてゐる。面積は九州の二倍位、人口は八九百萬人、農業以外の産業は微力だが、ただダニューヴの貫流によつて北西は奥地利のウキーン及びチェッコへ、東南はバルカン諸國へ交通が開けてゐるので商業的には多少の進歩を見せてゐるが、大局からいふと國勢は不振で國民は至極呑氣、先づ將來性の少い國柄といふべきだ。首府ブダベストは人口百二十三十萬人、中歐ではウキーンに次ぐ大都會だが、商工業などは大して盛ん



ブダベストの印象

でない。しかしさすがは古い都だけに、見物の材料はなかなか多い。

ブダペストはダニユーヴを挟んで両側にある。西がブダ東がペストだが、ペストの方がブダの三倍も大きい。ダニユーヴはソ聯のボルガ河(裏海に注ぐ)に次ぐ歐洲第二の大河、ブダペストに於けるダニユーヴには五大橋が架り、その中最も大なる橋の下から北方にかけて大なる中島あり、ここがブダ・ペスト両方の遊園地となつてゐて、一人一ベンコ(邦貨七十銭)の入場料を拂へば、誰でも自由に享樂することが出来る。勿論洪牙利には海がないので、ダニユーヴの水餘り綺麗とはいへぬが、ここに多くのプールを作り、折柄の炎暑に男女群が泳いでゐた。別に兒童専門の遊戯場・運動場もあり、又變つたものでは例の公然の賭博たるカジノもあつた。これはこの島に限り許可されてゐるので、方法はモンテ・カルロ同様のルーレット、この日も大勢の紳士雲集して勝負を争つてゐた。

我々はタクシーによつて、先づブダペストの商工業の中心地——といつても大したものでもないことは前言の通りだが——

を視察、次に件のダニユーヴの中洲遊園地に遊び、それからダニユーヴ河畔のブダ側にある舊王宮を見たが、この宮殿は丘陵の上に立つて頗る景勝の地を占め、建物も洪牙利全盛當時を偲ばしむるに十分な壯麗さである。王宮の一部は近衛兵舎に宛てられてゐるが、近衛兵の服装は極めて美々しく、殊に帽子の上にふさふさした黒き鳥の毛を立ててゐるのは洒落れたものだ。他國では見られぬ風俗であらう。洪牙利は親日國なので兵士は喜んで宮殿の一部を案内する勞をとつてくれた。城内の王族の居間や幾多の部屋は裝飾善美を極め、前面の廣場には歴代の國王や功臣の銅像があり、美術彫刻のついた大噴水などもあつた。またこの高臺からダニユーヴを隔てて對岸のペストの町を眺望したが、そこには一種優麗寛雅の趣きがあつた。中に建築美に富んだ議事堂や高塔聳ゆる某寺院の屋蓋も見えた。

要するに洪牙利は歐洲大戰々敗後四五等國に墮してしまつた憐むべき國で、偶々我々に接したベダペストの市民も親日的な態度と共に日本の日進月歩の富強ぶりを大いに羨望してゐた。しかしブダペストはさすがに古都だけあつて古雅な雰

圍氣を湛へ、日本でいへば城下町風のところがあり、その點は無論價値を認めねばならぬのであつた。親日のためでもあるまいが、ブダペスト市街が左側通行なのも面白い。世界を通じて左側通行は日本と洪牙利と英國と、外には一二しかないやうで、他はすべて右側通行である。

ウキーン見物

ブダペストの視察を終り、三時半、航空會社事務所から再び大型バスで飛行場へ戻る。(この飛行場・事務所間の連絡自動車賃は、伯林でもブダペストでもウキーンでもすべて飛行旅費中に含まれてゐる。)飛行場ではまた型の如き手續きがあつて四時發のウキーン行き十六人乗りに塔乗すれば、四時五十分ウキーン飛行場着、この空驛は往路に立寄つたところで、廣さ約四十萬坪、伯林のには劣るが、ベダペストのよりは優つてゐることは既に前に述べた。ここから十哩近くもあらうかと思はれる距離を自動車で運ばれてウキーン市内に入り、飛行會社事務所に達し、そこで我々はタクシーを備つて伯林のカイザー・ホーフから紹介狀を貰つて來たホテル・

望展のンキウ





ウキーンの大ランド・ホテル

プリストルへ馳せつけたところ、ホテルの前には何百人もの群集が口々にわいわい喚き立て、自動車も二三十臺止つてゐるし、新聞社の寫眞班も幾組も盛んに活躍中である。一體何が始まつたのかと、佐多博士に様子を訊いて貰ふと、英國の

先帝ウキンザー公とシンブソン夫人がたつた今ホテル・プリストルに着かれたばかりのところだといふ。そしてこのホテルは、ウキーンの閑寂な風物を愛好される皇帝の多年の定宿であつたが、シンブソン夫人と結婚されて後にはこのたびが始めての御來維なので、それでいづくも同じ物見高い若き男女がかくも殺到したのだといふ。女性のためには王冠も何のその、「百萬石も笹の露」以上の戀の勝利者となつた御兩人ゆゑ、ウキーン市民の騒ぎも道理、日本ならさしづめ人死にが出ようといふものだ。

それはとも角、こんな次第で、折角の紹介状もフイになつたが、親切なマネージャーが出て来ていとも懇懇に、誠に申譯なしと断られてはこれも止むことを得ないので、ここからの紹介で直ぐ傍のグランド・ホテルへ泊ることに決める。丁度二室續きの四人部屋の空気があつて好都合であつた。隣りのホテル・プリストルは全歐の皇室・皇族の引立てである一流のホテルで、部屋數四百あり、これに比すればグランド・ホテルは少し劣るがしかしこれ亦

一流中のもの由である。部屋代はバス付きで二室合計五十八シルリング（一シルは邦貨六十五錢乃至七十錢だから五十八シルは大體四十圓）即ち一人十圓だから減法安い。

夕食は市中のレストランで攝ることにし、ウキーンの夜景を二時間ばかり見物する。先づ国立オペラ劇場の前へ出ると、これは間口七八十間、奥行五六十間もある華麗な石造建築、これが市の中心でここからステファンといふウキーン第一の寺まで約一軒の間が商店地區中の最も殷賑な街路で、ここにホテル・レストラン・百貨店・専門高級店等が揃はれてゐる。繁華な點では遠く伯林に及ばぬが、建築の藝術化さはあるまいかと思はれた。明日は日曜で商賣全休となるので、土産や繪葉書・寫眞帖等十シルリング（邦貨約七圓）ばかり買物し、又某レストランで特殊なサンドキツチを食ひビールを飲んだが、これは一人前四シルリング（約三圓）に過ぎなかつた。百貨店でもホテルでも専門店でも、老舗なることを誇示する風習があり、金色の看板文字で、「1829」とか「1845」とかいふ工合に創立年代を掲げてゐるが、中には二百

年前・三百年前のもあり、甚しきは十五世紀のさへ見えた。

埃地利は歐洲大戰の結果洪牙利と引離され、北部はチェッコへ、東南部はユーゴスラヴィヤへ、西南部アルプス山中は伊太利へ、それぞれ分割されたので、今では舊人口の十分の一に減じ、佛・獨・伊三國間に挟まれた弱小國として政治・外交・經濟・軍事すべてに不振を啣つ國勢であるが、しかしウキーンだけは別物で、文學・美術・工藝・音樂等に亘り、所謂「詩の都」として昔ながらの中歐第一の名譽を誇つてゐる。案内記によるとウキーンの現人口は二百二十萬人で、伯林の約半數しかないが、街衢の優雅さ、市民の上品さは、伯林以上である。日本でいへば京都市のところ、殷賑街の人口通りと雖も東京の四分の一、伯林の三分の一にしか當らず、丁度ローマやナポリの程度であるが、それでゐても少しも淋しい感じはなく、悠容迫らぬ快さが横溢してゐる。ウキーン市民は獨逸人と同一のゲルマン種族だが、國の位置が獨逸よりも南方にあるのでそれだけ情熱的・樂天的であり、理性に強い獨逸人よりは寧ろ伊太利人の方に近い。こんな國民性・市民性であるから、單にウキンザー公のみならず歐洲各國の皇

族の來遊される方少なからず、従つて諸國の金持紳士などもここに長逗留してライフをエンジョイする者が極めて多いといふ。尤もその反面には勿論遊蕩的気分も濃厚なもので、この夜も、大通りといはず公園といはず、口唇を赤く塗り、指の爪を紅く磨き上げた魔性の女は我等の眼前をしきりに徘徊するのであつた。

八月八日。快晴。

ウキーンのグラント・ホテルに一夜の宿を求めた翌の日、今朝は我々の語彙を以てすれば、「日本晴れ」の朗晴だ。附近のレストランでパンとコーヒーの簡単な朝食を攝り、それよりタクシーを頼んで市中の要所・舊蹟の見物に出掛ける。昨日ダベストでは何分洪牙利語のために佐多博士もタクシー運転手との問答にかなり苦しまれ、旅行案内と地圖とで、やうやく見物が出来た次第であつたが、ここウキーンともなれば、訛りこそあれ獨逸語には違ひないので、佐多氏も難なく要領を得、我々も十二分に説明を聞くことが出来た。

タクシーに乗らうとすると、ホテル・ブリストルの前に又

々大變な群集が騒ぎ立ててゐる。昨夜ここに宿泊されたウキーン公がシンブソン夫人を高級自動車に乗せ、自ら運轉臺に乗つて操縦せられようとする御様子で、聞けばこれから西方二百哩を距つるオーストリア・アルプス方面へ向つてドライブされるところだといふ。我々はこの時つくづくシンブソン夫人を眺めたのであるが、このバルチモア生れの怪女性も東邦に生を受けた俺の眼にはあまり美しくは映じなかつた。

グラント・ホテルの横の通り即ち國立オペラ座の通りは、昨夕も往復したステファン通りだが、この通りの突當りにウキーン第一のステファン大寺あり、内陣はローマやミラノの寺に劣らぬ大いさ、日曜なので善男善女の參詣人が多い。ドナウ(ダニューブ)運河の架橋を渡り、ウイルチゲットといふ美しい塔を見る。伊太利あたりの塔とはかなり感じの異つたものだ。運河と本流の間には廣大な遊園地が設備されてゐる。小供には遊戯場・運動場、大人にはカフェー・ダンスホール等、それは必ずしも高級ではないがとに角さまさまの種類が網羅されてゐるのは、娛樂のためにこれ程まで腐心するものかと驚かされるばかりだ。しかも、この遊園地の繁昌

するのは平日殊に水曜日で、日曜日——今日は日曜だが——は休業同様、纒かに飲食店が店を開いてゐる位だ。市民は日曜には、自動車で電車で或ひは徒歩で、リュックサックなどを背負つてどんだん郊外を目指して出掛けてゆく。つまり彼等は少くも一週二度は仕事を休み、一日は市内で享樂し一日は保健のためにピクニックなどをやるらしく、總じていへば我々日本人よりは遙かに生活に餘裕があるらしい。暇があるせむもあらうが、土臺天性が香氣で陽氣なのであらう。

ウキーン綜合大學。この醫科は伯林大學に亞ぐ有名なもの由。ウキーン第二の大寺・樞密院・議事堂・劇場・諸官省・博物館・美術館。これらは建物を瞥見しただけだ。一々丹念に内部を見ないのはいかにも勿體ない話だといふ人もあらうが、夜を日に繼いでの見物又見物で、俺のやうに好奇心も馬力も人並以上強壯な人間でも、同じ種類のものではさすがにくたびれて覗いてみる氣がなくなつてしまふのだ。

自然科學博物館へ入る。これは目新しいからだ。ここに陳列してあるものを詳しく説明することは到底不可能だが、一例をいへば有史以前の遺物だとか、人間の用ゐる器具器物の

發達だとか、さういふ一つのトピックについて、何百何千の實物や標本が蒐集され、それが年代順に系統立つてきちんと並べられてゐるのだから、學者の研究にとつては勿論のこと、當り前の人間の常識の養成に就いてもいかばかり裨益するところ大なるものがあらうか！ 要するに俺の最も感心するのは、その蒐集品の豊富さよりも寧ろその整頓の仕方の徹底にある。日本にも例へば東京上野の科學博物館の如きがあるが、この種のもを何とかして諸外國のそれのせめて半分位の規模と内容にまで到達させたいと思ふのは、俺ばかりの希望ではあるまい。未だ英・米・佛のものは見ぬが、ウキーンはこの科學博物館と雖も、定めて世界的の名聲を有するものに相違なからう。勿論國立であらうが、帝政時代の皇室の援助などもあつたらしい。

博物館前の廣場にはマリア・テレサ女皇の大銅像がある。埃地利繼承戰役當時の大立者で、多くの將相を従へて敢然と立てる姿は、女性とはいへ英氣風爽四圍を壓するの概がある。廣場の向側に舊王宮・新王宮があるが、王居としては餘り立派ならず、蓋しこれは政治の府で、實際の皇城は後に行つ

てみた市の西南部にあるのがそれであつたらしい。新王宮の前にも皇帝の銅像が聳え立つてゐた。

再び市内に入つてゲルンクルグといふウキーン第一の百貨店の前へ出る。日曜の休業で内部へは入れなかつたが、建



GRAND HOTEL · WIEN

ターマのルテホ・ドンラグ・ソーキウ
(りよーバーベータレの者筆)

物は五階建、總坪數五六千坪、新宿三越位の程度のもの、しかも外観はそれに劣り、何となく舊式の匂ひがする。

商品陳列館・工産品陳列館を見たが、この國の商工業は今や既に三四等國の狀態に墮してゐるので格別に見るべきものがない。産業に關する限り、この國の文化は全く過去のものである。

最後に市の西方にシロス即ち皇城を見る。王居としては、伯林のものやポツダムのもなどよりも劣るが、しかし庭園の廣さと、その中の芝生・花壇・綠樹の並木路等の華麗さに於て特色を見る。突き當りに勾配の緩やかな小丘があり、俺

得意の目測を以てすれば、幅三百米、長さ五百米ばかりの青毛氈の如き芝生が、丘上の頂點から放射線狀になだれてゐる。扱てこの頂上に立てば眼下には宮殿と平庭、中景にはウキーン市街、遠景には南北西三面に亘る郊外の田圃や農村住宅、そして最極の遠景としては、オーストリア・アルプスや伊瑞國境の連峰までを幽かに指呼することが出来る。塊地利皇室の華かなりし頃には、皇帝は屢々この高臺へ登攀せられ、六七本の大理石柱が凱旋門の如くに立てることの休憩所に成らせられて四方の風光を眺望しつつ満足の情を味はせられたことであらうが、想へば、榮枯盛衰は人力の如何ともなす能はざるところといふの外はない。忘れもせぬが、西曆一九一四年即ち大正三年の六月二十八日塊地利老帝時に七十餘歳であられたが、皇太子及び同妃共ボスニヤの首府セラエヴオで一セルビヤ青年のために狙撃され、これが動機となつて歐洲大戦延いては世界大戦の惹起されたことは、何人も熟知するところであるが、身今このシロスの丘陵に佇立すれば、國破れて山河ありの感慨またひとしほである。

世界戦争の結果は、獨逸皇帝をも塊地利皇帝をも没落せし

めたが、驕つて極東日本に住む我々にとつても亦重疊たる波瀾を興へた。これは俺にとつても洵に感慨無量なるものがあり、即ち、左に藤一郎の店が當時より大震災に至る間、即ち今を距る二十五年前より十六年前に至る間に受けた激烈なる上下動を、數字に現して示しておく。

大正三・四年二年間の損失 五萬圓

大正五年より九年まで五年間の利益 五十萬圓

大正九年恐慌時の損失 十五萬圓

大正十・十一年二年間の利益 十五萬圓

大正十二年大震災時の損失 四十五萬圓

合計 利益六十五萬圓 損失六十五萬圓 差引完全に零

つまり大正三年以來の儲けも十年後の大震災ですつかり吐き出しとなり、あつさり元の黙阿彌に立歸つたわけだが、回顧すればこの間の泣いたり笑つたりの人生實劇といふやつは寔に異常なシーンを展開したわけで、惡戰苦闘の結果が損徳五〇パーセントづつだといへば、人はその滑稽を笑ふかもしれぬが、我々當事者は、精根を盡して眞剣に戦つたものであつた。この間損失の傷手にへこたれた者の死骸累々たるを乗

り越え乗り越え俺は遂に今日の吉野藤を存在せしめた。そして勿來將來とても、ただ一路猛進、而して人力を盡せばあとは天運の支配に委ね切るの外はない。俺はウキーンの皇城内にゐて實にこんな感慨に耽つてゐた。自分でいふのも可笑しいが、なかなか特色があるではないか!

王宮を最後として愈々ウキーンに別れを告げるべく、ホテルへ戻つて會計を濟ませる。宿賃は、前に四人で五十八シルと記したが、雜費を加へて七十六シル、一人分邦貨換算約十三圓、高からぬ相場である。序にタクシーの賃銀をいへば、メーターが十二シル、待賃が六シル、合計十八シル、一人分邦貨換算約三圓十五錢で、これも随分安い。

午後一時航空運輸會社事務所に立寄り、同社の自動車で行場に至り、二十四人乗り飛行機に乗つて一時四十分出發、往路と同じコースを豫定通りの時間内に於いて四時伯林飛行場に着いた。夏の日はまだ高く、四人は例の飛行場事務所樓上の展望レストランでビールを飲み食事を攝つた。既に夕暮とはいへ、この日も飛行機見物の人々なかなか多く、我々も亦恰も鳩の舞ふに似たやうな飛行機發着陸の狀況なほ見飽か

ぬものあるを感じた。かくて七時、伯林に於ける一行の宿泊所たるカイザー・ホーフへ歸つた。

次にウキーン滞在一夜半日の間に俺の觀察したところの塊地利及びウキーンの概観を簡條書に記しておく。

(一)ウキーンの人口は二百二十萬で大體伯林の半分位、伯林市街・市民の活動的なるに比してウキーンのそれは沈靜的である。即ちウキーンは將來的でなくて過去のであり、そこにいいところも悪いところもある。建物は風雅だし人間は上品だし、いかにも平和に世の中を渡らうとしてゐる様子が見える。その代り大いに發奮し大いに努力して國家の發展を期さうなどといふ氣概は一向感じられない。つまり亡國的文化の國柄だ。

(二)塊地利は、何といつても三四等國で、國際場裡に立つても別に發言權があるわけではないが、しかし一方獨逸に頼つてあくせくせずとも平和にやつてゆけるといふ氣持があるせむか、(その後獨逸は合併したが、これはその以前の記事である。)國民性は至極呑氣で樂天的で、その點新興のスロバキヤや波蘭とはかなり異つた空氣を醸してゐる。

(三)しかし、音樂・演劇・美術、談一度かういふ範圍に及べば、ウキーンは何といつても往昔からの傳統が物をいふところ、凡そ現世の享樂的分子ならどんな些細なものでも見逃さずに取り入れるといつた一種の情熱を有してゐる。されば、歐洲の貴族や富豪で南佛あたりに遊び飽きた濫い連中は、ウキーンへやつて来て一週間とか一と月とか贅澤な遣方で滞在して酒だ女だと騒ぎながら持金をバラ撒いてゆく。この種の需要に應ずべく、ウキーンにはいろんな姐御が果を張りよりも旺んでもあるし、また表面優雅なヴェールに蔽はれてカモフラージュされてもゐる。しかし、ウキーンなどといふところは結局は廢頹的で亡國的で、要するに俺などの氣に入る場所ではない。

以上を以て獨逸・チエツコ・塊地利・洪牙利の四ヶ國に跨る飛行機旅行の記事を終る。たつた二日間の見物ではあつたが、氣心の合つた四人が會の羈絆を脱して何の束縛も受けぬ自由自在の旅、機上地圖を掌の上に展げて俺の大好きな各國

の地勢——山脈・湖沼・河川・道路・田圃・森林とか、文化都市・農村等を飽かず眺め入つたあの樂しさ、蓋し、世界一巡旅行中の白眉となるであらう。

カイザー・ホーフに戻つてから聞けば、山崎氏やマリールキズさんなどの五六人は、ミュンヘン・ブラーグ・ウキーンの三都市を汽車と飛行機を利用し、やはり二日間のコースで廻つた由だが、夜行列車などのためかかなり疲勞してゐた。

「第二十信」伯林のカイザー・ホーフにて認む

塊洪旅日記の補遺

ブダペスト・ウキーン兩首都訪問の記事は、——最初伯林出發に際して飛行機上では到底書けまいし、またウキーンに於ける慌しい一夜の宿りでは尙更そんな暇はなからうと、原稿用紙を持つて行かなかつたのが失策で、前便の通りグラント・ホテルのレター・ペーパーに蠅頭大の文字でクシャクシヤに走り書きしたが、俺の手紙を讀むに特殊の熟練を積んで

ゐる秀雄と雖もさぞかし難解であつたことであらう。

今日は伯林の宿のカイザー・ホーフで、馴染の原稿用紙に向ひ、少しはゆつくりペンを運びたいと思ふ。七月三日東京發のお前の手紙は昨日この地で受取つた。紀行文について、餘り筆まめの怪腕を發揮せず、毎日日記體に最も印象の深刻なものだけを簡單明瞭に書いてくれといふお前の注意も尤もではあるが、俺はやつぱり人一倍うんと見物して、一枚でも多く覚え書きを作り、そして終生の思ひ出の材料としたいのだ。俺は、人が本稿に興味を有たうが有つまいがそんなことはどうでも構はぬといふ主義なのである。一行の中、俺位寸陰を惜しんで見聞に熱中してゐる者はなからうし、俺の原稿書きは皆のひやかしの種になつてゐる。その代り、一行中の九十パーセントまで耽るところの夜の享樂には、俺は決して参加しない。馬鹿々々しくてやれたものぢやない。俺は精力はあり餘つてゐるんだが、そこへいくと平素の好習慣が物をいひ、極めて清節を持つてゐることを得てゐる。

餘談は扱て置き、前便は何しろウキーンから伯林への歸途の機上僅か二時間ばかりを利用して書いたので、書き足りな